

SIREN in Bloodborne

猫屍人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

異界でのみ、彼は存在を許される。夢も現も不確かな古都ヤーナムにこそ、相応しいのかも知れない。

新たな異界入りだ。

# 目次

蒼炎	炎雷	白痴	縁由	聖火	無謀	青雷	秘匿	烏羽	家族	再聴	異界
189	174	159	143	126	110	94	75	56	36	18	1

扁桃



# 異界

異界を殺してはまたひとつ。異形を殺してはまたひとつ。

煉獄の炎が立ち上り、赤い涙を流す異形を焼き尽くす。鉄のように重たい火の雨が、飛び回る人の面影を残した異形を撃ち落とす。握りしめられた土偶が掲げられ、その世界に巣食う異形のすべてが掻き消える。

炎だけではない。振るっていたのは日本刀。不可思議な青い炎を僅かに纏った刀身には「生」の文字、いや、マナ十字架という信仰のシンボルが掘られている。

握っているのは少年だ。まだ人の姿を残しているとはいえ、怪物を殺せるなどと言っても到底信じられないような、少し夕方の銜を探せばいるような少年でしかなかった。

「(ハハ)も、終わりかな」

少年、須田恭也はその体を薄れさせながら呟いた。

彼はとあるオカルト掲示板の書き込みから自転車を駆り、山間部にある羽生蛇村という村人たちの儀式に巻き込まれた経歴を持つ。その贄として殺されようとしていた少女を救い出し、一緒に行動し、そして犠牲になってしまった少女の願いに応え、異教の神と崇められていた化物の首を落とすという偉業を成し遂げた。

だからこそ、彼は神殺しに相応しい非日常へとその身を墮とされてしまっていた。

身体が透けているのは、その場所が異界ではなくなつたから。そう、彼は普通の世界に存在することを許されず、異形が犇めく異界でしか生きることができなくなる輪廻に囚われているのである。

「美耶子、どこまで続くんだろうな」

彼の背後で、彼よりもずっと存在の透けた少女、美耶子が流す涙もなくなつた身体で悲しみのあまりに顔を歪めた。だが、彼はそれを知覚することは出来ない。これもまた、彼の……いや、彼らに課せられた呪いであつた。

かつて約束しあつた二人は何よりも近い距離に居るにも関わらず、恭也は美耶子の特別なものが見える視界を借りるという能力でしか彼女がいることを知覚できない。また、少女は声を出そうとも決して彼に届かず、手で触れようにも決して触れない。

それでも、かつての約束で彼らは異界を巡り、異形を殺し続けている。それは何故か。もう、彼は約束の理由すら忘れてしまつてゐるのに。

幾度となく繰り返され、時間という感覚すらも消え去つた彼にできるのは、異形の存在を狩り尽くすこと。その先に何があるのかは分からないが、「もしかしたら」。それを想うだけで、また彼は立ち上がった。

もう、時間だ。

恭也はその世界から消え去る直前に、ふと脳裏をよぎる約束の少女の姿を思い浮かべた。思い浮かべたはずだった。

どうしてだろうか。彼女の顔は、どんな顔だっただろうか。  
彼女の声は。

獣狩の夜が始まった。

秘匿で空は覆い隠され、獣が蔓延る街には蕩けた瞳の民衆が、獣を狩らんと一念発起。されど彼らは気づかない。すでに獣とは無縁のモノを獣とみなす、自分たちこそが獣と成り果てていることに。

此度の夜はとても長い。狩人はまだか。狩りの成就是まだかと、家屋に閉じこもる民衆は焦る気持ちとともに狂い始める。または、狂う前に家屋の扉を巨大な獣に食い破られ、恐怖とともに臓腑をぶち撒けている。

そこは地獄か。いや、その街こそが医療と神秘に見えた現実の街「ヤーナム」であった。

街を歩くは獣ばかり。

街が照らすは血にまみれた獣ばかり。

振り上げられた爪は新たな獲物を切り裂いて、路地をすり抜ける弾丸が獣の脳漿を撒き散らした。

ぼんやりとした景色が薄れていく。

須田恭也が意識を取り戻す頃には、先程まで居た場所とは全く違う様相を呈していた。いつもと変わらぬ異世界の景色は、相も変わらず不定形に満ちあふれているはずであった。焔薙ではなく、背中の猟銃を取り出した彼は、数発の弾丸で毛むくじやらの化物をようやく撃ち殺して、はたと気づいた。

「あれ？ どこだここ」

これまで彼が巡ってきた異界は、コンクリートジャングルや日本の様式を各所に残した、平たく言えば国内にて発生した場所に限られている。ある程度の現代様式が見受けられたり、最近になって言えばタッチパネルの携帯電話という、自分がまだ高校生をしていた頃には信じられないような便利なものが出回っている位に時間も進んでいたはずだ。

しかしだ。彼が見渡すのは薄暗い路地、それもレンガが目立つ建造物。いまほど撃ち



殺した化物が喰らっていた人間らしき残骸も、その顔を覗いてみれば深く彫りのある顔は日本人とは到底思えない顔立ちである。看板など目立ったものはないが、その遺体が持っていた所持品には明らかにアルファベットが並んでいた。

なにかがおかしい。いつもどおりに殺すだけでは到底終わらない予感がする。いくつもの異界で命のやり取りをしてきた彼は、もはや普通の高校生では持ちえない姿勢で探索を始めることにした。疑わしきには銃口を向け、この狭い路地だからこそ唐突な奇襲に対応できるように右手に刀を、焰薙をしかと握る。先程撃ち殺した獣のような化物が一体だけでも限らない。なにより恭也はそういう場所を渡り歩いてきたのだ、ここで警戒を怠るなどという愚かな選択肢を取るつもりはなかった。

とはいえ、まずは現状の把握から入らなければこの異界を消し去ることもままならない。ずいぶんと入り組んだ街だなあと、路地裏であろうその場所を歩き始めた恭也は、まだ何とも出会わないうちに思考を巡らせた。幸いにも彼が平静を取り戻すことと、これからどうしようかと悩む時間は、迷路のように進みづらく、表通りには出られない道が作ってくれている。

巡る思考の合間にちらりと覗いていた、家と家の間の向こう側の景色からは、谷にでもそのまま建てたのかと言わんばかりの高低差どころでは済まない立地の家すらも見える。そしてやはりと、この異界の膨大な広さに頭を悩ませた。ここまで広いともなれ

ば、一筋縄ではいかないだろう。美耶子との約束で全てを消し去るまでの時間が長くなる。自分がどういいう存在であったかがわからなくなる時間が伸びる。それは、苦痛であるのだから。

それでも進むしかないというのは自明の理。入り組んだ地形を進んだ彼は、ようやく隙間から自分の体が出られそうな場所をみつけ、その塀を乗り越えるため出っ張った場所へと手をかけた。高校生から大学生ほどの体つきになった彼は、すいすいと登つていき、

「ん、しよつ……つとおー！」

すたん、と塀の上に上り詰めた彼は、おもむろに頭に手を当て呟いた。

「美耶子」

片目を閉じれば、恭也の頭に僅かな痛みが走った。

そして閉じたはずの視界には、彼では見ることができないはずの視点が広がっているではないか。

見えているのは、彼がいる位置よりもずっと高い位置から見渡す景色だ。一切知覚できないはずの美耶子があるという証明であり、かつては彼の目を使って盲目なはずの美耶子が行っていた視界の間借り。ここでわかりやすく言うならば「視界ジャック」といふべきだろうか。そして、彼が唯一、美耶子が側にいるという実感を得られる

方法でもあつた。

開けた場所でこれを行った理由は簡単だ。常人の目では見渡したところで危険はないが、美耶子の普通では見えないものを見る視界を借りることで、他の危険を見つられる。それだけのことであるが、何もかもが未知の法則によつて成り立つ異界においては重要なことである。他にも、自分では見えない場所を肩越しで見わたすと新しい発見もある。今回はその後者の理由が適用されたようだ。視界ジャックを取りやめた恭也は、ほんのりと紫色に光るランプのようなものが見えた場所へと走り始めた。

道中は住宅街であつたらしい。切り裂かれた、人間らしき死体や人間より遙かにガタイのいい人型の死体が転がっている。化物同士の仲間割れも彼にとつては経験済みとはいへ、多少の違和感もあつた。死んでいる者同士の武器では到底ありえない、荒々しい傷跡は血と臓腑を必要以上に撒き散らしているのだ。道中には人の気配がある明かりの灯つた家もあつたので注意喚起をしようとしたが、ひたすら笑い続けている薄気味悪さと、オルゴールの鳴り響く家は細やかながらも頑丈な鉄柵の向こう側であつたなど、人との接触を断念せざるを得ない、この異常事態を想定していたような頑強な造りの家々が接触を阻んでいた。

久方ぶりの人との接触も期待していた彼は、気持ち切り替える。とにかく今は美耶子の視界を通して見た大橋の上へと急ぐべきだろうと。幸いというべきか、この異界は

見たままの距離だったようで、住宅街を抜けた階段を登ればすぐに目的の場所へとたどり着くことが出来た。眼の前には逃走を頓挫したであろう、家財一式をまとめた馬車の中の商品を散乱させている。それだけならば良かったのだが、やたらと手足の長い獣二匹が家財をべきべきと踏み荒らしており、時折食料品らしきものに喰らいついている。御者の姿が見えないところを見るに獣の餌の仲間入りを果たしているのだろうか。

大橋はどこか町の外にでも繋がっていたのかもしれないが、恭也が目指すのは荷物で防がれたそこではなく、反対側。大きな門の見える向こう側へと通じる橋の真ん中である。そこに、美耶子の視界でひとときわ異彩を放っていた紫のランプがあつたはずだ、と。「さっつきのと同じヤツか」

そのためにも目の前の黒い獣は邪魔だった。先程殺せた相手と同じタイプとはいえ、4つ足の敵というのは背が低いので刀も振りづらく、厄介なものが多い。警戒は怠つては居なかつたが、目の前の二匹は獣のくせに匂いに気づいていないのか、のんきに徘徊している。好機であるのは間違いない。二匹のうち、手前に居た方へと、恭也は臆することなく刀を構え、切りかかった。

彼が振るう焰薙には、冒頭で恭也が放っていた煉獄の炎が込められている。そして炎は獣が恐れるべきものであり、この異形の獣に対しての効き目は抜群であつたらしい。僅かに炎を纏った刀身で一度切りつけられた獣は、その身を焼く刀傷と炎の痛みに怯ん

だ隙に返す刀で切り捨てられた。その残骸は傷口から蒸気を発して倒れ伏し、焰薙の炎を移されやがて火だるまになっていく。

だが問題は二匹目であった。片割れが攻撃されたという異変を察知しないはずもない。その片割れを殺したばかりの恭也に向かい、不揃いな長い爪を閃かせながら飛びかかった。キラリと月光に僅かな滑らかさを備えた爪が煌めいて、宵闇に3条の白い線を描き赤い飛沫を撒き散らした。

「うっ!？」

その速度は、尋常成らざるものであった。これまでよたよたとした元が人の異形ばかりを倒していた恭也に反応しきれるものではなく、手痛い先制攻撃を為す術なく受けてしまう。咄嗟に振り返っただけでは防ぎきれない爪は恭也の左腕を深く切りつけ、骨までもを傷つける。容易く肉を裂いた感触に味をしめ、獣は嗤うように後退して足の筋肉を膨張させた。只人ならばそのまま終わっただであらう反応を期待して、今度は大口を開けて飛びかかった獣は、己が確かに嗤っていることを感じていた。それが、獣の最期の思考。獣が思い描いた理想とは程遠い、炎が脳を焼き尽くす痛みが獣の身体を糸の切れた人形のようにうなだれさせた。

恭也は息を切らしながら、突き出した焰薙の切っ先を突き刺さった獣の喉奥から引き抜いた。そう、獣は恭也の血肉を喰らったのではない。自分の飛びかかる勢いそのまま突

き出された刀のカウンターを喰らっていたのだ。そのまま頭蓋を貫かれ、纏う炎が脳を焼き尽くす。最期の意思すらも灰も残さず煉獄の炎が獣の遺骸を包んでいき、そこには怪物など居なかったと言わんばかりの静けさが帰ってきた。

対して、残された恭也は解けた緊張から大きく息を吐き出し、怪我口を反対の手で抑えながら橋の柵へともたれかかった。確かに常人ならばもう後の人生に影響を受けるであろう怪我だったが、恭也には美耶子の祝福とも取れる不死の恩恵がある。だからこそ、どんな攻撃を受けようとも、どんな怪我を負おうとも、彼はその怪我をすらものともせずに異形を殺しつづけてきた。

じわじわと傷が塞がる不快な感覚に慣れることはないが、それもすぐのことだ。神代美耶子という少女の血の意思が、彼の身体にあるべき姿へと戻していく。やがて完全に傷口がふさがった左腕を開いてはもどし、確かめるように握りしめる。どうやら、今回も後遺症などが残るなどと言った心配はなかったらしい。

立ち上がった彼は、焔薙を握る反対の手に煉獄の炎を生み出す神の道具「宇理炎」を握った。盾の文様が腹に掘られた土偶にしか見えないそれは、人間の命を使って異形を焼き尽くす炎を呼び出す、かつての異形の神とはまた違った神が生み出したであろう神器だ。

恭也がこれを取り出した理由は単純だ。

——オオオオオオオオオ……

橋の向こう側から聞こえてくる遠吠えが、空気を震わせ恭也の鼓膜を嫌という程揺らがした。

先程殺した獣の比ではない。体全体を震わせる声は、間近で巨大な太鼓の音色を聞いたときのように全身を浸透していった。巨大で、恐ろしい獣が恭也の危険意識を喚起させている。だから、最大の武器を取り出したのは何も間違いではないのだ。

「さっきまでのやつはただ斬れば死んだみただけど、これはヤバいかも」

これまで恭也が異界で相手をしていた異形の者たちは、この宇理炎の生み出す煉獄の炎でなければ、世界が降らせる赤い雨や、死体に取り付く薄暗い幽体によつて何度も蘇るような、弱いがしぶとい存在ばかりであった。しかし、それらの元となる巨大な異形、彼にしてみればボスとも言える存在は、いずれも宇理炎の力を使わなければ滅しきれない手強い輩ばかりだ。

不死身とはいえ、吹き飛ばされて気絶すればその戦いは恭也の負けとも言える。それに獣だ。気絶したあと、いくら不死とはいえ身体を貪り食われるなんてたまったものではない。そんなイメージが、彼の闘争心にいつそうの火をつけた。

それに、希望もあつた。

これまで巡った世界とは何もかもが違つて感じられる異界だ。非常識であるこの事

態に備えたような造りの建築物。そして、家の扉の向こうには生きている人間もいるよ  
うだし、何かしらの話を聞けるかもしれない。

もしかしたら、この大木を何とかする頃には美耶子とも。

淡い期待ではあったが、人間の原動力とはそんなものだ。裏切られる可能性が大き  
くとも、縫れるものにはつい手を伸ばしてしまう。

そうして橋の中頃にまで辿り着いた恭也は、邪魔をしてきたやけに大きなカラスを切  
り捨て、薄い霧がかかった不思議な入り口を見た。遠くから見たときはなんともなかつ  
たが、近づいてみると人の侵入を阻むように白い霧が入り口だけを覆うように発生した  
のだ。

手を突っ込んで見れば、その霧は実態がある綿のように掻き分けられる。僅かなその  
間をくぐった恭也は、再び美耶子に合図を送り、視界ジャックを試みる。普通の視界で  
は見えなかったが、向こう側の巨大な門とちようど真ん中ほどに、例の不思議な紫の  
灯りがあった。

「これか……」

先程の巨大な獣の遠吠えもあり、恭也は片目を美耶子の視界にし、片目を普通の視界  
のままにしてゆっくりと歩みはじめた。宇理炎と焰薙を握る手に力が入る。獣だらけ  
のこの街で、もしかしたら先程の遠吠えの主がこの異界の親玉かもしれないからだ。





四肢は毛に覆われているだけで細いものだ。また無理に二本足で立った姿勢にこそ付け入る隙があると判断した恭也は焰薙で切りつけた後、宇理炎を掲げて煉獄の炎を下から立ち上らせる。己を傷つけた獲物へと獣が反撃しようとした瞬間、目の前に立ち上った火柱には生存本能が警鐘を鳴らしたのか、白い獣は凄まじい速度で橋の像を破壊しつつも飛び退いた。

ただの獣ではない。判断ができるやつだとわかり、恭也は内心で舌を打つ。だが彼が新たな悪態をつく暇はない。炎が消える瞬間に機を見計らった獣が再び豪腕を振るって攻撃してきていたのだ。一撃でももらえば、先程恭也が想像したとおりの事態になるだろう。

ここまで自分の側が不利な戦いも久しいものだ。咄嗟の判断で獣の拳を避けた恭也は、今まで獣が使っていないなかった右手の側に潜り込んだ。そして宇理炎ごと両手で焰薙を握りしめ、バットの殴打のようにして敵の足へと斬りかかる。

——ウギアアアアアアツ

それは先程切りつけた場所だった。二度目は渾身の力で切りつけたためか、獣は右足から膨大な血を迸らせながら人間のような悲鳴とともに片膝をつく。この時点で恭也は何かを察していたが、このような異形を殺すのはもう初めてではない。こんな化物に成り果ててしまったであろう者へ謝罪を告げながら、恭也は容赦なく左手に握る宇理炎

から再び炎の柱を呼び出し、それを獣へと浴びせようとした。

「なんでだ!? 出ない!？」

だが、煉獄の炎は出なかった。これまで使えていたのにいきなり何故、と混乱する恭也とは裏腹に、己を傷つけられたことで怒り狂った獣が握っていた拳をほどき、その巨体に見合った手を大きく開いて彼へ伸ばした。完全に隙だらけになってしまった恭也にその攻撃を避けることはできず、胴体をまるで玩具の人形のように握られてしまう。

玩具の人形と違うのは、恭也には握りしめられた痛みが走っているところだろう。その握力は恭也の内蔵をいくつか潰し、肋骨すらへし折ってみせる。もちろんそれで終わることはなく、獣が凄まじい唸り声をあげたかとおもえば、恭也はボールのように橋の壁へと叩きつけられた。

跳ねることはなく、そのままズルリと地面に落ちた彼は血塗れで、満身創痍であった。それでも武器を握り、血を吐き拭って、身体の痛みを気にすることなく白い獣へ躍りかかる。

「おおおおおおおおおっ!!」

——ギャアアアアアアアアアアアアッ

どちらが獣か、わかったものではない。恭也のほうが明らかな重症ではあるが、その闘志は負けることはない。むしろ、その動きは先程二匹の獣を相手していた時よりも

ずっと良く見える。

刀を握り、振るう仕草は洗練されていく。素人剣術はより効率よく肉を切り裂く手段へと上り詰め、宇理炎も最初の勢いこそないが、大技ばかりではなく僅かな発火によって巨大な白い獣の動きを牽制し始めている。先程まで大ぶりの動きしかできなかった恭也が、一体なぜこのように戦えているのか。

彼が獣の蕩けた瞳と視線をあわせたとき、彼の背筋を震わせた何かが入り込んだようにも見えたのはわかっていただけだろうか。このヤーナムにおいては、暴力はもちろんだが、他にも真実と知識がなによりも謎と強大な敵を紐解くための手段となりうる。

決して知り得るはずのないその知識は死体や、巨大な敵と見えた時、ふとその人間に降りてくる。それをこの世界では言い表すのならば、「啓蒙」。無知なる者を上位者へと正しく導く、細い光の糸。

その糸を手繰り寄せるように、恭也は無心に刀を振るい、やがて炎を今はもう出せないかと判断して宇理炎を仕舞い込み、正しく両手で刀を握った。

気づけば、白い獣も恭也と同じように満身創痍の身となっている。ぜひゆつ、と肺から不揃いに飛び出す呼吸は獣の判断を鈍らせており、逆に啓蒙を得た恭也は無意識に、この巨大な獣との戦いに必要な呼吸と姿勢で挑んでいる。

もはや決着は見えていた。それでも命を諦めきれない獣は、よだれと血を撒き散らし

ながら一心不乱に恭也の元へと飛びかかった。飛び立つ体勢も崩れた、捨て身の自分の体重による体当たりだ。しかしそれが悪あがきでしかないと何よりもわかつていた恭也は、飛びかかる獣の顔面を、縦に割るように刃を振り下ろした。

焔薙は毛を切り裂き、肉を切り裂き、やがてはその獣の臓腑を焼き殺していく。

すり抜けるように刀を振るった恭也は、血まみれになりながらも背後で地面へ倒れ伏した獣へと向き直った。

もう、起きる気配はない。

そして恭也もまた限界であつた。茶色の髪をべつとりとした血にひたしながら、全身を蝕む激痛とともに意識が白濁していく。なによりも支えとなつた己の武器を取り落とすことこそ最後までなかつたが、その左腕を投げ出して恭也は身体を地面に投げ出し、指一本も動かせぬままゆっくりと白んだ視界を閉じていく。

完全に暗転する直前、視界の端に仄かに光る紫色の灯りが僅かに見える中、彼は薄れつつある意識のなかで決して忘れられぬ声を聞いた。

「恭也！」

忘れそうになっていた、愛しい愛しい、あの子の声を。

## 再聴

「恭也！ 恭也！ こんなところで寝ちやだめ！」

肌寒いヤーナムには似つかわしくもない、黒いワンピースの少女は声が届かないとわかっていても、倒れ伏した恭也へと必死に呼びかけることをやめなかった。たとえ言葉を交わせなくなつたとしても、この永遠の不死身の呪いを与えてしまつた恭也へと向ける感情には、死した後も変わることはないのだから。

そんな彼女の名は「神代美耶子」。須田恭也が神殺しを成し遂げた羽生蛇村の生贄の巫女である。先の死闘の折、彼女は宇理炎の異常にいち早く気づいていたのだが、視界を貸す以外のアクションを取れない美耶子は、みすみす恭也の危機を見逃してしまつた悔しさに歯噛みしていた。

このような事がこれまででなかつたわけではない。その度に無力感を噛み締めながらも、精神が幼いままの美耶子は、それでもこうして必死に届かない言葉と呼びかける以外のすべを持たない。

「恭也……」

涙を含んだ声色とともに、決して触れられない手を気絶してしまつた恭也へと翳す。

もちろんその半透明の手はすり抜けてしまう。たとえ神の復活がなされてしまっても、こんなことになるのなら、恭也に血を分けなければよかつた。もう何度目になるかもわからない後悔が、不変であり続ける彼女の感情を蝕んでいる。狂うことすら、許されないのに。

その時であつた。

カツン、と硬質な音が恭也の進んできた方向から一定間隔で美耶子の耳に聞こえてきたのである。ハッとそちらを凝視した彼女は、橋の途中にある小さな門をくぐつたところに、人影が立っているのを見つけた。

厚手の布地で全身を覆つており、目元以外は口元まで隠されたマスク。しかし厚手の見た目に反して動きやすそうなその人物が一步を踏み出す度に、帽子に刺さる枯れた羽が揺れている。だが、特筆すべきはそんなところではない。その人物が腰元に吊るしている短銃。そして無骨な木製の持ち手に幾重に結んだボロボロの布、そして未だ血が滴るノコギリの刃。鋭利なナタのようなそれを、その人物が持つている。

当然、美耶子の警戒度は跳ね上がった。

「恭也！早く起きてー！」

新しい敵なのだろうか。両手をぐつと握り、聞こえていないとわかつていても警告のようにな彼の名前を呼び続ける美耶子。血塗れの恭也はその言葉に込める意識を取り戻

しておらず、未だ塞ぎきつていない傷口から血を流し続けている。

そうして何度も呼びかけるうちに、ふと彼女は異変に気づいた。美耶子が叫ぶ度に、その厚手の服を着込んだ人がキョロキョロとあたりを見回しているのである。まさか、と美耶子が一つの可能性に思い至った直後、その人物はマスクを指で摩り下ろし、口元を踵にしながら低い男の声で喋ったのだ。

「誰だ、どこにいるんだ。この声は」

「おまえ、聞こえてるのか」

目を見開き、確認のように訪ねた彼女の言葉に、その人物はためらいがちに頷いた。

「あ、ああ。そうらしい」

確定だ。姿は見えないが、この人物は美耶子の声を聴くことが出来ているらしい。

「なあ、おまえ。恭也を助けて！ このままじゃあの化物に食べられちゃうー！」

「キョーヤを助ける……この、異邦の服の少年か？ だがこの傷では」

「わたしの血が混じってるから、もう傷は治ってる！ だから安全なところに！」

畳み掛けるような物言いにこの人物も思うところはあろうだが、せつかく見つけた「まともな」生き残りだ。この人物はそう思えるだけの感性は持っているようで、一考の後に絞り出すように声を出す。

「安全な、所。なら、心当たりがある。だが貴公、なんだ？ ヤーナムの、特別な血の提



供者であるのか……？」

その質問に、美耶子はなんと表現すべきか思い浮かばず、声をつまらせる。

「いや、こんな街だ。不躰な質問を許せ。それより貴公、ともに来れるのか？」

「あ……う、うん」

「ならいい、少し待っている」

その人物はまっすぐにとある場所へと歩みを進めると、目的の紫色のランプに向かって手をかざした。すると、そのランプにはより強い光が灯ったことが美耶子の目に見えた。

「これでいい、はずだ。抱えるぞ」

「お願い」

美耶子にとって、彼のランプを灯した行動がどういったものなのかはわからない。だが、やることはともかく、恭也を助けてくれるような人物であるということは確かであるらしい。その人物は恭也と共に焔薙、そして宇理炎をひろうと、どこからか取り出した革の包みにまとめて紐で縛り上げ、その肩に恭也を担ぎ上げた。

美耶子も会話ができたということの奇妙さになんとも慣れない感覚をいだきながらも、恭也を背負ったその人物を追いかけ、その近くを浮遊していく。

道中、マスクを再び鼻の上まで戻したその人物が無数の新鮮な死体を踏みしめながら

複雑な作りの廃屋に身を忍び込ませた。暗いそこを抜けると、再び代わり映えのしないヤーンナムの町並みが顔を覗かせる。

そんなときだった。突然、その人物がためらいがちに声を発したのである。

「それで、貴公。なんと呼べば？」

「わ、私は美耶子」

「ミヤコか。私は、そうだな…狩人らしい。名は忘れたが、そう呼べばわかる」  
「え」

唐突な身の上語りには重い話題だ、美耶子の動揺は当然といえよう。狩人も少し振るにしては突然に過ぎたかと思ひ直したのか、恭也を担いでいない方の手で帽子のかぶりを直しながらも、謝るように言う。

「気に病むな。私も思ひ出すために青ざめた血というものを探してるんだが、聞いたことは」

「ごめん、わたしは知らない」

「そうか……ふ、まあ、そうだろうな」

その人物は見た目に反して存外に心配りをしようとする人格であるらしく、ぎこちないなながらも美耶子との会話を続けようとした。それに美耶子自身も現状「異界」とも呼べる場所でもともに話ができる人間と出会うのは稀なことだった。友好的であるのな

らば、と彼との会話を拒むようなこともしなかった。

「この童は、なぜここに？ それにあの巨大な獣を屠るとは、このような細い武器で大したものだ」

「わたし達は、ぜんぶの化物を消すために渡り歩いてる。でも、ここは今までとぜんぜん違うんだ。あんな獣みたいなものなんて今まで見たことなかったし、恭也も苦戦してた」

己を狩人だと語る人物は、この声だけの少女と語り合うことに不可思議な縁もあるものだと感じていた。彼も、これまで経験した夢のこと、この街に訪れてから引き起こされる数多の怪現象に比べれば姿のない少女の声など、可愛い方だと思っていることもあるだろう。

そして幾度かの自己紹介が終わった頃、狩人たちは昇降機を抜け、また小さな橋を渡り、墓地へと辿り着いた。

「安全な場所はこの先だ」

狩人は、墓地の階段を登った先の開いた鉄の門を

「恭也は休めるかな」

「この先のオドン教会は赤いボロ衣の男が獣避けの香を絶やさず焚いている。はしごがあるから彼を背負っては登れないが、この墓地から先なら安全なはずだ」

「あの、ありがとう」

おずおずと告げられた感謝の声は、狩人がこの街で意識をはつきりさせてからは聞かなかった素直なものだ。面食らったように瞠目するが、よりによつて姿も見えぬ相手に言われるとは、と小さく息を吐く。それでも隠しきれないものもあるのだろう。喜色の籠もつた声色で告げた。

「まともな生存者が居るのは喜ばしいことだ。さて、私も少々やることがある。一旦失礼しよう。貴公らの旅路にも光明があらんことを」

そう言うとき、狩人は階段の先の門のあたりに恭也と彼の武器を置くと、軽く手を降つて美耶子にも別れを告げる。おもむろに階段を降りたかと思えば、墓地にもあつた紫の灯りに手をかざした狩人の姿は霞むようにして消えてしまった。先程の大橋のランプにも同じようなことをしていたのだが、それはこのためだったのかと美耶子は納得する。

異界の不可思議な法則は物理法則を無視した出来事が多い。狩人もまた、その権能に順応できる側なのだろうと、彼女は当たりをつけていた。

「う、ううん……？ 俺は……？」

「恭也！ よかつた……」

それから間もなくして、すべての傷が癒えた恭也に意識が戻ってきたらしい。だが、なにやら様子がおかしい。自分の体の状態よりも気になることがあるのか、彼は目を見

開いて固まっていたのだ。

彼女の感じた疑問は、次の瞬間氷解することとなる。

「…その声、美耶子なのか」

「きょう、や?」

「美耶子、美耶子なんだよな?!」

「聞こえてるの? わたしの声が」

震えた美耶子の声が、確かめるように問いただす。

恭也は大きく、その首を縦に振った。

「聞こえる。わかるんだ……わかるんだ!」

「あ、う」

この数年間か、数十年間か、もう時間の感覚すらも狂っていた異界の殺し合い。すり減っていく恭也の心と、何度絶望を味わおうとも折れることすらさせない美耶子の心。それがついに通じあつた瞬間であつた。

だからこそ、美耶子が感涙しその場でむせび泣いてしまったのは仕方のないことだろう。それに慌てふためいたように慰めの言葉をかけようとする恭也だが、うまく声が出せない。

「あれ、なんで、なっん……俺、美耶子…美耶子!」

当たり前だ。彼もまた、心の震えが止まらなかった。

守ると誓って守れなかったあの少女が、もう聞くことも見ることもないと思つていた、記憶の片隅で擦り切れていったあの姿が、この声だけで鮮明に蘇つてきた。かつての約束も、あの村の廃屋で誓つた思いも。

それと同時に、恭也の中には希望も生まれた。きつとこの現象は、あの白い獣の怪物と対峙したときに流れ込んできた「なにか」の影響だと。感情に左右されがちな自分が、妙に頭を冴え渡らせたアレを何度か溜め込めれば、美耶子を「見る」こともできるんじゃないかという希望だ。

それは煮詰めてきた絶望の中で探し出した、小さな光の粒。確証はなくとも、確信があった。それもこれも、あの謎の「知恵」のおかげだろうか。踊らされていたとしても、それでも手にできるのならば。

そこで恭也はふと気がついた。自分が倒れていた場所とは程遠い、墓地のような所に自分が横たえられていたことに。

「美耶子、そういえば俺、なんでこんなところにいるんだ？ 死んだのか？」

「っ、ばーか。恭也は死んでないよ、狩人つてヤツがここまで運んでくれたんだ。そいつも、恭也みたいに話ができた」

「そんな人が居たのか。今度お礼を言わないとな。あ！ 焔薙は?！」

「それも狩人が持つてきてくれた、右のそれ、あけてみて」  
「あつた！」

ひとまずは自分の最大の武器が無事なことにホツとする恭也。これがなければもしこの異界から出ることが出来ても屍人を殺し切ることが出来なくなるし、それに命の危機にあつてきた以上、これまで信を寄せていた道具がなくなることに不安も大きかつた。

ともなると、あとはもう一つだな、と恭也は背中をまさぐるのだが。

「あれ？ 猟銃は？」

「えと。それはさっきの、戦いで」

「……叩きつけられた時か」

美耶子の言葉に思い当たるフシがあつて、その時の痛みを思い出しながら恭也は肩を落とした。あの獣の巨大な手に握られ、壁へと投げつけられた時、恭也は背中に背負つていた2本の猟銃ごと叩きつけられている。神の武器でもない、ただの銃がその衝撃に耐えられるかと言われればそんな奇跡があるはずもないわけだ。

「まずいなあ。どうしよつか、美耶子」

頭の後ろを搔きながら迷う恭也に対し、美耶子はある考えに思い至つたらしい。

「あ！ さっきの狩人、そういえば短いけど古そうな銃もつた。あいつも最近狩人に

なった、って言ってたし、聞いたらくれるとこ教えてくれるかもしれない」

「それだ。さすが美耶子。冴えてるなあ」

「恭也は考え足りてないこと多すぎじゃないか。前、羽根の奴に正面から突っ込んできりの向こうにいたヤツに撃たれたときも——」

グチグチとこれまでの危なかったシーンを語られて、恭也はムスツと表情を固くしたが、直後に嬉しそうに顔をほころばせた。視界ジャックを使っていなかったときも、美耶子はいつでも見ていたのだ。恭也が選んだその道を。それがなによりも嬉しくて、恥ずかしそうに恭也は言った。

「そっか、見ててくれたんだな」

「あ、当たり前だ！ ケルブのほうが賢かったくらいだしな！」

「ひでえ、それは言いすぎじゃないか」

真面目な話をしようとしては、数少ない思い出に話が戻ってしまふ。平静を保とうとしても、どうしても気持ちが高ぶっているのは両人が自覚している感情だった。それでも、仕方がないじゃないか。こうして談笑していても、どうしても涙が溢れてくるのだから。

「それじゃ、行ってみるか。まずはそのオドン教会つてとこに」

「うん、この向こうに行つてハシゴを登れつて言つてた」



これまで話せなかつた分、とまではいかずとも、美耶子も狩人から道中に教えてもらったこの街のいくつかの事情を聞いた恭也は、今回訪れたこの場所がただの異界ではないと感じていた。そして協力できるのなら人がいるところに行けばいいと思いたち、まずは「安全な場所」として紹介されたオドン教会の「赤いボロ衣の男」に会うと決めたらしい。

美耶子のアドバイスどおりに進むと、水路につながっていらしく足元がびしょ濡れにさせられてしまったが、長く高いハシゴが目の前に見えてきた。

先程の狩人が置いていった革と紐で宇理炎と焰雍を背負うように固定した恭也は、触れるだけで痛いほど冷たいハシゴに辟易としつつも、カンカンカンとリズムカルに上を目指した。

「ねえ恭也」

「どうしたんだ」

「この先はきつと、あの狩人みたいに聞こえる人は居ないかもしれないから、少しじつとしてるね」

「遠慮すんなよ。なんか気づいたことあつたら喋っていいからさ」

「ううん、でも何となく分かるの。多分、声は聞こえないと思う」

「ふーん、そっか。わかった。美耶子がそう言うなら俺もちゃんとする」

やがて薄暗い階段と、小さな部屋を抜けた先に厚く頑強な木製の扉が見えた。扉はすでに開かれており、むせ返るような煙つぼさが漂ってくる。それでいて悪くはないと思える香の匂いが恭也の鼻孔をくすぐってきた。

「おお、あんたも避難してきたのかい？ ヒヒツ……よかった、ここは安全だよ」

恭也がその扉をくぐり抜けて数歩もしないうちに、赤いなにかがもぞりと動いたかと思うと、それは大きすぎない声で話しかけてきた。こちらを案ずるような内容だったが、恭也はその声の主を見てギョツとってしまった。

骨のような細い体躯に、常人よりも長い指、極めつけは瞳すらも真つ白な目を醜く歪み、黒ずんだ顔にはめ込んだような形相だ。話し方もたどたどしいものであり、言葉に反して怪しい、という印象を抱いてしまうほどのもの。

だが、そんな感情を機敏に感じ取ったのか赤い衣のそれはいいんだ、と笑った。

「ヒヒツ、ごめんよ、俺の姿で驚いたのかい。いや、俺なんかが謝っても意味ないかもしれないけどさ」

「いやいや、こつちこそごめん。驚いちゃったんだ」

「……あんた、いい人だね。ヒヒツ。でも気をつけな。この先にひと足早く避難してきた御婦人がいるから、あんたは余所者の匂いがするから、この住人は突っぱねられるかもしれないからさ」

赤い衣の男は、恭也の想像よりもずっと優しげな物言いの人物であった。それどころか、気遣いすらしてくれるほど人間ができています。見た目だけでは判断できないといういい例であろう。

そして恭也は他の避難してきた御婦人とやらも気がかりだったが、この赤い衣の人は事情を聞くにはちよūdい相手なのかもしれないと思ひ至った。

「もしかして、この街について詳しいのか？」

「あ、ああ……この教会に居着いてそれなりに長い方……だと思ひ。そつか、そうだな。ヒヒツ、あんた余所者だもんな。でも、俺でいいのかい？」

「うん。キミからならこの街について詳しく聞けそうだから。俺も少しこの街でやることがあるんだ。だから教えてくれると嬉しい」

恭也が言つた直後、赤い衣の男は聞き取れないような小さな声で呟いた。

「そんな事言われたの……初めてだ」

「え？」

「ヒ、ヒヒツ。わかつたよ、俺でいいなら何でも聞いておくれよ……」

美耶子から聞いた狩人の情報と照らし合わせながら、恭也はこのヤーナムという街に訪れる怪現象について、見立て通りに詳しく聞くことが出来た。

赤い衣の男は語つた、この街は血の医療や血の技術のせいで人間が獣へ変化してしま

う最悪の街に成り果ててしまったのだと。それだけではなく、不定期で「獣狩の夜」というまともな人間が狂い果て、獣になってしまいう者が増える明けない夜が訪れるのだと。

それを終わらせるには、元凶となる獣を狩ることで次の夜明けが訪れることが一般的であること。そして、この現象を解決するための存在が「狩人」であり、狩人は夢を通して不可思議な力を使いこなすものだとも教えられた。

「ごめんよ、元凶については俺も知らないんだ。でも、い、今はもう廃れちまつてるが、最初の狩人はそりゃあ、すごいもんだった……俺も見たことはない、んだけど」

「へえ、ヒーローみたいだな」

「ヒヒッ！ そうだな、憧れたチビどもも、多かつたみたいだよ」

そうして、もはや形骸化しているとはいえ医療教会という不治の病すら治療するところがあったこと、街の各所には狩人の工房という狩人を支援するための組織があったこと。そしてこの夜はそれらが完全に廃れた後に発生してしまい、解決のための狩人も先程美耶子の出会った異邦人の新人狩人しか居ないであろうということが語られた。

「そうか、あの狩人さん、初めてきた街なのに、お、俺のお願いを聞いてくれたんだな」「俺も協力するよ。まともな人がいたらこここまで連れてくる。それに、俺もそれなりに戦えるしな」

「ほ、本当かい？ ヒヒツ、嬉しいなあ。嬉しいなあ。こんなに優しい人に一日で会えるだなんて、俺は幸せだよ……」

「あはは……」

見た目通りの扱いを受けてきたんだろうなああと、苦笑しつつも呆れる恭也だったが、「でも」

途端に声色を真剣なものに変えた男の言葉に、彼は気持ち切り替えた。

「俺、ある程度は匂いでわかるんだ、あんた、その、狩人さんじゃあないだろ？ だから無理はしたらだめだ。ヤーナムはもうおしまいだ……ヤーナムに囚われていないあんたが、無理をして死んじまったら、おれ、俺は……最低なお願いをしたことになっちまう。そうなるのは嫌だし、逃げて、いいんだぜ……？」

「いや、大丈夫だ。俺もそれなりに修羅場はくぐってきたさ。それに言ったら、やることがあるって。だから安心してくれ」

「……ほんとに、ほんとにいい人だなあ、あんた。ヒヒツ、気をつけておくれよ」

聞きたい話も聞けた。そして何をするべきかも理解した恭也は、終わらない夜なのだからと、まずやるべき目標を掲げた。今はまだ了解を取っていないが、おそらく美耶子も同意してくれるだろう。

「まずは人を探してみるよ。なんか他の家は狂ったように笑ってるやつばかりだし、こ

ここに連れてこれそうな人の心当たりってないかな？」

「そ、そうだ。それなら、狩人さんに聞いたんだ、ガスコイン神父が獣になっちまったんだけど、確か娘さんが居たはずだよ。獣狩の夜の日、まともだったガスコイン神父がここに来てたときは、たしか、そう、下水の匂いが染み付いてた。ここを戻ったら、下水道だ。そこから家について、娘さんと、奥さんがいれば……」

盲目ながらも、その嗅ぎ分ける力は凄まじいものだった。そして必死に頭をガリガリと掻きながら思い出し喋る彼の必死な姿は、どう見ても献身的な善人だった。もう恭也にとつて、彼の頼みを断る理由はない。それにこの街はおしまいだとしても、人が生き残れば別の場所でもきつとやり直せる。

恭也は彼の触れるだけで折れそうな筋張った手を優しく包むと、安心させるようにしっかりとした声で言った。

「わかった。まずはそっちだなありがとう！」

「あ、ああ。気をつけて……ヒヒッ」

しやくりあげるような笑い方は、これまで以上に喜色に溢れたものだ。彼ならば、そう思わせるだけの強い意思を感じた赤い衣の男は、手から離れていく温かさに少しばかり後ろ髪を引かれつつも、こんなところに留めおくべきではないと彼を優しく見送った。

そして再び墓地へと戻った恭也は美耶子、と彼女の名を呼ぶ。

「美耶子、いいよな」

「もちろん。後ろはしつかりと見てるからな！」

「それ3つ前の異界で不意とられたこと言ってるだろ」

「ふん、恭也が情けないからだぞ。いつもいつも——」

恭也たちも、これまでの異界を巡ってきたときの余裕の無さはどこにもなかった。これは、新しい幕開けだ。この異界が特殊なものだからこそ、二人はこの異界の先に待ち受けるものがどんな絶望だろうが、必ずその中にある希望を掴み取れると信じていた。

恭也の手に握られた焰薙が、大きく蒼い炎を迸らせる。その刀に宿った異邦の神のちから、「木の伝」もまた、二人の感情に呼応するかのよう。

「ああ、楽しみがふえちまったなあ……あの二人のために、ちゃんと思い出しとかないなあ……ヒヒッ」

## 家族

蒼い炎がぼうつと燃え上がる。

「うええ、匂い、やつべ…」

「そ、そんなに臭いのか恭也?」

「屍人の巣のがマシだよこれ」

恭也は美耶子の案内のもと、狩人が恭也を運んだ道から昇降機の直前にあつた場所、下層水路へ通じる長いハシゴを下っていた。しかし月明かりが照らしているとはいへ、手元はひどく薄暗い。腰元には刀身をのぞかせた焰燵を吊るしており、恭也はこれを灯り代わりとして足場の悪い壁際を照らし出していた。なんとも罰当たりなことだ。

「おえつ、匂い強くなってきたぞ」

辟易とした表情を見せるのは何度目だろうか。中世ヨーロッパの文化では道端に2階の窓から投げられた汚物が表通りに捨てられていた、という文献もあるようだが、この住人たちはそうした汚水の一切合財をこの下水に流しているらしい。まとまっている分、それらは恭也の嗅覚を全力で攻撃しにかかつてきていた。

そして、匂いの原因はどうやらそれだけではないらしい。



恭也がやつとの思いでぬかるんだ（ナニがぬかるんでいるのかは知りたくもない）足元と、冷たい水に靴から上を濡らして地に足をつけると、フゴフゴと耳障りな鼻息が彼の耳を打った。それは降りた真横にある水路の先から聞こえてきているらしく、汚水以上につんとした異臭も同時に漂ってきている。

興味本位で覗き込んだ彼は、その先に人よりも遥かに肥え太った巨大な「豚」の姿を見た。水路の向こう側から見える灯りで照らされた豚の口元は赤く染まっており、ポタポタとその液体の正体である血が滴り落ちていく。

当然、その豚の主食は糞尿や人間であるのだろう。水死体さながらのふやけ、伸び切った人体が水の流れに沿ってぶかぶかと運ばれている。人を人とも扱わぬ捨てられた死体にはまだ息があり、正常な命あるものを憎み攻撃してくるものもいたが、それらはすでにかの「狩人」によって斬り伏せられてしまった後のものばかり。

ベルトコンベアで運ばれる食品のように、豚の口元をなお赤く染めるばかりの腐肉と化しているものばかりであった。

「恭也、やつぱりこの街ヘンだ」

「人の命をばかみたいに捨ててるよな……」

異邦の二人組であるからこそ、この光景を見てそんな感想が浮かんでいた。恭也も美耶子も、暮らしは違えど生まれや人格は教育も行き届いた現代日本の若者のソレだ。人

の命にまだ法律などが十分に行き届いていない無法地帯。異界を通じてとはいえ、はじめて日本を離れて目にする過去の異国が行う所業には同意し難い気持ち悪さを抱えているらしい。

だからだろう。余計に、二人にはあの赤い衣の男から頼まれた「ガスコイン神父の娘」の保護へと向ける気持ちが強まった。

「美耶子、狩人さんからなんか、それらしい話とかって聞いているか？」

「ううん、わたしが聞いたのはこの道を通つ直ぐいったら、さっきの大橋を降りた横の道につながつてゐることだけだ」

「じゃあ神父さんの家は横道にあるかもしれないな」

そのガスコイン神父も、何を思つてこんな誰も来ないような場所を通つて来たのだろうかとか疑問に思つたが、だからこそなのだろうという納得もあつた。なんせ獣狩の夜という異界が頻繁に生じる街なのだ。こういう道を通つてでしか行けないよう、狩人としての立場のある人物が家族を守るため正規ルートへ頑丈なバリケードを作つていてもおかしくはない。

そこまで考えて、恭也はふと思ひ至る。確か、あの大橋を登ろうとする前、噴水のあつる広場に頑強な鉄柵で守られた、崖際の家がなかったかと。

「なあ美耶子。ちよつと上に行つてもらつてもいいか」

「ん、わかった」

美耶子は霊となった身体を活用して、ふわふわと恭也から離れられる限界の高度まで上がってみせた。そして恭也も彼女の視界をジャックし、記憶から思い当たった場所がないかと探してみせる。

すると、まっすぐに進む道の最中、通じていそうなハシゴを見つけることが出来た。

「美耶子、降りてきてくれ」

視界ジャックは、本人が拾った音やそのジャック先の人物の言葉も拾うことができ、情報アドバンテージに優れた手段である。そして美耶子との意思疎通ができるようになった今、美耶子と片目ずつジャックしあうことでその優位性は更に発展を遂げていた。

恭也の言葉を拾った美耶子は側に降りると、恭也の視界の外に敵がでないか見張りながら、まっすぐに進み始めた彼に並走する。

カンカンカン、とまたハシゴを登りきると、その一つ目を登りきったところで恭也が見た鉄柵の反対側の景色を見ることが出来た。家屋の窓にも、人がいるらしい灯りが少しばかり揺らめいている。どうやら、間違いはないらしい。

「やった、きつとあそこだ」

「あつ、恭也うしろ!!」

2本めのハシゴを登って、意気込んだ彼の耳を美耶子の叱咤が叩いた。慌てた様子の彼女の言葉に従って身を伏せると、ハシゴのすぐとなりにあった家屋の扉が破壊され、大男が恭也の頭のあった位置へとブロックのような鈍器を振り下ろしていた。以前は盲目であつたがゆえ、僅かな物音にも敏感に反応した美耶子のおかげで第一難は逃れることが出来た。

「うアうーウアアあ!!!」

「こいつも黙つてのに、なつたのか!？」

その答えを示すかのように、目元まで降りたフードが風でめくれ、蕩けた瞳が恭也を見据える。だが以前対峙したあの白く恐ろしい獣——聖職者の獣とは違い、その瞳は混乱と殺意と狂気によって濡れた不安定なものであつた。

とはいえ、もはや目についた人間全てを叩き潰す危険な障害であることは変わりない。こんな姿形の人間を、なんども切り伏せてきた恭也は、幸か不幸か迷いなく焔薙の刀身を抜き放ち、切っ先を向けることができる戦意の持ち主であつた。

そしてこの大男にとって不幸でしかなかったのは、不意を打たれる以外、恭也の対人戦における立ち回りは見事なものであるということ。時間の感覚を忘れ去るほど、異界という地獄の中で人間に必要な食事や睡眠もろくにとれず、ひたすらに折れることすら許されない精神で人の形をした化物を切り伏せてきた彼は、まず一刀にて大男の右手首

を切り飛ばした。——その手に持った鈍器ごと。

手ごと武器を失った大男はその体躯の攻撃こそ厄介だが、鈍重さがまた最大の弱点となりうる。呻く暇もなく返す刀で足を切りつけられた男は膝をつかされた。

最後に恭也は懐から左手で握った不可思議な土の人形、宇理炎を大男に向かって突きつけた。

「燃えろ！」

もちろん、後はご想像のとおり。宇理炎が生み出した煉獄の炎は、男を跡形もなく燃やし尽くす炎の柱に閉じ込め、消し去った。

「毎回毎回さ、恭也は」

「あーもうわかってるって！ でも仕方ないだろ、美耶子もわかってるだろうし」

「それはそうだけど、怪我するってわかってて止められないのは嫌だ」

むすつとした物言いの中には、やはり彼女の悲しみも込められている。そのことを引き合いに出されてしまえば、恭也は所在なさげに頭を掻くことでしか誤魔化せなかつた。

「とにかく、登ってみよう。オルゴールの音も聞こえる。女の子が持ってるとしたら、ここで合ってるだろうしさ」

「むう……ちゃんと後ろは見とくから」

わかったよ、と小さく答えた恭也は、今度こそ最後のハシゴを登りきった。鉄柵の向こう側には、もう獣になった民衆が新しく出てきているわけでもない、静かな噴水の広場がある。先程通った場所に間違いはなさそうだと、この街の複雑な地形に苦笑いが顔ににじむ。

余所者嫌いな街らしい作りといえはそうなのだろう。ひと目ではわからぬ複雑な造りは余所者を迷わせ、しかしそこに長らく住む人間にとつては隠し通路なども思いのまま。きつと、これまで恭也たちが通った所とは違うルートの道もあるはずだ。

そこまで考えて、かぶりをふった。今はとにかくガスコイン神父の娘を探すのが先決。あわよくば、その子に他の避難させても大丈夫そうな住人を教えてもらえれば。

「……あなた、だあれ？」

「え？」

恭也が声のしたほうを見ると、目的地だった家の窓からその声が聞こえてきたようだ。家の黄色い灯りの向こうに僅かに恭也の胸元までしかなさそうな小さな影が見える。

「えつと、もしかしてだけどガスコインって人の娘さん？」

「え、う、うん。ガスコインは私の家名だけ……異邦のお兄さん、もしかして、お父さんのお知り合い？」

「そうってわけでもないんだけど、その、俺は君を助けに来たんだ」

「私を助けに……？ お香も少ないけど、夜はもう少ししたら明けるよね？ だって、お父さんはいつもこのくらいになって帰ってきてたし、少し、きつと、お仕事がちよつと長いだけで」

窓の向こうの声は尻すぼみになっていく。ひとりで押し殺してきた不安が押し寄せてきているのだろうか。だが、真実を告げれば彼女はきつと耐えられなくて泣き崩れてしまうだろう。父親が獣になって、狩られて死んだ、などと。

だがこの異常事態ゆえに、きつとこの子が乗り越えておかねばならない問題なんだと恭也は判断した。思つたよりもずっと残酷で、救いもないこの世界に生きている恭也は、嘘偽りのない事実を口にした。

「嘘じゃないんだ。君のお父さんは、この先にある墓地で死んでしまつていた」

かつて、恭也は美耶子に「その犬、死んでるみたいだから」と言つて美耶子を守るために誘導しようとしたことがある。その時にも似た物言いだ、いまの恭也には別の考えもあつた。

「……嘘だよ」

「本当だ」

「嘘だ、嘘だ。余所者の人の言葉なんて信じない」

「だから俺が来たんだ。オドン教会なら、香もいっぱい焚いてあつて安全だ。お父さんを知ってる人に頼まれて、君をそこに連れて行こうと思つて」

「嘘だよ……！」

やはり、耐えきれなかつたかという恭也が想像した通りの反応が帰つてきた。年頃のほどはわからないが、確実に美耶子の元の年齢よりも一回り下だろう。舌つ足らずな発音は、まだ上手くしゃべれない小さな子特有のものだ。

そんな子に、父親の死を告げるのも辛いものがあつた。だけど、恭也はめげずになおも言う。

「俺はここで待つてるから、避難できる準備が出来たら——」

その言葉を打ち切るかのように、鎖や布で覆われた格子窓のそのまた内窓が、勢いよく閉められた。きつと今のあの少女にとつて、恭也は悪いことを言う悪いやつだ、と見えているのだろうか。無理もない反応だった。

「恭也、待つのか?」

「うん。でも多分、そこまで時間はかからないと思う」

「……うん、わたしもそう思う。ああいう子は、根っこは強いはずだし」

どこか達観したように、小声で語り合う二人の内容に首を傾げるかもしれないが、真実を言おう。こうした状況は、「はじめてではない」のだ。



二人は時間を忘れるほどに異界を巡り、元凶となる人物や化物を焼き払い、時には謎を解き明かし、日本に満ちる不思議や神秘を潰していった。そんな中、巻き込まれた一般人が居なかつたわけではない。

ここのはめつきり見かけなくなつてしまつたが、こうして幼い少女が残酷な世界に押しつぶされるといふ状況も幾度かは経験しているのだ。

そのまた幾度かを、恭也が、彼が間違えた選択をとつてしまつたことで、明確な死でもつて迎えてしまつたこともある。

なにより、似た女の子といえど恭也には誰よりも近くにいる人物を知っている。

だから、こうしてひとまずは安全な場所において、それでいて強い父親を持つていた少女には考える時間を与えた。彼はそれを待ちながら、レンガの壁に背中を預けて虚空に話しかける。

「なあ美耶子」

「なに」

「ひつでえもんだよね。俺たちが生きてるところって」

「…うん」

「でもこうして、また話せたり、喜んだりもできる」

「そうだな」

「頑張りたいたよな」

「当たり前だ、さわれるようになったらその尻蹴つ飛ばしてでも歩かせるから」

「なんかきつくなってきた？ 前の美耶子らしいや」

「ふんっ」

声だけで、ずいぶんと思ひ出すことはできるものだ。かつての彼女の姿を想起して、こうして話すうちに美耶子がどんな素振りをしているかを思い描く。実際、そのとおりなんだろう。

「……お兄さん」

そうしてどれほど待たただろうか。

内窓が再びいきいきときしみを上げながら開かれる。今にも泣きそうな声で呼びかけるその少女は、やはり嗚咽を我慢しきれずに言った。

「お母さんを、一緒に探してくれるかな」

「もちろん」

恭也は彼女の提案に、間髪入れず笑顔で頷いた。

家の内窓から覗く灰色の瞳が少し震えたかと思うと、少女は少し待っていてほしい、と再び窓を閉めた。その後、恭也の近くにあったレバーが反対方向へとひとりで動き、ガスコイン家を入り口と窓で分断していた重厚な鉄柵が地面を摺りながらもギチギチ

チと甲高い音をたてて開かれた。

そして少女の気持ちを表すかのように、玄関の扉もゆつくりと開かれる。恭也がその入口の方へと移動すると、ようやくその少女と対面することが出来た。

灰色の長袖とロングスカート。金色の髪を後ろで一つに束ねる大きな白いリボン。そして伏し目がちなまぶたから覗く灰色の瞳。その姿を見ていない恭也たちには知る由もないが、この周辺の住民がまともな頃は、母によく似ている、目元は父親譲りの可愛い顔立ちだと言える少女であった。

「さつきは、ごめんなさい」

「いや、こっちも初対面なのに辛いこと言っちゃったね」

「違うの。私も信じたくない、けど、でも仕方ないから。この街では、よくあることだから」

一瞬目を見開いて、恭也はやるせない気持ちになった。思ったよりも、少し違う理由での立ち直り方であった。そして少女にこんな言葉を言わせたこの街が、嫌になる。獣の病だかなんだか知らないが、そんなものが延々と居座り、当たり前前に過ごせたはずの人間の日常を抉り取っていく。

こんな幼い少女ですら、身内の死を納得させるこの街の元凶を。人知れず固めた恭也の決意は、ガスコインの娘がいる手前、言葉を発していない美耶子にも伝わった。

「それで、お父さんは墓地のほうで見つけてくれたん、ですか？」

「うん。そこで死んだってオドン教会の人に聞いた」

「じゃあ、お母さんも、お父さんを探しに行ったから、きつとその近くに思い、ます」

「わかった。それじゃあ君は絶対に傷つけさせないから、心当たりのありそうな場所に集中して。もう戻れない奴らは俺が倒すから」

「……お願い、します。みんなを、救ってあげてください」

本当に敏い子だと、彼は感じていた。

美耶子といい、異界でひとり倒れていた美耶子の友達だったあの子といい、こうした異常事態で遭遇する子はなにかと思いの強い子が多い。かつて別の異界でこの手から溢れ落ちてしまった、守れたはずの幼い命も、恭也自身が間違えなければ無事に生還できていたであろう心根の強さがあった。

今は語ることも出来ないが、そうした経験が恭也の焔薙を握る手を強めさせる。思いの丈に反応するように、焔薙からは青い炎が燃え上がった。守護獣「木の伝」もまた、こうした思いに共感をしているのだろうか、と。

「恭也、さっきの昇降機が大橋の階段を降りたところから繋がってるから、そこから墓地に向かおう」

美耶子のナビゲートに目配せと小さな領きで返しつつ、恭也は武器と警戒を携えて少女を誘導し始めた。誰かの家の塀の中で騒いでいた犬が柵を壊し狂乱のまま襲いかかってきた以外は、今の所敵らしい敵も居ない。

今のところは会話しても大丈夫ではないか、と判断した恭也が少女を見ると、思ったよりも恭也の歩幅が少女よりも早かったのか、少し急ぎ目に歩く少女の姿がある。

「あ、ごめん！ 少しゆっくりいよくよ」

「あ、ありがとう」

考え事を傍らにしていたこともあって、少女自身の状態を疎かにしてしまっていた。そのことを反省しつつも、恭也は当初の目的通り、他に避難できそうな住人が居ないのかを訪ねてみることにした。

「なあ、このあたりの人はなんで避難しないんだ？」

「え？」

「君の家に来る前、いくつかの家をノックしたんだけどさ、なんか余所者つてことで全然取り合ってもらえなくてさ」

「……」この人は、何度も獣狩の夜を経験して、それごとにおかしくなっていくんだつてお父さんが言ってた。私達の家は大丈夫だったけど、ヤーナムの血にうまく合わなかつたら、夜が来るごとに、つて。お隣さんも、私がつと小さいときはまだ挨拶してくれ

てたけど」

「そっか。まーた獣狩の夜ってやつか。なんか怖いな」

「うん、怖いよ……ほんとに、怖いのに」

胸元で両手を握る少女が体験してきた日常への侵食は、年頃の快活さを奪って余りあるものだったということか。手のかからない子、というよりも感情が上手く見せられない面が目立つ。

そうまでして人を変える獣狩の夜とは。ヤーナムとはいったい何だというのか。解決しなければならぬ、と恭也が思っていたその時、美耶子もまた考えを巡らせていた。今回の狩人、というような自己紹介をしていた、恭也を墓地まで運んでくれたあのヤーナムの外から来て狩人になったといった男のことだ。

あのランプから消えて、今は何をしているのだろうか。

そうして居るうちに、結局少女の母親が見つかることなく、彼らはヤーナムの墓地にまで戻ってきてしまっていた。まだ真新しい墓石の破壊された欠片が散乱しており、足場はあまり良くはない。

「ほら」

「う、うん」

どこかの少女で文字通り死ぬほど練習した小さな子へのエスコート。安心させるよ

うに笑った恭也に、ようやく少女もまたぎこちないながらも笑顔を見せる。そんな少女は、ハツとなにかに気づいたかのように、墓地の入口側へと視線を滑らせた。

恭也の手をぱつと話した彼女は、心から安堵をみせ、大声で叫ぶ。

「ヘンリックさん!」

「え、おい!」

彼女が駆け出していった人物は、よろよろとおぼつかない足取りで現れた。この夜にも目立つ黄色い狩装束と、腰に下げたノコギリ鉋がこの人物が狩人であるということを示している。

だが恭也は少女のそんな姿に笑顔を見せるわけでもなく、焦燥のままに駆け出した。

「ダメだ!! 逃げて!」

「え?」

「……………う」

ヘンリック、と呼ばれた男がぶるりと身を震わせたかと思うと、その手は凄まじい速さで腰元のノコギリ鉋へと伸ばされた。そして畳んだ短いリーチの形のまま、これまた凄まじい勢いで少女へと向けられた刃を、すんでのところで踏み込みが間に合った恭也が焔薙で受け止める。だが、

「うおっ!? なんだ、力つよすぎ……!?!」

「うおおおおおおあああああッ!!」

喚き散らしたヘンリックが焔薙ごと恭也の腕を弾き飛ばし、空いた反対の手がビキビキと音を立てて一回り肥大化。そして指から伸びる爪は不衛生に伸び、尖っていく。そのまま恭也の心臓を一直線に狙う左手を、恭也はかつて受け取った「知識」のままに、鋭く横へとステツプを刻んだ。空を切った手をバツと開いて、今度は腰元の短銃を手にしたヘンリックが獲物と定めた恭也をにらみつける。

狩装束のマスクと帽子の間から覗く瞳は、間違いなく「蕩けて」淀んでいた。おそらくは知り合いであろう少女をためらいなく切り裂くほどに。

「そんな、ヘンリックさんまで……」

「いいから逃げて！　せめてその階段登るくらい!!」

「で、でも……」

「守りきれない!!!　からあ!!」

戦闘のさなかに会話できるほど、恭也に余裕はない。間髪いれず切りかかってきたヘンリックの攻撃を刀で上手くいなしながら、ノコギリ鉋の振り下ろしを地面へと振り切って恭也は途切れ途切れに叫ぶ。

少女も理解したのか、必死に階段を登っていく。咄嗟に美耶子の視界をジャックした恭也が片側の視界でその姿を見送り、先に脅威となりうるものはなさそうだと判断す



る。

「なんだ、今までの狂ったやつとは全然違う……これが狩人ってやつかよ」

ただ獲物を振り回していた民衆や大男とはまるで違う。一撃一撃が鋭く、的確にこちらの臓腑を引き裂こうとしてくる。ソレ以外にも距離を詰めたかと思えばそのまま斬りかかるようなことはせず、ワンテンポ遅れて降り注ぐ斬撃のリズムは、これまで屍人のような敵とばかり戦ってきた恭也にとつては厳しいものであった。

このままだとジリ貧で押し負ける。そう思った恭也は焰薙を両手で握りしめ、相手がバックステップを刻んだ瞬間に同じように前方へのステップを刻んで距離を詰めた。

「焰薙いー」

呼応するかのように青い炎が揺らめき、下段から上段へと振りかざされた焰薙の剣戟には、炎の波が斬撃の後より生じヘンリックへと襲いかかる。もともとの武器のリーチを完全に無視した延長攻撃には対応しきれなかったのか、まともに渾身の炎の一撃を喰らったヘンリックが胸元から蒼い火の玉を灯しながら墓地を覆う建物の壁へと叩きつけられた。

「ツハア！ ふう、ふう……敵しすぎんだろ」

素早い敵を相手取ってきた、対人慣れした狩人との戦いは恭也本人の想像以上に集中力を削いでいた。ハイになっていた頭から開放された恭也が肩で息をしながら愚痴る

が、この程度で終わりとは到底思っていない。

叩きつけられたことで生じた土煙の向こうで、黄色い影が月明かりに紛れて揺らめいた。そして次の瞬間、その影の手元が光ったかと思えば恭也が認識する速度の外でヘンリックが目の前に現れていたのだ。

「——ッ!?!」

無限の命とはいえ、人間に染み付いた防衛本能は恭也に刀を構えさせた。ノコギリ鉋の鋭い刃が多少腕をえぐって行ったがその大部分を刀身で受け止めることに成功する。そしてガードごと後ろに押された恭也は、安心など一瞬もないことを実感した。

すでに、二撃目が振り上げられている。もう間に合わ——

「なにやっつてんだいあんた!!」

風を切って飛んだナイフがヘンリックの肩にあたり、彼を後退させる。

恭也を切り裂こうとした凶刃を遠ざけたその人物は、恭也が探すよりも早く彼の隣へとばさりと降り立った。一瞬おくれて、ふわりと羽が重力に引かれて緩やかな傾斜を形作る。黒羽根の鳥。それが人の形をしたような人物だ。

「あんた見た所、狩人じゃあないね。だったら引っ込んでな」

無数の鳥羽を身にまとい、香草を詰め込んだ嘴マスクで顔を隠したキリキリとした女性の声。恭也の前に出る。腰の獲物を抜き放ち、腕を独特の構えで交差させてヘンリック

クへと向ける。

「こいつは、アタシの獲物さね」

鋭い金属音が音叉のように響き、解けていく。波打つような剣を長短の二本に分かち、黒衣から白銀を煌めかせた彼女は、踊るように身を進ませる。

息をつく間もなく、闇夜を引き連れ、ただ静かに慈悲深く。

## 鳥羽

突如として現れた新たな人物に、恭也は戸惑うばかりであった。

「なにぼやつとしてんだい！ あんたはさつきと逃げろつて言つてんのさー！」

とげのある物言いだ、それは恭也が狩人ではないからこそ、この問題には突っ込む必要がないという彼女なりの思いやりであった。血なまぐさい狩人同士のいざこざは、どちらもが優れた殺戮者であるがために、戦い一つで周囲へと破壊の余波を広げるものだ。

そう、目の前の戦いのように。

「ガアツ、ガアアツ」

「なんだい、あんたのほうがよくぼど鳥らしいだなんてねえ」

片や心までもが獣と成り果てて、しかし身体に染み付いた技量を本能のままに振るい、また人のリミッターを解き放った膂力が墓石などを粉々に破壊する。もはや墓地というよりは単なる広場になりつつあるその舞台上で、一匹の鳥が舞い続け、土を蹴り上げ壁を足場として敵を刻む。

ひらり、ひらりと鋭く必殺となりうる一撃を全て避け、カウンター気味に一見短くも

見える白銀の刃を滑らせれば、その一太刀は僅かな血の線を空に描くばかり。獣と化した狩人、ヘンリックの動きにも衰えは見られず、無駄な攻撃であると勘違いしてしまうかもしれない。だが、ソレは違う。時間が経つほどに、その効果は目に見えてはつきりとしてくるのだ。

ヘンリックは距離を取ると、ノコギリ鉋を変形させて、そのリーチを伸ばしにかかる。そして牽制の意味合いを込めた何発かの発砲をはじめた。しかし、もうそこにはベテランの狩人が持つ、長期的な殺し合いを挑む際の心構えは見受けられない。今ここにソレがあるから、遠慮なく今、出し惜しみせずに武器も道具も使い続けている。戦局を見据える瞳を失い、本能のままに爪や牙の延長を振るう。ああ、紛れもなく其れは獣であった。

そして攻撃を当てられない苛立たしさが続いたが故か。つんぎくような獣の咆哮をあげ、がむしやらに踏み込み、武器を振り続けるヘンリック。その手に握る謎の道具を用いた、超高速で間合いを詰めて振る一撃は恭也も味わつたとおりの脅威であるというのは、烏羽の狩人にとっても変わらない。幾度目かに至る挑戦の末、必殺の一撃がはじめて烏羽の狩人へとまともな傷を与えようとしたのだが、そのような未来が訪れることはなかった。

がくり、と。獲物を振り上げた体をヘンリック自身の足が支えられなくなったのだ。

「そら、老骨には効くだろう?」

彼女はこの瞬間を待っていた。ざあっと風をかき分けた足が、音もなく前方へと彼女の体を運び、膝をついたヘンリックを蹴飛ばした。彼の上体を虚空へと仰がせた鳥羽の狩人は、流れるように両腕の刃を閃かせ、ヘンリックの首を掻き切った。彼女がすり抜けた後、一拍遅れて切り裂かれた頸動脈より血の噴水が辺り一面を赤く染め上げる。

残心とともに二本に分けていた武器を再び一本の剣へと戻すと、鳥羽の狩人は振り返る。あの坊やがちゃんと逃げてくれていればいいが、などという心配もあった。だが彼女の思いを塗り替え、警鐘へと切り替えるほどの光景がその瞳に焼き付くこととなる。「グウアアアアアアアアああああああアア!」

ヘンリックは確かに狩人としては死んだのだろう。だが、獣として蘇った。ポコポコと盛り上がった肉体が傷口を覆いかぶせ、ケダモノの手からは彼の持っていた短銃とノコギリ鉋がこぼれ落ちた。そして人の声帯から無理やり捻り出した獣の咆哮が、血反吐混じりの唾液を飛ばしながら鳥羽の狩装束を震わせる。

変貌を遂げた彼の姿は恐ろしき獣そのものであった。黄色く長い体毛がまばらに生え、衣服を押し上げるように発達した筋肉が服を内側から破き、黄衣はだらりと地面に衣先を擦り付ける。はあっと吐き出された白い息は変じた獣が熱で浮かされた比喩のようでもある。

「クソつ、そこまで行っちゃまったのかい……」

烏羽の狩人は、ペストマスクの奥でその顔立ちを苦く歪ませる。

顔見知りか獣のように瞳を蕩けさせて襲ってくる。それまでは、彼女の役割の内だ。だが獣そのものへと変異して襲ってくる。これはダメだ。狩人の尊厳全てを喰らい尽くす冒瀆的な行為だ。そして何より、二度も己の手で見知ったものを殺す慈悲を下さねばならない痛みを生じさせる。

そしてヘンリックだった獣は、その月明かりでも黄色く透けた、汚らしく長い体毛を震わせながら、牙をむいて飛びかかった。発達した足の筋肉が生み出す爆発的な加速は、先程よりもずつと早い。そして一瞬の思考を巡らせてしまった、烏羽の狩人の虚をついた攻撃である。

肉体が老いる以前ならば、彼女も対処のしようはあったであろう。だが、烏羽もまた、目の前のヘンリックと同じく古く年老いた狩人である。十全たる獣の肉体を得た彼と違い、生物としての限界が、極限状態を脱したばかりの体を自由には動かしてはくれなかった。

認識を一手遅らせれば、反応は2手遅れる。故によもや彼女には、取れる手段など存在しない。そこで冷や汗をかくことしか出来ず、避けきれなかった獣の爪が己の肉を抉り取られる姿を幻視して、





そして、時にはその腕や足に致命的となりうる裂傷を切り込みながら、傷口を焼き切り灼熱の炎を体毛へと燃え移らせた。轟々と燃え盛る蒼い炎は獣に恐怖の悲鳴を挙げさせる。そして必死に振り払いながら、苦しみを味わわせた恭也へと向かつて必死に殴りつけるだけの白痴と成り果てた。

こうなれば、烏羽の熟練の業の前ではおそるるに足らぬのである。

彼女は呼吸ひとつで獣を切りつけ、目を潰す。銀の剣閃が獣の視界を暗闇へと染めたがゆえに、獣は両手で顔を覆って痛がる素振りを見せた。無防備となった場所を烏羽が見逃すはずもなく、再び2つへと分離した刃が獣の分厚くなった喉元を切り裂いた。その下には、盛り上がった肉に覆われただけで、完治したとは程遠い切り傷の残った喉がある。傷口に再度切り込みを加えられ、広げられた獣は、コフユツと最期となる呼吸モドキを吐き出して、切られた勢いそのままに後ろへとよろめいた。

直後、背後から突き立てられた刀が臓腑を引き裂き、その胸より血を纏って尽き上がる。その獣の命運はもはや言うまでもない。

「燃えつきろー！」

斜めにねじり、臓腑を完全に破壊した上で恭也は木ル伝の守護獣が放つ蒼い炎を刀身より吹き出させた。体の内側より突き抜けた熱が獣の身体の端より突き抜け、やがて単なる灰となって墓地へと降り注ぐ。

最後の蒼い火の粉が消え去ったその時、ようやく墓地には再びの平穩が訪れた。

「ツハア……ツッ！ ハア……ツッ」

そして真つ先に膝をついたのは鳥羽の狩人であった。もはや老いて、夢も見れぬその体では、いくら技を磨こうとも体力は衰退するばかり。もはや一人狩るのにも全力を尽くして息を切らず彼女が、二戦目までもをくぐり抜けたともなれば、その消耗は計り知れない。

それでも武器を落とさぬのは狩人の抱くプライドが故だろうか。再び武器を変形させ、8の字を連想させる一本の剣へと戻したソレを腰元へ吊るし、鳥羽は心臓の動悸が収まるまでその場にうずくまった。

「あ、あの大丈夫……か？」

「血……」

「えっ？」

「あんだあ、輸血液、持っていないかい……」

残念ながら、恭也はこの街に来てからそうしたものは持っていない。この地に生きる狩人にとっては常識となり、また酒に混ぜるために多くの民衆が携帯する「輸血液」。異邦の民の血であったり、はたまたヤーナムの犠牲者のものであったりとありふれたものではあるが、それこそが狩人の怪我への特効薬であった。

なにか無いかとあたりを見回した恭也が見つけたのは、先程ヘンリックが獣化した場所。そこには短銃とノコギリ鉋と、身につけていたポーチに入っていたであろう道具が散らばっていた。当然、その中には彼女が目的としている赤黒い液体がなみなみと揺れる注射器も。

「あつた、これですか!？」

「あいつのかい。皮肉だねえッ!? つつ……」

ふとももの辺りに勢いよく差し込んだ彼女は、空っぽになったその容器をあらぬ方向へと投げ捨てた。カシヤンというガラスの飛び散る音がする。

ヤーナムの作り出す狩人は、特別な血によって、他人の血液を取り込むことで驚異的なまでの肉体の再生能力を得る。そうせずとも浅い傷ならば塞がるのだが、切られた直後に相手を切り返すことで浴びた血が傷口に入り、逆に回復させることもできるといふ、戦闘においては奇跡とも言える恐るべき業も存在するのだ。

失った体力は取り戻せないが、鳥羽も老骨に鞭打って体を動かしているに過ぎない。捻挫や、細かな内出血。そうした傍目では見えない重大な怪我を直し、彼女は脂汗に濡れた臉を仮面の中でゆっくりと開いていった。

「ツハア、ようやく一息ついたよ。騒がせちまったかい、若いの」

「い、いやお礼を言うのはこっちだって。あの時助けてもらわなければきつと怪我じゃ

すまなかつただろうし……」

「はつ、正直だねえ。このヤーナムじゃ見ない性格だ。あんた、何者だい？ さつきの炎といい、一般人じゃあ言い訳にやならないよ」

すつと立ち上がった鳥羽の狩人の視線は、射通すように恭也へと叩きつけられた。先程の戦闘で加勢してもらった立場とはいえ、この異常事態となつたヤーナムにおいて優しい人物相手ですら警戒を怠ることはない鳥羽の姿勢は、生き残ることににおいては正しいものであつただろう。

だが残念ながら恭也にとっては、あまり好ましい返しではなかつたらしい。むつと頬に力を入れた恭也が、その敵意を突っぱねるようにして言い放つた。

「恭也だ。ここには異界の原因になるやつをぶつ潰しに来た。それからヤバそうなのも全部殺して消すつもりだけど、なんか文句あるのかよ」

挑発的に言つてのける恭也の上では、美耶子がこらえきれないように腹を抱えて笑っている。子供っぽいこうした一面を見せると、彼女はこうしてすぐからかつてくるのだから困つたものだ、と。今すぐにも美耶子に文句を言いたい彼は、抑えきれなかつた分を鳥羽の狩人を睨むことで発散した。

対して、鳥羽は軽く受け流すばかりである。

「へえ、キョーヤ。こんな僻地までずいぶんと血気盛んなこつたね。まあ実力や使つて

る武器に関しては何問題はなさそうだ」

鳥羽の顔が僅かに動き、恭也の持つ焰薙へと移る。だが、彼女はすぐにそれを視界から外して続けた。

「だがねえ、逃げろつていった手前、それを無視して戦いに来るなんてあんた、どういふ神経してるんだい。ああなつた奴らを狩るのは私の仕事さね。今回は助かったが、次邪魔するならどうなつちまっても知らないよ」

「だったら次も邪魔するよ。だって、そうじゃないとアンタも倒れそうなくらい消耗してるじゃないか」

「……はあ、ほんとこの街には似つかわしくないお人よしなこと。でもまあ、神秘に見える、人の面を被つた獣畜生にはなりそうにもないね」

「それよりさ、俺は名前言つたんだから、そつちも教えてくれよ。咄嗟の時なんて呼ばばいいかわからないと困るだろ？」

ごく自然に手を差し出し、立ち上がらせようとする恭也を見て、そのペストマスクの向こうで彼女はどう思ったのだろうか。だが、表層でも深層でも、鳥羽の狩人が考えるのは唯一つ、「こいつはとんでもないバカ」だというイメージが凝り固まっていた。

このご時世、他人に手を差し伸ばし、それを当然としつつも人の心を保ち続けるとはいかなる芯の通つた性根の持ち主か。

「狩人狩りのアイリーンさ、好きに呼びな」

そう言つて、彼女はくるりと背を向けた。行き先は墓地の奥、オドン教会である。

「ほら、ついてきな。目的はあの子……ガスコインの娘つこなんだろ」

「あ、うん」

鳥羽……アイリーンに促されるままついていった恭也は再び、オドン教会へと足を踏み入れた。そうすると目にするのは入り口からすぐの場所で身を伏せている赤衣の男である。

スン、と鼻を動かした彼は、恭也が近づいてきたのを知ると嬉しそうに手を開いて歓迎した。

「ああ、あんた、もどつたんだね。よかった、ちようどあんたが探しにいつてくれた子がここに来たんだ。ただ、ずつと泣いてるみたいだから、は、話してあげてほしいんだ……俺なんかはほつといてさ、ヒヒツ、はやくいつてあげなよ……」

「おまえも、あたしの声が聞こえてたらなあ……」

言いながらも、尽きかけた香の中身を入れ替え、新たに焚き出す赤衣の男。やはり献身的で、そして皆がためにと動く彼のあり方は好ましいものであった。彼とも少し話をしたいところではあるが、ひとまずは気になる事を言っていたので恭也は彼から離れた。

「泣いてた、って……？ わかった、ありがとう。それから美耶子、もう少し待つててな」  
小声で美耶子へともう少しの我慢を言いつけて、恭也はそのまま少女がうずくまつて  
いる場所へと足を進めようとしたが、そこで待ったをかけたのがアイリーンであった。

「ちよつといいかい」

「今度はどうしたんだよ」

「私は外のベンチで待つてるから。あの子と話がついたら、少し顔貸しな」

カツカツと石造りの教会の地面を鳴らしながら、墓地とは違う別の出入り口に歩くア  
イリーン。そして恭也とすれ違いざま、その耳元で呟いた。

「あなたの近くに居る声、説明しな」

「ッ!? 聞こえて——」

恭也の反応など無かったかのように、アイリーンはそのまま入り口の向こうへと消え  
てしまった。美耶子の声が聞こえたのは、これで3人目。一体何が条件となつてい  
るか。いや、もはや蒙を啓きかけた恭也にとつては真実の端に手をかけていたのだが、未  
だにそれには無意識の知識の数が足りず、霞を掴むようなものだ。

「ごめん、遅れた」

ともかくにも、と彼は気持ちを切り替えて、まず優先すべき事柄に集中する。

ガスコインの娘がうずくまる近くへと歩み寄った所、彼女はなにやら手に大きな何か

を掴んでいるようだった。それは赤く、そして宝石のようである。だが少し黒く淀んでいて、引き込まれるような美しさをしたブローチであった。

「それは……？」

「死んだお母さんが、つけていたの」

「えっ」

「あの墓地から逃げる時、お母さんが屋根に引つかかっていたのを見つけたんだ。首元を食われてた。多分、お父さんに、殺されたんだ……と、思うっ」

ガスコイン神父が獣へと成り果てようとしている以上、それは彼女の母親も認識していたのだろう。だが情に訴えかければ戻せるかもしれないという淡い希望を以て挑んだ母親の愛は、無残にもヤーナムの血によつて食い散らかされた。

残されたのは、彼女ただ一人。

「ヘンリックさん……お爺ちゃん、も獣に、なつて、ひとりぼっちに、なつちやつた」  
また、声に嗚咽が交じる。

「ねえ、どうしたら、いいの？」

問いかけられた恭也には、もう何も言えなかつた。二度までも、親を失う絶望を味わい、そしてお爺ちゃんと呼び慕う相手もまた、目の前で理性なき獣へと変じた瞬間を目にしてしまった。



恭也は、一体なんと声をかければいいのか、美耶子もまた彼女を見て、齒噛みする。どこにでも転がっている、異界ゆえの常識を外れた絶望。過剰なまでの不幸を叩きつけられた彼女を前に、恭也はその頭に片手を置くことしか出来なかった。

人の手を通して伝わる温もりは、じんわりと彼女の心に思い出を流していく。

彼女は、泣き喚いた。もう涙が出ないように。この夜を泣かずに過ごすために。未来を歩む自分に顔向けできるように。涙と嗚咽に入り交じる、後悔と決意の言葉の羅列に、恭也もまた顔を歪ませていく。一人の少女の感情全てが発露したその瞬間に、我慢できるほど感情が死んだわけではないのだ。

「なん、で、お兄さんも」

「ばっか、すごいよ君は。強くて、本当に」

かける言葉なんて見つからない。だから、こうして見せた彼女の強さを、彼は褒めた。寂しさを我慢しきれなくなった少女が、恭也へ全身を使って抱きついた。もう涙も嗚咽も見えなかったが、必死に心を落ち着けようとする姿はなおさらに恭也をくしゃくしゃの泣き顔に歪めていった。

「ありがとう」

やがて数分が経ち、ようやく彼女は恭也を開放した。

泣きはらした目元は赤いが、もう彼女は笑顔を携えていた。抱えていたものは重いま

まだろう。それでも、彼女はこの夜を過ごす覚悟を決めた。あらゆる理不尽に怒り、悲しみを押さえつけた。

だから彼女は、第一歩を踏み出した。

「ねえ、お兄さん。お名前は何ていうの？」

「俺は、恭也」

「私はアヴァ。キョーヤ、さん。お願い、この夜を、お父さんとお母さんを殺した元凶を殺して。私は、何も、出来ないけど、キョーヤさんに託させてほしいの」

彼女の頼みを、断れるはずもなかった。

彼はもちろんと答え、立ち上がる。

「俺はもともと、そうした異界を壊すのが仕事みたいなもんだからさ。だから、安心して待っててくれよ。全部焼き払ってくる」

「うん…お願い」

ガスコインの娘、アヴァの願いを聞き届けた彼は深くうなずき焔薙を握る。

「もてもてだな、恭也」

上から美耶子がかからかってくるが、恭也の表情もまた、もう笑顔になっていた。この悪夢のような夜を生き抜くには、そうして降りかかる理不尽を笑顔で潰してやるのがいい意趣返しになるだろう。そして元凶とやらには、最大の笑顔を向けて葬ってやると

も。

そして彼が離れていくのを見届けたアヴァは、迷いのない足取りで赤衣の男の元へと向かった。

「獣避けの香の交換、お手伝いさせて」

「あ、あんた……いいのかい？」

「私がやりたいの。それに、あなただと、その、遠くの香は難しいよね？」

「……ほんとに、ほんとに俺は、俺は……ああ、ごめんよ。ありがとう、やってくれたら、本当に助かるよ」

きつと、優しい彼は何度もこのオドン教会に足を運ぶことになるだろう。そして彼以外にも、この異常な夜を解決するための狩人が通るはず。そう考えたアヴァは、このオドン教会の守りを揺るぎないものにしようと、香を決して絶やさない手伝いを申し出した。

この小さな一歩が、どうなるのか。

それはまだ、わからない。

「はんっ、余所者と乳繰り合って何が楽しいのか……」

そして彼らの行動を、虫唾が走るような目つきで見る老婆も居る。しかしそれすらも、もはや彼女は意に介さない。覚悟の一振りには、僅かな炎を燃え上がらせたのだ。

「あの子と話をついたのかい?」

外へ出ると、横合いから心配を含んだ問いかけが飛んできた。

恭也は左を見ると、ベンチの横の柵にもたれかかるアイリーンの姿を見つける。そして彼は、先程から浮かべた笑顔でもちろんだと返した。

「あの子、本当に強いんだな」

「そりゃあのがスコインの娘で、ヘンリックのやつが気にかけてたんだ。気丈に育たなきや嘘つてやつだろうさ。ま、そんな事は今はいいんだ。私が気になるのは何度か聞こえた、姿なき声だ」

「なあ、ほんとに聞こえてるのか?」

美耶子の台詞に対して、声の発された方向へ顔を動かすアイリーン。その無機質なペストマスクに見つめられ、美耶子はびくりと体を震わせる。

「……ああ、やつぱりあんたが連れてたのかい。なんなんだい、そいつは?」

「この子は美耶子だ。神様とかいうやつ犠牲になつて今はこんなだけど、俺と一緒にいろんな異界を滅ぼしてきたパートナーだよ。そいつとか、あんまり好きじゃないから名前で呼んでくれよ」

今まで近くにいるのに触れられなかった分、美耶子に対して過剰な防衛意識でもあるのだろうか。恭也は笑顔を崩すと、やはり少しばかり棘のある言い方でアイリーンを攻め立てた。

それに対し、アイリーンはまるで姫を守る騎士のようではないかと、くつくつと喉の奥を鳴らす。

「なんだよ」

「異界を滅ぼすだの、ずいぶんと物騒な騎士様だと思ってね。まあ、人に仇なす存在じゃあ無いなら構わないさ。私もそういう輩にはちよいと縁があつてねえ、見つけ次第殺すことにしてるのさね」

「……それが、この夜の元凶つてやつなのか？」

「当たらずとも遠からず。普段は誰かが変じたどでかい獣やらのはずなんだ。だけど、今夜は長すぎる。いつまで経つても夜が明けない」

だから自分でも詳しいことは分からないと、アイリーンは告げた。

「さて、聞きたいことは聞けたし、ひとつ忠告だ。私ら狩人は、夢を見る。そして全てを夢として片付けちゃうこともできる。だけどね、あんたは狩人じゃあない。あんたも元凶を片付けようとしてるってんなら、止めやしないさ。それでも気をつけな、ヤーナムは秘密を暴こうとするやつに容赦をしない。……喰われるんじゃないよ」

「ああ。当たり前だろ」

「あいつらに恭也を食わせたりなんかさせない」

美耶子と恭也、二人の強い意思を受けて、彼女は仮面の下でふつと笑った。

「はんつ、話しすぎちまったね。私はそろそろ次の獲物を狩りにいく。それじゃあね」

狩装束の鳥羽を揺らし、アイリーンは闇夜に溶けていく。あの様子では色々他にも知っていることは多そうだが、この街を巡ることでそれらの謎を紐解くことができる、と言いたげな台詞だった。

謎、それこそが解明するべきものであり、また恭也たちが探し求めているものでもあるのだろうか。いまだ夜の帳は降りたまま、アイリーンの言う秘密を何一つひけらかしては居ない。それでも到達することができるのであれば、恭也は聖堂街を見据え、焔薙を固く握った。

二歩目の横合いから、振り下ろされる袋に気づかずには。

## 秘匿

須田恭也は緩急のついたふいうちに弱い。というのも、羽生蛇村での一件に巻き込まれたその時から、彼は罨にかかつて猟銃で撃たれたり、墮辰子と言われていた羽生蛇村の神に襲われ意識を失ったりと気を失う事態には事欠かない。

「恭也！ 寝過ぎだぞ！ おい！」

そして気絶した彼を揺り起こすのは、いつだって彼女の役目だった。

呼びかけはゆつくりと彼の意識を浮上させていき、最初に感じたのは冷たく硬い地面に指先が触れているという感覚だった。

「う……ん……？」

「よかった、起きてくれた」

「美耶子、ここは……？」

びちよん、と雫が落ちる音が反響する。

彼が辺りを見回そうと目を開くと、最初に目に入ったのはボロボロに錆び、ねじ曲がった檻だったもの。見渡せば、辺りには似たようなものが多く見受けられる。どうやら、牢屋のような場所に連れてこられたらしい。

「恭也、また不意打ちくらって気絶させられたんだ。その気絶させたやつが袋に入れて恭也をここまで連れてきた、みたい。わたしも、なぜか気絶しちゃってどうやってここに来たのかはわからないけど」

「美耶子も気を失ったって……」

「それから、横の人を起こして」

「え、うわっ!」

美耶子の言葉に従い隣を見れば、自分よりも背の高い男性が横たわっていることに初めて気づいた恭也が驚愕の声を上げた。だが、よくよく見ればその男性は死体ではなく、呼吸で体が上下しているのがわかる。

それに、身につけているのは狩装束。おまけと言わんばかりに血塗れで、意識すれば鉄臭さと生臭さがないまぜになった悪臭が恭也の鼻を刺激してきた。

「この人って」

「最初みたときと格好は変わってるけど、多分、あのときの狩人だと思う」

目を引くのは背中に垂れる白い布だろうか。相も変わらず顔の全体像は見えないが、美耶子が人の気配をその程度で見間違えるはずもない。彼女は確信をもっていた。

「それって、美耶子の話を聞いて俺を運んでくれた人?」

「うん」



「……よし」

意を決して、彼はそおつと、うつ伏せになった狩人の背中に手を当てる。

「狩人、さん？」

ゆつくりと揺さぶると、それだけで彼の鋭敏になった感覚に刺激が伝わったのだろうか。ピタリと閉じていた瞳を、一瞬で覚醒させた狩人が、腰元の武器を構えて後ずさる。カツと見開いた目は警戒の色を宿していたが、視界に入ったのが見覚えのある異邦の少年だとわかるやいなや、大きく安堵の息を吐く。彼の目にはちゃんとまともだと映ったのだろうか。武器をしまい込み、視線を横に反らしながら言葉を紡ぐ。

「貴公、よもやこのような場所で相見えようとは数奇なものだな」

「えつと、切りかかってきたりしない？」

「……すまなかった。この街では戦い続けて張り詰めていた、問題ない、はずだ」

謝ってくる狩人の姿に既視感を感じたのか、ぷつと美耶子が笑い声を漏らした。

「変わらないな、おまえ。でもよかった、獣にはなつてないんだな」

「その声、やはり貴公も」

「美耶子だよ。教えたんだからちゃんと呼ばないとしつれーだぞ」

「む、そうだな。ミヤコ……これでもいいのか」

「楽しそうだな美耶子。そりゃ、話せる人がいるってだけで嬉しいか」

とにもかくにも、二人揃ってこんな場所に囚われてしまったのにも理由があるだろう。囚われた、とはいっても肝心の牢獄は齒抜けの檻となつているため、投げ込まれたと言つたほうが正しいか。

恭也と狩人は、簡単な自己紹介を済ませてここに来た経緯について話し合つた。

「同じだな、私も袋を背負つた男に不意をうたれ、氣を失つたらここにいた。場所は医療教会の工房、その空洞を飛び降りた先だつたが。しかしオドン教会のすぐ外に……獣避けの香があるとはいえ、近すぎる。教会へ向かわせた老婆や、先程話した娼婦たちが心配だな」

腕を組み、不安そうに狩人が言う。

近寄るな、というオーラを全身から放つていたあの老婆は、どうやらこの狩人が案内したらしい。おかげで近寄りがたく、故意にも避けてしまつて喋ることも出来なかつたが、少なくとも同じ街の住人であるアヴァならば、馴れ合いに關して多少はヤジが飛ぶだろうが、必要以上に邪険に扱われることもないだろう。

一抹の不安は残るが、やはり問題となるのは恭也を氣絶させた袋の大男だろうか。

「ここで話していても埒が明かん。幸いにも、二手に分かれている。薄暗いが、私には携帶ランタンがあるのでな、私はその階段から地下に降りよう。貴公は上を目指して部屋の外を見てほしい。行き詰まればすぐに合流しよう」

「わかった」

「ああ、それから貴公。もう一つだ」

狩人の提案は妥当なものだ。

とくに反対することもなく頷いた恭也が焰薙を構えて檻の外へ出ようとしたところ、何かを思い出したような狩人に呼び止められる。

「これを使い給え」

「え？ わつと」

狩人からどこからか取り出した其れを投げつけられ、思った以上の重さに彼は体勢を崩した。そして焰薙の炎で照らし出されたそれは、硬質で冷たい輝きを放つ長銃であることが判明する。

「これって……？」

「かつて、最初の狩人の一人、ルドウィークが使ったとされるものと同じ長銃だ。狩猟用の単発銃を使っていただろう？ 工房で拾った方がいいが、私の戦い方には合わんな。貴公が持つていくといい」

今まで使っていたものよりもずっしりと重たい感触はあるが、心強い遠距離武器が戻ってきたことへの興奮は彼の声を上ずらせた。

「あ、ありがとうございます！」

「狩人、おまえやつぱりいいやつだな」

早速空っぽになった猟銃用のベルトにルドウイークの長銃を差し込む恭也。ヘンリックたちの使っていた短銃なども拝借することを考慮に入れていたのだが、これは本当に嬉しいサプライズである。しっかりと頭を下げた恭也は、焰薙を握る力を強くして元氣いっぱい部屋の外へと駆け出していった。

そんな恭也たちの姿を見つめて、狩人はランタンの灯りを点けながら、ひとりごちる。「似つかわしくない。が、必要な明るさだ」

彼は思う。年相応であればこそである。もはや忘れ去った過去にも、あのような時代があつたのだろうか。今となつては最初の記憶は、獣に噛み殺される感触と、リベンジに燃え逆に狩り殺してやつたという達成感。それが最も古い記憶だ。

そんな陰鬱な近況しか無いからこそ、思い出すための楽しみが出来た。ああ、早く「青ざめた血」とやらを探し出し、記憶を取り戻すついでに狩りを全うしてやろう。そうして、これまでに重くなつていた気持ちも新たに、ほんの少しだが、引きずるものが軽くなつたような錯覚にも満ち足りながら、彼は地下へとその足を向ける。

足取りは軽い。人とは、やはり間を取り持つてこそ人間であるのだと。

たん、たん、たん。軽快な足取りで捻れたような階段を登り、恭也は勢いよく地上に

到達した。

と、その瞬間である。恭也の眼の前に、赤い染みが滲んだ巨大な袋が振りかぶられた。階段を抜けた先の大広間、そこで出会い頭に出くわしたのは袋の男であった。袋の男が恭也の気配を感じ、先制攻撃を仕掛けてきたというわけである。地上に出たかと思えば、振つてきたのは月明かりではなく血が滲んだ重たい袋。恭也は苛立ち紛れにそれを躲した。

今回は得体の知れない場所ということで警戒していたこともあつて、驚きはしたがそれだけだ。元々、戦い続けてきた恭也のポテンシャルは高いほうだ。少しずつではあるが、この地に跋扈する敵の素早い動きに慣れ始めているとも言えよう。

そんな彼は、不敵に笑うと背中の華美なレリーフが彫られた長銃に手を伸ばした。

「早速試してみるか」

そうして距離を取った恭也は、ルドウィークの長銃へと、いつものように焔薙の炎から分離した蒼炎を込め、撃鉄を下ろす。今まで使ってきた猟銃とどのくらい使い勝手が違うのか、という検証のためでもあつたのだが、引き金を引いた瞬間、驚くべきことが判明した。

それとも本来は水銀弾を込めるための機巧であつたがためか、なんにせよ、今回発覚したのは――

「オオオオオオ!?!」

放たれた炎の散弾は、より深く敵にめり込み、その接触箇所から全身を火で包むという強力な武器にとなっていたのだ。

以前使っていた猟銃は、より遠くの敵を狙撃できる利点があった。比べ、この銃は狙撃こそできなくなったが、取り回しのよさが全体的に素早くなった敵への対処がしやすく、なるほど、この街で作られたがゆえの利点にあふれている。

威力の高さと全体に広がる浄化の炎の衝撃は、今の恭也に必要な一手だったとも言えよう。

そして彼が敵の間を見逃すはずもなく、炎上した袋背負いに鋭い一刀を与える。火だるまどころか、焰薙の炎と相乗し、灰燼へとその身を変えてしまった袋の男の最期にあっけにとられるが、それにかまけている間に二体目の鋭い蹴りが恭也の意識を切り替えさせた。

あの大橋で出会った巨大な獣に比べれば、十分に踏みとどまれる程度の威力。だが彼ののんきな頭を冷やすには十分な衝撃である。

好戦的に笑った恭也は、お返しとばかりにそのやせ細った足を切り捨てると、もはや袋の男があかく暇すら与えず、焰薙の刈り取るような一閃でその首を跳ね飛ばした。飛び散った血液は焰薙の蒼炎によって焼き尽くされ、乾いた血の塊が細かな砂のように広

間の床へと広がっていく。

残心とともに大きく息を吐くが、気を抜いているわけではない。

「恭也、その柱の陰にも変なのがいる」

「ん」

美耶子の助言の通り、視界をちらりと間借りした彼は、柱から機を伺っていた、老婆のような敵を見つける。見た目はともかく、何かをえぐり取るような器具を持つ老婆は、殺意に溢れたその姿勢であった。老婆を切り捨てることに躊躇いはあろうと、彼にとって命を脅かす攻撃対象だ。

一抹の容赦もなく間を詰めて刀を振りかぶった彼は、気づかれるとは思っていないかったのか、呆けて焔薙を見たまま動かない目玉の収集婆をざっばりと切り捨てた。

「うん、もういない」

「そういえば狩人さんは今頃なにしているんだろ。ちよつと見てみるか」

血糊を払い、蒼炎で浄化しながら彼は呟いた。

そういえば、この地の人間に対してはまだ視界ジャックを試していなかったことを思い出す。ものは試しと美耶子以外のチャンネルを探した恭也は、外の階段をのぼる豚や犬の声など、混線する視界の中から地下牢を映した視界を見つけ出す。

「なんか行けそうって思ったけど、ほんとに繋がるのか」

狩人の視界が縦に揺れながら、階段を登ってきているのがわかる。どうやら下の階の探索は終わったようだ。

それはそれとして、いくつかの根拠もないのに理解できるという不思議な感覚が恭也たちにとつては不可解だった。あの巨大な獣や、ヘンリックの獣を見てから流れ込んできた不可思議な無意識下の知識。それが正解だけを恭也の頭の中で押し付けてくるような感覚だが、貯まれば貯まるほど、なんだか美耶子の声がクリアになつて聞こえるような気もする。

「やつぱり、恭也もヘンだけど大丈夫つて思ってたのか」

「美耶子も?」

「うん、赤い水の影響もなさそうなのに、のぞき見もそうだけど。さつきから何度か宇理炎が使えるなくなる瞬間が、なんでかわかるの」

「そつか。俺はなんか、宇理炎の発動は触媒が足りない、みたいな感じがするな。でも触媒ってなんなんだろ、ちよつと待つたらちちゃんと使えるようになるしさ」

「それはおそらく、啓蒙の導きでしょう」

うーん、と建物の入り口で頭をひねる恭也たちのもとに、ふたつの足音が近づいてきた。そのうちの片方は、恭也たちのつぶやきを聞いていたのか、そうである、という確信の籠もつた声色で話しかけてくる。



「あなたが狩人様の仰つていた同行者様ですね。お初にお目にかかります」

「彼女はアデーラというらしい。我々と同じくここに囚われていた身で、オドン教会まで案内することを約束した相手だ。キョーヤ、護衛に手を貸してもらえると助かる」

「それはもちろんだけど、啓蒙つてなんだ？」

「辞典で読んだ事あるぞ恭也。何も知らない人にきちんと教えて、正しい知識を教えることだ」

そう言った美耶子の言葉は聞こえていなかったのか、アデーラと名乗った黒い尼僧は恭也の問いにのみ応えるように言った。

「啓蒙とは、世界の真実を見る力。己が見聞きした曖昧なものを真実として捉えた時、我々の啓蒙は高まります。そう、医療教会の方が仰られました」

「真実を見るための力、かあ」

それを高めることができれば、いずれ美耶子の生きた姿も見られるのだろうか。少し楽しみであると同時に、やはりあの時焼死体となっていた美耶子が、はたして体を持っているのかどうかもまだ恭也には分からない。楽しみであると同時に、不安が彼を襲っていた。

それはそうとして、語るわりにはアデーラには啓蒙とやらが訪れているわけではないらしい。それとも別の要因か、なんにせよ、美耶子の声が聞こえないともなれば、不用

意に警戒させるわけにもいかない。

「うん、わかっている恭也。狩人も、私にしか見えないものならちゃんと言うから、ダイジョーブだ」

美耶子の返事を聞いた恭也が狩人に視線を送ると、彼も理解したかのように頷いた。狩装束が顔を覆い隠しているが、その瞳からは謝罪の念も見受けられる。彼は一度相対した獣に対しては無慈悲で、また血を浴び取り込むことに酔い始めたよい狩人ではある。また人らしさというものを兼ね備えている。それが、彼の強さとなるのだろうか。

恭也も美耶子も、狩人に対しては逆に申し訳ない気持ちでいっぱいだ。こちらの都合に付き合わせてもらっているのだから。

「ありがとうアデーラさん」

「それから、医療教会の方々には神秘と見えた時、狩人の方と同じく水銀弾を使っていたと聞きます。獣に落ちた市民や、街のいたるところに未使用の弾薬が落ちているはずですよ。あなたの言うウリエンとやらがどのようなものかは知りませんが、きつと役に立つでしょう」

アデーラはあくまで市民あがりの尼僧としての身分ではあるのだが、苦しみと共に血の調整を受けていた彼女は、医療教会と繋がりが強い。おそらく、この面子において最も神秘やヤーナムの文化において博識と言えるだろう。

狩人もまた、彼女の語る知識を頭の中に叩き込み、これから先に待ち受けているであろう強敵のための対抗策として組み込んでいく。0からスタートしたと言っても過言ではない狩人は、使える手段なら屍肉漁りだろうが、なんでもやるつもりであった。

「私のような未熟者が、狩人様のお役に立てるのならば……おや？　そういえばあなたは狩人ではなさそうですね」

「ああ、でも俺もそれなりに戦えるからさ、狩人じゃなくたってこの異界……獣狩の夜を終わらせようと思ってるんだ」

「それは……異邦の民だというのに、どうして、そこまで？」

「異邦だろうがなんだろうが、石を投げられようが、人が死ぬ嫌な怪異を解決できるなら、するに越したことはないと思うんだけど……」

「……あなたは、高潔な方なのでですね。ソレに引き換え私は」

「え？」

「いいえ、なんでもありません」

狩人が考え込んでいるうちに、恭也とアデーラの話し合いも終わっていたらしく、なにより握手を交わしている。美耶子がそれを女性とデレデレしていると認識したのか、ふんつ、と面白くなさそうな声が虚空から響いてきた。

「キョーヤ、その獣狩の夜についての手がかりなのだがな、あの地下牢のあたりに有力な

メッセージを見つけた」

「メッセージ？」

「我ら狩人にしか認識できぬ、使者を通じた別の夢の狩人へ送る助言だ」

曰く、「悪夢の儀式は、赤子と共にある。赤子を探せ。あの鳴き声をとめてくれ」というなりにやら儀式を行っている集団がいることを示唆した内容。その大広間にあつたランプの近くにも「狂人ども、奴らの儀式が月を呼び、そしてそれは隠されている。秘匿を破るしかない」というメッセージがあつたのだとか。

「狂人とよばれるような集団が赤子を用いて儀式を繰り広げ、なにかを隠している。まとめるならばこのようなところか……」

「狂人……もしや、メンシス学派のことでしょうか」

狩人のこぼした内容に、またもやアデーラからの助け舟が出された。

彼女も詳しくは知らないのだが、今の医療教会から考えを分つ集団であり、その考え方は異端の一言。また、裏切り者だ。アデーラは興奮しながら正統なる医療教会から離れるとは、と憤慨したが、はたと狩人たちの見つめる視線によって我を取り戻した。

「申し訳ありません、つい、頭に血が上ってしまい」

「いいや、有力な情報だ。となるとビルゲンワースを目指すべきか……」

「あの、狩人様、差し出がましいようですがビルゲンワースは医療教会にて禁域とされて

おりますが」

「だからこそだ。皆が口々に言う。今宵の夜は長すぎると。ならば秘密を探り、そこから原因を突き止めないことには倒す相手も見つからない、そうは思わないか」

「……………」

医療教会に対しては絶対の信頼を寄せているがために、アデーラは閉口することしか出来なかった。

「答えにくかったか、許せ」

「いえ」

狩人の何気ない言葉であっても、今のアデーラには思うことがあるのだろう。俯き、視線をさまよわせながら彼女はなにかを考え込んでいるようであった。

そう思っていると、何やら鼻孔をくすぐるいい匂いが漂ってきている。こんな、人がそのまま石化したような彫刻ばかりがずらりと並ぶ異様な町並みで、そんな日常的な屋台を出している場所などあっただろうか。

「おーい！ 狩人さん！ でっかい豚倒したぞー！」

狩人たちの疑問に応えるように響いたのは、少年の朗らかな声だった。

眼の前の階段を見ると、青い炎を刀身に揺らめかせた不可思議な武器を持った少年が、巨大な豚の死体の前で脳天気 hands を降っている。危険だろう、と注意しようと

思ったが、狩人たちが話し込んでいる間に近くの敵は掃討し終えていたらしく、彼のいる階下には蕩けた瞳の民衆や、ケダモノと化した飢えた犬の死骸が転がっている。

アデーラはその光景に大層驚いていた。それなりに戦える、という言葉葉を鵜呑みにして群衆一人を退けるのが精一杯だと思っていた少年が、これほど多くの獣を討ち取るなど。

狩人はまちきれなかったのだらうなど少年の性格から推測し、彼のいる場所に歩みを進めようと階段の手すりに手をかけた。

そこで、ふと、狩人のために残されたメッセージが地面に輝いている事に気がついた。

「……青ざめた血の、空？」

狂ったかのような汚らしい走り書きであったが、なんとか読むことが出来たその内容は、彼をして困惑を隠しきれないものであった。

見たまえ！青ざめた血の空だ！

つられて空を見る。大きな丸い月が輝く、赤い空。どんよりとした巨大な雲が流れるだけの夜の空。それだけだ。

「狩人さん？」

「いや、気にするな。まずは聖堂街へ戻る道を探そう」

「……？ わかったよ」

現状の情報交換はもう必要ないだろう。そう考えた狩人たちは、アデーラをオドン教会へと送り届けるため、この奇妙な街からの脱出経路を探すことにした。

しかしまちなかを探しても、どの扉も固く閉ざされており、大通りから続く道は当てにできそうにもない。豚や目玉をめぐり出そうとしてくるヘムウィックの婆、そして凶暴化した犬や、人さらいの袋男。そんな常軌を逸した連中しかうろついていない異形の街をあるき回るが、まともな道は見つからなかった。

そう、まともな道はなかった。

だが狩人とアデーラは、地上の恭也たちと合流する前にとある場所を見つけていた。二体もの袋男が守るように立っていた、地下牢の壁に空いた巨大な穴。そして穴の向こうから漏れる月明かりを。

恭也は土地勘はないが、こうした状況下においてそうした場所が活路になるだろうと思ひ、狩人にまずは自分が先行すると伝えてその壁の穴を抜けていく。そして穴から飛び降りた先には、やけに乾いた空気と冷たさが同居する、崖に隣接した小道が広がっていた。

「……崖に、一応は柵も付いてるけど誰が作ったんだこんな道」

袋背負いたちが行き来している場所であるのなら、あれだけ警戒していてもおかしくはない。そう思つての先行であつたが、恭也が思つたよりも道としての形を成していない

いがために唸らざるを得なかった。

なんにせよ、巨大な門に続く光景もみえる。おそらくはここで間違いないだろうと、恭也は他の二人を階下から招いた。

「多分こつちだ。アデーラさんは降りられる?」

「私が抱えよう。貴公、おとなしくしていることだ」

「は、はい」

アデーラを抱きかかえた狩人が、その人を逸する身体能力で危なげなく着地する。人間、1 m以上の段差を降りるのにも足首を痛めそうなものだが、この狩人は人を抱えながらそんなそぶりを見せることなく優雅に降り立って見せている。これが、血の医療のなせる業なんだろうかと、美耶子からもいくつかの話を聞いていた恭也は、まだ見ぬ医療教会とやらへの不信感を抱いていた。

アデーラの手を支え、反対の手には己の獲物を握りしめる狩人。そして恭也は狩人から一時的に譲り受けた松明を手に、道の先へ続いていた門の見える場所へと辿り着いた。

しかし、遠目では闇夜で見えづらかったため気づけなかったが、門の前には恐ろしい番犬が存在していたのである。

「……………これも、獣なのか?」



恭也の手にもつ松明が、その夜に溶け込むような長い長い漆黒の体毛を照らし出した。まさしく骨そのものの体から、毛が直接生えている。生きているのか、死んでいるのか、傍目だけでは不確定にすぎる要素に満ちた「ソレ」は、生の息吹を身近に感じ、ピクリと身を震わせた。

「不味い……！ アデーラ、岩壁まで下がれ！」

「あっ……!?!」

最初に対応したのは狩人だった。突き飛ばすようにアデーラを退避させた狩人は、その恐るべき膂力で壁際まで吹き飛ばされた彼女に謝罪の念を送った後、すぐさまその視線を黒黒とした体を持ち上げ、威圧感をマシていく獣へと回す。

一瞬の遅れはありながらも、恭也も同じように焔薙を右手に、左手には宇理炎を構えて、四つん這いに立ち上がった巨大な獣へと敵意を向ける。

獣は両者を己を脅かすものと認識し、咆哮を月に捧げた。

月夜を照らす蒼き雷光を、その身に宿しながら。

## 青雷

黒き骸骨のような獣。その咆哮は命あるものとは程遠い、板を搔き巻るような絶叫。それと同時に空気に弾けた青の雷が迸り、大地をも這って大きく伸びた。明確な敵意と意思を持って恭也たちを傷つけようと迸る青雷に対し、恭也と狩人は左右にステップを刻むことで初撃を躲す。

彼らの衣服の先を黒く焼き焦がした青雷は、見ているだけでも目に痛みが走るほど。骸骨の頭を持った異形の獣は、やはり骨を擦り鳴らすことで再び咆哮を上げ、その筋張った右腕に3本もの巨大な鋭爪を並べ立て、雷とともに恭也のほうへと振り下ろした。

「恭也！ もつと後ろ！」

空気を伝わる連続のラップ音。爪の間合いから逃れたかと思えば、音を立てて体中から湧き出る青雷がその爪先から放出され、枝分かれする。恭也の体を掠めて飛んでいった雷は、しかし掠るだけで彼の体を内側から焼き尽くす。

美耶子の叫びに反応するも間に合わず、焼け焦げ損傷した内蔵から逆流した血液が彼の口から吐き出された。その弱った恭也のほうが仕留めやすい獲物だと判断したのか、

青雷の黒獣はなおも彼に対してその体軀を存分に使った飛びかかり攻撃を敢行する。

長い黒毛が慣性に引かれて一瞬Uの字を描き、そして重力に従いまっすぐと伸びた。黒獣の体はこれまでになく帯電しており、着地と同時に狩人をも殺し尽くそうとする悪意をすら感じる。

されど、狩人がそれを見逃すはずもない。恭也が諦めるはずもない。

狩人はアデーラを逃した壁際までは雷が来ないであろうと当たりをつけると、迷うことなく黒獣の着地点へと急行。そして恭也は一瞬白く剥いた目に生の輝きを取り戻しつつ、崖際の木柵へと急いで走り、パールの着地を避けると同時に木柵から大きく跳躍した。

目を焼くほどの青雷が、旧市街の外壁を青く染め上げる。

人の丈よりも小さな人工物はみな黒煤へと帰す。暴力的な雷の破壊の跡は着地点を大きく抉り、宵闇をすら上回る黒い大地へと変えた。

だが肝心の二人は依然として健在。壁際から反転し、伸ばしたノコギリ鉋を手にした狩人が眼光で射抜きながら駆け寄り、上からは恭也が蒼炎を灯した焰薙を翳して降ってくる。そして二人が黒獣に到達するのは同時だった。黒獣のドク口の顔が大きく縦に割かれ、胴体の下をすり抜けるようにノコギリ鉋を自らの背中から前へと振り下ろしながら駆け抜ける。十文字の傷を負った黒獣は、しかし血を吹き出さぬが故にさほど致命

傷とは行かなかった。

再び黒獣の体には青雷が迸り、帯電するその体は小刻みに震え始めた。予兆である、とは恭也も狩人も察していた。

「くそっ！」

それはどちらの悪態か。

ギリギリのところまで体をかばった狩人の右腕は衣服ごと焼け焦げ、激痛を彼の利き腕にもたらした。だがそこは狩人、左の袖口から滑り込ませた輸血液を太腿へと打ち込んだ。

恭也は彼の行動を予期して黒獣の意識を引き、宇理炎の炎を黒獣と狩人の間に打ち込むようにして燃え上がらせる。不死身の使者すらも焼き尽くす炎には本能的な恐れを抱いたか、反対側の恭也を脅威とみたか、先程よりも荒々しい動きで彼へと襲いかかる。

「恭也、もうあと6歩うしろ！　そこだとアデーラを巻き込むぞ！」

「了解！」

恭也が美耶子の指示のもと一人の立ち回りを繰り返している頃、輸血液を己に打ち込んだ狩人の右腕は、焼け爛れた皮膚は吹き飛ばされ、内より新たな肉が吹き出る血とともに生え、まっさらな肌が現れていた。

そして確かめる間もなく取り落としたノコギリ鉋を持ち直し、飛び込むように後ろを

取った彼は体を弓のように限界までしならせ、ノコギリ鉋を黒獣へと振り下ろした。渾身の一撃は、獣の頑強な体を削り切る構造をした刃が骨肉を裂き、先のお返しだと言わんばかりに黒獣の背中から右腕へと飛ぶような切込みを入れる。それは深い深い、溝である。

これにはたまらず苦悶の軋みを上げた黒獣は（自我と呼べるものがあるかはわからないが）、我を忘れて放電の準備をしはじめる。だが、二人にとってそれはあまりにも愚かで鈍い選択であつた。

焔薙の炎が一層の揺らめきを見せ、轟々と燃え上がる。今度は狩人が恭也の意図に気づき、彼は隙だらけの黒獣の手足を深く切り込んだ。人の身の丈をいくつ積んでも足りぬ巨軀は膝を折り、地に伏せる。そして集まつていた青雷は散り、ついに黒獣の体から光が失われる。

代わりと言わんばかりに、蒼炎が黒獣の頭蓋を貫いた。やがて蒼炎が黒獣の顔から体へと燃え移り、皮肉にも同じ青の光に身を包まれながら黒獣は炎上する。だがこれはただの炎ではなく、退魔と消滅の荒れ狂う炎でもあつた。穏やかな最期は許されず、黒獣の体毛その一本に至るまで炎が回つたところで炎が獣の内より弾け飛ぶ。

蒼き火花を散らし、黒獣が消滅していく。

燃え尽きた跡、かの獣が宿らせていた青雷を閉じ込めた狩人証が残された。

「……あれも獣か。雷を纏うとは面妖なものだ」

集中のあまり、釣り上げていた目元から力を抜き、狩人証を拾い上げ、握りしめた狩人がつぶやく。異界とはいえば、特殊な能力を發揮する敵がいなかったわけでもない恭也にとっては慣れたものとはいえ、あれほど強大な存在が何体も存在するこの街は異常の中の異常であった。とはいえ、何度こんなことを思ったのかも定かではない。気が抜け、恭也は苦笑を漏らしながら体を大地に投げ出した。

「つあーっ！ きつつ!! ほんとなんだよ獣って!」

「成れの果てであることは、確かであろうな」

「お疲れ様、ふたりとも」

息を切らす二人は、短いながらも濃密な戦闘から生還できた互いへと健闘を称え合う。倒れている恭也へと、武器を仕舞い込んだ狩人が手を伸ばしてきた。彼はにっこりと笑って、その手を掴んで引つ張られ、立ち上がる。

「背中が煤だらけだ」

「えっ、ああ。そういえばさっきの電撃で地面ごと焼けてたっけか」

あの目が眩む様な雷光と、身が内より焼き尽くされる痛みを思い出す。恭也も撃たれる斬られる焼かれるといった稀有な経験をしてきたが、あの痛みを痛みで上書きするよいうな全身を走る衝撃は忘れられないだろう。

汚れと記憶が恭也の表情を七変化させた。もちろん、辟易とした表情である。

「あのような恐ろしい獣を狩るとは……あなたは、優れた教会の狩人なのですね」

「アデーラさん」

「狩人様、素晴らしい……」

顔をほころばせ、狩人を称賛するのは避難していたアデーラである。連れ去られ、同じ境遇の人間がいる牢より抜け出したかと思えば、聞こえてくるのは人の悲鳴。そこに己が信じる教会の背布を身に着けた狩人が現れた。

救いそのものである。もとより妖しげな瞳の色を灯していた彼女は、比類なき狩りの腕を見せた狩人に熱っぽい視線を乗せていた。恐ろしく、強大で、闇のように深き黒く異端の雷を纏った死の権化のような獣に挑み勝利する姿。とどめを刺した恭也の姿も、彼女の頭の中ではすでに狩人の姿へとすり替わっている。

彼女は浮ついたような声で言う。

「ああ、狩人様。私をお救いくださりありがとうございます……」

「貴公……」

狩人は一瞬で、彼女の内に秘める危険性に気づいたが、あえて目を伏せた。緊張感のあまり、高揚が過ぎただけであろう。そうであってほしい、と。狩人の人らしさを求める感性が、そのような結論を下す。

思えば、彼女は他の生存者達とは毛色が違う。出会った状況も、安全な場所へと連れて行くための方法も。

「なんかあいつ、前にも増しておかしくなってるぞ」

「前にも？ 美耶子、それって」

「でもまだ引き返せる。多分狩人も気づいてるからな、恭也は気にするな」

美耶子の意味深な言葉に、恭也はアデーラの態度に引っかけかりを覚えつつも、狩人がどうにかするとういうのなら任せるしか無いだろうと結論を出す。それよりも気にするべきは、ようやく安全になったこの場所からの移動だ。

黒獣がいなくなつたことで開放された扉の前に恭也はたち、歯を食いしばって強く力を入れる。重く巨大な扉は間違いなく一人で開けるものではないのだが、人の身を外れた力を持ちつつある恭也ならばギリギリで力が足りたらしい。舗装された道に積もつた土を捲りあげながら、扉が半開きな場所で硬い音をたてて止まる。一人が通るには十分で、変異した獣が通るには不十分な隙間ができた。

「狩人さーん？」

「うん、ああ、そうだな。先を急ごう」

アデーラに対して何を言うべきか迷っていた狩人であったが、呼びかけによつてその問題を後回しとしたらしい。彼女にはぐれず着いてこいと告げた狩人は、先行して扉を



くぐった恭也の後へと続いた。

「やはり旧市街か」

見覚えのある景色に狩人が呟く。

「知ってる場所？」

「ああ、その廃屋から螺旋階段を登ればオドン教会はすぐだ」

道の複雑さや飛び降りを繰り返すためアデーラには険しい道であるが、是非を問えば間髪入れず狩人についていくとのアデーラからの返事が帰ってくる。あまり良くない兆候が顕著になって現れているが、それももう少しの辛抱だろう。オドン教会での少女や、先に避難している幾人かの人間が、交流を持ってくれれば。

「なんか静かだな……」

「旧市街にはもう獣もいない、残っている獣も軒並み上層街にいるんだろうな」

「まあ、なんか出ても関係ないけどな。今の俺たちならちゃんと言葉も楽にしてやれるだろうし」

「なんかテンション高いな恭也」

「そりゃあ、アデーラさんも助かるし、みんなで頑張れたし。もうひとふんばりってところだろ？」

「……ああ、そうだな」

狩人も相槌を打ちながら、これまでにしてきた獣狩は、最終的には生き残った人々への不安を晴らすための間違っていないものであるのだろうと己を納得させていた。だが今でも思い出す。この旧市街に初めて足を踏み入れた時、銃撃の雨を降らせてきていた古狩人の言葉を。

それでも、もはや狩人の道は踏み外すことなく止まれないだろう、とも。

「狩人様？」

長考にふけっていた狩人を呼び戻したのは、アデーラであった。彼女になんでもない、と返した彼は上り詰めた螺旋階段からのルートを各人に教えていく。

その後、彼らは程なくしてオドン教会の門戸を再び叩くこととなった。獣避けの強い香の匂いと、むせ返るような濃んだ空気は相変わらず。だが、それゆえに安全は保証されているということがよく分かる。

「ああ、教会の方の匂いがする。よかった、まだまともな人はいたんだな……なんて」

赤い衣の男は新たな避難者を歓迎する言葉を発したが、アデーラに無視をされてしまった。そのことで多少は落ち込むも、助かる命があるのならと諸手を挙げて喜んでいくようにも見える。そんな中、オドン教会に戻った恭也にはひとつの気がかりがあつ

た。

引つかかりを覚えたまま辺りを見回してみれば、なるほど、確かに避難者は増えている。だが肝心の、恭也が連れてきたガスコイン神父の娘、アヴァの姿が見当たらないのである。狩人は到着して早々、アデーラから話し相手として捕まってしまうためあてにはならない。

「なあ、アヴァはどこいったんだ？」

「うっ……その、さ」

そうなれば、必然と質問の相手は限られる。

赤い衣の男は怯えるように身を竦めた。恭也の問いが、尋問のようだと感じたらしく両手で体を抱いて震え始める。そんなつもりはないのだと恭也が優しく諭しながら男に話を聞くと、彼は何度も謝りながらに語った。

「獣避けの香が切れかけたんだ。そ、それなら、あの子は他の家にさがしに行くって言って飛び出しちゃった。あの子、武器ならあるって墓地のほうへと行っちゃって……」

頭を抱え、泣きいるような声で赤衣が続ける。

「なあ、あんた、お願いだよ。あの子を探し出しておくれ。きつと、香をあまり使わない市街地に戻ってるんだ。いくら獣を狩ったとして、尽きないわけじゃない。不安だ、お願いだよ……あんな優しい子を失いたくなんてない」

加えて、赤衣の男にとつては本当に奇跡のような存在であった。笑顔を向け、真摯に己の行為に取り合ってくれる少女アヴァは、赤衣の男という教会に住み着くほどの人間が信じる神よりも大切にしたい存在。

そして恭也もそれほどの思いは無いけれども、まっとうな人間の一人としてうなずかないはずもなかった。

「もちろん行くさ。情報ありがとう。他の人にも少し聞いてみるから、安心して待つてくれ」

「あ、ああ……ありがとう、ありがとう」

何度も悔いるように告げられる感謝の言葉は、恭也というよりも自分への贖罪のようにも聞こえる。今日この時に至るまで、いったいどれほどの卑下を含めていたのか、これまで赤衣の男の生き方を知らない恭也にとつては、酷く哀れな姿に見える。

とにもかくにも、情報収集だろう。今回は美耶子の視点でも痕跡らしいものを見つけられなかった恭也は、同じオドン教会へと避難してきている人間へと語りかけたのだが、

「余所者に話すことなんて無い。俺には分かるんだ、分かるんだよ！ おまえは俺を騙して脅そうってんだろ!? その抜身の剣がなよりの証拠じゃあないか」

「いや、これは……」

「狩人でもない余所者め、所詮俺たちなんて搾取する田舎の負け犬とでも言いたいのか……！」

と、偏屈な男には真つ向から否定され、

「ああ、優しい子。アタシの可愛い可愛い息子よ。でもね、優しいあんたがわざわざ外に出たやつを探さなくたっていいんだ。あんたも危険だから、外には出るんじゃないよ」  
「ええつと、その、おばあさん」

と、真実を違えた老婆には諭される始末である。ヤーナムの住人はかつて少女の言つたように、たとえ夜を生き延びても次第に偏屈者と成り果てる事が多く、また常識では測れない会話も多い。特に後者の場合は一見普通の受け答えに思えるが、一方的で過去の映像しか見ていないような物言いであるのだから、彼女もまたヤーナムの異常の犠牲者とも言えるだろう。

こうなると、あとはアデーラとは別の意味で妖しげな雰囲気醸し出す高嶺の花のような女性が頼りなのだが、恭也にとつては少しばかり気後れする相手であった。なぜ、現代日本で健やかに過ごしていた恭也にはまだ出会ったことのない人種……赤衣の男いわく、娼婦であるというのだから。

しかし、そんな恭也の心情もお見通しといったところだろうか。難しい表情を浮かべつつも近づくと恭也に対し、娼婦の女——アリアーナは、極めて自然に浮かべた美しい笑

みを携えていた。

「坊や。聞いていたわ。アヴァちゃんなら知り合いの家を当たってみる、つてつぶやいていたわよ」

「本当ですか!？」

「ええ。それにあの子、あのガスコイン神父の娘さんなんですって? あの子、あなたの事を、お父さんとおじいさんとお母さんの次に、頼れるお兄さんだなんて事も言っていたわ。本当に、素直で可愛らしい子だったわ…本当に……」

だから、こんな自分が接するべきではないと彼女は目を伏せる。

「えつと……」

「ごめんなさいね、最後のはただの独り言だから。さ、早くいきなさいな」

微笑と共に、ひらひらと手を振ったアリアンナもまた、少しばかり偏った性格ではあるらしい。そんな彼女は考え事をするかのように座り直した。恭也も第一印象で苦手意識を持っていた相手にこう言われてしまえば、第一印象が恥であると認めざるを得ない。

彼は言葉少なく一礼し、その印象についての謝罪を伝えてアリアンナに苦笑されたところで、恭也は再びとなるオドン地下墓地へ続く階段へと足を向けた。

「なんていうか、不思議な雰囲気の人だったな」

「浮つきすぎだぞ恭也」

「いや違うんだって！　こう、いい匂いがすっげーしてたから——」

「ふんっ」

言い訳を重ねながら、恭也は最終的に美耶子へと謝った。とはいえ時すでに遅し。女性としての魅力を比較されたようなものである。繊細で複雑な美耶子の感情は、いまは恭也に対してツンとした出会った当初のような心持ちに戻されている。

きつとこれも、美耶子なりのエールでもあるのだろう。きつとそうであったならばいいなあと、背中から毒舌を受けながら、恭也は地下墓地のほうへと再び消えていった。

その頃、オドン教会ではまだ狩人たちの話は続いていた。

とはいえ、アデーラは熱狂的に広げていた話の途中ではたと、狩人の時間を無駄に使っているのではないかと気がついたらしく、その頭を深く下げた。

「ああ、狩人様、貴重なお時間を使ってしまい申し訳ございません」

「い、いや、良い。気にするな」

面食らった狩人がさかさず静止させる。すると彼女はすぐさま姿勢を正す。まるで言いなりになる人形のような応え方である。どこか、おかしい。

そうわかっていてもどうにもできないのが現状である。逃げるように視線を泳がせつつ、こうなれば腹をくくるしか無いだろうと諦めをも含んだ決意をし、狩人はアデーラに告げた。

「それより、貴公。この場所ならば安全故にな、この夜が明けるのを待つてもらいたい」

「ええ、もちろん、もちろんですとも。医療教会の助けを待ちます。もちろん、狩人様が望むならば血の施しとて……」

「血の施し……」

「ああ、申し訳ありません……出過ぎた真似をいたしました……俗体など、貴方に相應しいはずもありません」

深く問うように唸った言葉は否定に聞こえたのか、せわしなく瞳を動かしながらアデーラが狩人に謝った。そんな彼女のうちに眠る熱狂がいつしか冷めることを祈りながら、狩人は踵を返し、大聖堂側の出入り口へと向き直った。

「では、私は禁域の森へ向かおう」

口元のマスクを目元まで引き上げながら、武器を片手に狩人は走り去った。

あの娼婦や、出る時に舌打ちをわざわざ効かせてきた偏屈な男ともいずれば言葉を交わさなければならぬだろうなと思いつつも、恭世のように上手くない苛立ちも



少し携えているのは仕方のないことだろうか。

そして秘密と神秘のため、奔走する彼の姿が見えなくなつたところで、アデーラはひたすらに祈りを捧げるポーズで下を向いた。酷く恍惚とした、尼僧にあるまじき表情を浮かべながら。

## 無謀

墓地に囲まれたオドン教会は、その役割上ヤーナム市民が日常的に訪れることはない。だがいずれ死体が流れ着く地である以上、死と関係の深いヤーナム市民ならば誰もが知る場所でもある。

そうした場所に、今は生あるものが集っている、というのは実に面白い事実であるともいえよう。その理由が、命を脅かすもの共からの避難というのだから事更に。

「赤ずきんさん、これでいいの?」

「あ、ああ」

そのような陰鬱な場所に、まだまだ未来と命を感じさせる若い声が響く。対するのは赤いボロ衣でなんとか体を覆っただけの、怪しく醜い風貌の男。男は歪みきつた口の端を僅かに持ち上げながら、戸惑うように少女への返答を口にしていた。

対する少女は香につけていた種火を消して微笑んだ。それを聞いた赤衣の男は、こうして微笑みかけてもらえるという事実能耐えきれず、困ったように顔を伏せるばかりであった。

一度吹っ切れた、ということもあるのだろうか。その顔は平静のそれだ。

泣きじやくつていた弱いだけの少女は、次第に狩人の紹介で訪れる避難してきた住人たちに多少の会釈をされながら、弱まっていく香の匂いを嗅いでいた。だからこそだろう。ここまで逃げてくる中、よほどの緊張感に溢れていたのか、どこか疲れ切った様子で訪れる人々のために何かできることはないかと、幼心が行動力を生み出した。

その考え抜いた結果が、悪い人だとは思えないこの赤い衣の男に協力し、香を絶やさないうようにすること。自分の命はもちろん、獣と化した者共や、正気を失った教会の修道士なども寄せ付けぬ神秘の香は、焚くほどに安全性を保証する。

彼女の父——ガスコイン一家の父親は、獣を狩り、人を守ることを生業かぞくとした。ならばこそ、その娘である自分も、人の命を守る使命があるのではないかと。

明けない夜は無いが、ヤーナムに住む者ならば皆が思う。夜は時に長くなりすぎるものだ、と。その中でも、特に今夜は長かった。一日という時間の枠すら越えて夜があり続けるのだ。もはや正確に時を刻むものすら無くなるほどに。

その長い夜の中で、アヴァは確かに成長したのだろう。親しいもの皆を失って、立ち上からざるを得なかったとも言えるだろう。されど、彼女は前を向くことを決心したのだ。そんな蕩けようもない堅き瞳を見て、赤衣の男は何かを言おうとして、言葉をつまらせた。

「お嬢ちゃん、もう香は十分よ。ほら、女の子がはしたなく煤なんて服につけるもんじゃ

ないわ」

「アリアンナさん」

「こつちにいらつしやいな。とつてあげるわ」

そしてひと仕事を終えたアヴァに、娼婦のアリアンナが優しい微笑みを携え彼女をいたわった。アリアンナも、ここに来てあまり調子が良くはない。自分の身は自分で守るつもりではあつたが、こうも働きの少女がいるともなれば、任せてしまおうと思うのも無理はないことだつた。されど、労りたいと思うのも人間ならば当然の帰結。

そうして見せる微笑みの裏、自分の不調は決して悟らせないのはこの汚れた街の娼婦であるが故か。何も知らぬ無垢なるアヴァに対して、アリアンナはどこか遠い目をして服についた煤を払つた。

「ほら、これで大丈夫」

「ありがとう、アリアンナさん」

「いいの。……それにしても、本当、長いわね」

いつもならば、大きな獣を狩れば終わつた。どこからともなく鳴らされる、教会の鐘が今宵の獣狩に幕が閉じたことを知らせ、住人たちは何かを喪いながらもまた次の獣狩の夜へと備えていた。

だが今夜は、あまりにも長く、そして終わらない。狩人の活躍は知らずとも、断末魔

を上げる獣の咆哮は街のいたるところでもう2つは聴いた。それでも終わらぬとは、一体何が。

アリアンナはそこまで思考を巡らせて、きよとんとした顔でこちらを見上げる少女を見据えた。そして苦笑する。物思いにふけるにしても、対話相手がいるのでは失礼であろうなど。

終わらぬ夜に、相手の男と語り明かすのは以前には何度かあったものだ。だが今は、目の前に性と快楽のみのまぐわいすらも知らぬ少女が語らいの相手。なんの因果かと、ごまかすように彼女の頬へと手を伸ばした。

「あなた、綺麗になるわ。お肌のお手入れはその年からでも覚えなさいな」

「え、あ、ありがとう……？」

「ふふつ、ごめんなさいね。こんな突然に触れられて、嫌だったでしょう？」

「ううん。アリアンナさんの手、柔らかくて優しいから……お母さんとおじいちゃんの方に好きだよ」

「あらそう、光栄だわ。お父さんはいいの？」

「お父さん、ごつごつして乱暴だからあんまり好きじゃなかった、かな」

「そう……」

ガスコインの娘ということもあって、アリアンナは彼女への扱いをなんとも決めあぐ

ねている。そしてアヴァ自身はそんな他人の評価など知ったことかと、己のままに振る舞うことを覚えた。なんとも、奇妙な光景であろう。

そうして女二人の語らいがポツポツと余興に乗り出した頃だった。

オドン教会の正面入口から、カツカツと杖を突きながら初老の男が訪れる。

彼は教会の中にいる住人をぐるりと見渡すと、気難しい表情で眉間にシワを寄せ、口汚く言い放った。

「あの余所者め、やはり嘘つきだな。診療所ではなくここに皆いるじゃあないか……」

ほれみたことか、俺は騙されなかつたぞ。己に言い聞かせるように言葉を吐きつけた男は、じつと彼の様子を見つめていたいくつかの視線に気がついた。赤いポロ衣の男には汚らしいモノを見るような視線を向け、アリアンナと少女には忌々しいといった表情をし、頭を抱えて椅子に座る老婆には多分の同情と優越感をないませにした視線を送る。

そして観察も十分に行つたと思つたのか、男は彫像が祀られてあつた台座に腰掛け、くぼみに身体がはまるようにして背中を預けた。傍若無人な振る舞いを、行動と言葉で体現したかのような彼は、今度はブツブツとつぶやきながら目を伏せる。

「…なんか、感じ悪いな」

ぶすつとした表情のアヴァがつぶやけば、聞こえていたのか男はキツと視線を向けて

威嚇するようにアヴァをみた。だが彼女は男の視線には期待するような態度を出さず、じとりと見つめ返す。間が悪いと感じたか、男は何も言わずに頭を掻きむしり、再び背を壁に預けて目を閉じた。

「やつとの思いで辿り着いたのよ、きつと疲れてるんでしょうね」

娼婦業をやっている家の近くに住んでいることもあつて、その偏屈さと理由を知っているアリアンナは、憐れむような口調でアヴァを諭した。初老の男とて、以前の夜までは口調は荒いながらも人思いのよき隣人であつたのだ。

ただ、獣狩の夜を境に彼も又、余人には預かりしれぬ何かを失つた。ソレだけの話だ。事情はアヴァとなんら変わりはない。歪むか、立ち上がるか、それとも伏せるか。その選択肢から歪みを取つたに過ぎぬ。

ほう、と香の煙が風を受けた。

「ああ……」

赤衣の男が焦るように声を上げた。

「赤ずきんさん、どうしたの？」

「その、なんだ……その、さ。まだ結構保つんだ、でもこのままだと香が」

自らの背後にある、香の残りを確認しながら赤衣の男は焦りを見せる。そして彼の手伝いをしていたからこそ、アヴァは赤衣の男の言わんとすることがわかつた。

あと数時間もすれば香が無くなる。

通常の夜ならば、まだいいだろう。明日の朝に医療教会の者から調達すればよいのだから。だが今宵は獣狩の夜。あまりに長すぎるこの夜が、あと数時間で終わるなどとはこの場の誰も思っていない。

数時間。それはきつと、5時間にも満たぬ短い時間だ。ならばそれまでにすることは、わかりきっていた。

アヴァは意を決したように立ち上がると、赤ずきんの横を通り過ぎようとする。

「待ちなさい」

「まっっておくれ」

当然だが、良識を持ち合わせた二人に呼び止められる。

赤衣の男は声が重なったことに罪悪感を感じているのか、所在なさげに手を動かしたあと、おそらく同じことを言おうとしているアリアンナに言葉を譲った。

「外に行つて香を持つてくるつもりでしょ？」

「…うん」

「だめよ。危険すぎるわ。香なら、また狩人さんが来たときにも頼めばいいのよ」

狩人ならば、この夜を出たとしても問題はない。

死んだとて、悪い夢のようなもので終わり、また悪夢のようなこの街を巡るのだ。詳



しい事情は知らずとも、今宵のために選ばれた月の香の狩人ならば、頼んだところで断ることも無いだろう。

だがアリアンナの思いは届かない。

なぜなら、アヴァとして此度の行動は単なる親切心ではないのだ。

無力な己を感じる事が嫌だから。

たったそれだけの、現実逃避。

「ダメ。私は、私はなにかしないと……他の家になら、うん、きつと、香も残ってるはず」  
思い起こすのは自宅の近くの住人だ。夜通し狂いきつた老婆や、自分が家にもつて  
いる間に食い殺されたのであろう隣人の音。僅かな狂気に負けじと奮い立たせた自我、  
確かに彼女の中で暴走していた。

「待ちなさい！ 獣相手じゃあなたは何も出来ないわ！」

「あいつらを倒す武器なら、あるよ」

「そういう問題じゃ」

これ以上、アリアンナの声を聞くことで決意が鈍ると感じたのか、アヴァは胸元に抱いたブローチを強く握ってオドン教会の地下墓地方面へと続く書斎の小部屋へと駆け出した。乱暴に蹴り飛ばされた、いくつかの本が散らかる音が扉の向こうから聞こえてくる。

やがて木のハシゴがしばらく軋み、静寂がオドン教会へと訪れた。

アリアンナは目元を抑えながら脱力して椅子に深く腰を落とし、赤衣の男は何事かをつぶやきながら両手で顔を覆って体を丸くする。

ヤーナムの狂気とは猟奇に限ったことではない。時に蛮勇もまた、含まれるのだ。

地下墓地には、見覚えのある黒帽子と白装束が落ちていた。

見慣れた父親の狩装束であるそれを拾い、獣の血と匂いにまみれたそれをアヴァは身にとまった。獣である以上嗅覚は発達している。だがこの狩装束はそうした獣の血を浴びてなお、獣には気づかれにくく、また攻撃を受け流すに適した製法にて編まれている。

父親の狩りの話を子守唄代わりに聞いていたアヴァは、優れた狩人である父親に憧れると同時に、いつしか父の仕事を手伝いたいと、その手の知識を付けていた。そして血の繋がりと残されたぬくもりに縋りたいという残された少女としての感情から、遺品となったそれらに手を伸ばしたのだ。

ついで、手を伸ばしたのは祖父のように慕っていた父親の狩り仲間、ヘンリックが手にしていた獣狩の短銃である。なんとという運命か、折り重なるようにして死に場所を同

じくしたヘンリックが恭也に討たれたことを知っていたアヴァは、同時に彼の手にして  
いた武器が散らばっている事も想定していた。そして、思惑通りに銃を手に入れた。

ノコギリ鉋にも視線を向けるが、それを取り扱うだけの筋力が足りていない。故に反  
動は抑えきれずとも、一時とて、獣を退けるに足る短銃こそが今のアヴァには相応しい。

憎しみではなく、理性で己の武器を手にとった彼女は、脈打つ心臓が早まる緊張を感  
じながらも、必死に住宅街へと向かった。幸い街のエレベーターは起動しており、彼女  
を自宅がある住宅地帯へと導くには十分な役割を果たす。

だが、順調なのはそこまでだ。

「……………いる、よね」

疾患者が成り果てる黒毛の獣は居ない。だが、その理性を瞳に蕩けさせた民衆が新た  
に湧き出ていた。同じく理性を獣に落とした同輩は決して襲わず、仲間意識を持つて健  
常なる人を襲う気狂いの初期症状。そして同時に手遅れの民。

中には、アヴァが見知った顔がある。当然だろう、なぜならここは、彼女が暮らして  
いた街なのだ。だが到るところに人ではありえぬ体毛を伸ばし、時にはその片腕が疾患  
者の末期症状じみても2倍ほどに長く伸び、狂氣的に呪詛をつぶやき続ける姿に、アヴァ  
の記憶の中で生きている人の様相は何一つとして感じられぬ。

獣だ。あれはもはや理知の光すらなくした獣。

ヤーナムにおいては珍しいことではない。だが納得できるはずもないのだ。

それを語るのがアヴァの悔しさと恐怖にまみれた表情である。ほんの前日までほらかな笑顔で接してくれた隣人は、今や松明を翳し、サーベルを片手に呪詛と唸り声ばかりを漏らすモノに成り果てた。少女が、到底耐えきれぬものではないのだ。

だが目的地は、その知人の家と今決まった。

その知人はいつも、家の鍵を外の鉢植えの下に隠している。そして臆病なほどに慎重だからこそ、香はいつも地下室に溜め込んでいる。此度の目的地としては最適だ。

アヴァの短銃を握る手の力が強まった。手汗でじつとりと濡れたグリツプの固く冷たい感触が彼女の意識を引き戻した。

「大丈夫」

そんなわけがないのに、人は自らの精神を落ち着かせるために自らを騙す。純真無垢な少女であれ、それは変わらないらしい。アヴァはひっそりと息を殺し、よたよたと拙い足取りで中央広場に向かっていった知人を見送ると、すばやくその前庭にある鉢植えへと向かった。

そして彼女が考えていたとおり、獣になったからこそ、捨て置かれたのだろう。鍵は簡単に手に入り、くるりと鍵は360度右に回り、カチャリと施錠を伝えてきた。

「……」

香の匂いは無い。煌々とゆらめくランプの炎が怪しく玄関を照らしている。お邪魔します、といつもどおりに言おうとして、アヴァは咄嗟に己の手で口をふさいだ。

左右を見渡す。誰も居ない。確か家族はみないなくなっていたはず。

途端、彼女は緊張のあまり心臓の鼓動が早くなる。ここから先、あの獣の知人が戻ってくることも考えられるのだ。そうなれば、この狭い家の中で上手く逃げるのは難しいだろう。最悪の想像ばかりが頭の中を巡る中、アヴァはいつしか、家の地下倉庫となる開いた床の前まで辿り着いていた。

何度も見渡すが、やはり何の気配も感じられない。

ほっと息をつく。

「……あった」

開いた倉庫には獣避けの香の元となる、白い香木がいくつも積み重なっている。獣避けの香の中でも、相当に長持ちするものだ。これを20ほど失敬するだけで、オドン教会の香は十全とも言えるだろう。

アヴァは、顔が綻んでいくのを実感していた。これで、私にも何かをなせたという証明ができる。私はなすことのできる人間なのだ。お父さんとお母さんが居なくても、ちゃんと、立てるような。

「会いたいよお、お父さん。お母さん」

蓋をしていた感情が、また溢れだした。それでも、だけでも、泣いてばかりではいけない。こんな場所で立ち止まっては、それは自分の命が失われることと同義であるのだから。

ここで止まれば、自分の命が助かった意味がない。涙を服で拭って、香木を大きな布にくるんで体に巻いた。乾燥した白い香木のようなその重さはあまり無いが、まきついて膨らんだ背中から伝わる、ゴロゴロとしたでっばった不安定さが、どことなく不安を煽る。

行きはよいよい帰りは怖い。とは彼女が知る由も無いが、有名な言葉。されど先程の高揚が不安な心をごまかすように覆い隠しているため、彼女はついぞ気がつくことが出来なかつた。

己の命を容易く奪うことができる存在が、すぐそこにまで迫っていることに。アヴァが知人だったものの家を出た瞬間、ふっと辺りが暗くなる。

月の光を雲が覆い隠したのだろうか？ などと、彼女の甘い考えはすぐさま痛みとなつて襲いかかつてきた。

肩口から、熱い痛みが襲いかかってくる。刺さっていたのはサーベル。振り下ろしたのは、知人だったもの。病の疾患者。

「あ、あ」

サーベルが引き抜かれたその瞬間、全てを理解したアヴァは先程までの蛮勇もなにもかもを投げ出し、

「いやあああああああああああああああつ!!」

ただ叫び逃げ出すことしか出来なかつた。

「痛い、いたい、あああ、あう、ああ、いやあー!」

痛みがで涙が止まらない。手にしていたヘンリツクおじいちゃんの銃を構えることも忘れて、その身一つでただただ獣に満ちた街を駆け出した。じくじくと痛む肩口から、どくどくと滲む血が、彼女の肩口から、もう腰のあたりまで白い服を酷く真っ赤に染め上げている。父親の狩装束のおかげで切断にまでは至らないが、サーベルの刃が深く切り込まれた左腕は、もうろくに力を入れることも出来ないほどの痛みに溢れている。

ダラダラと流れ、手の先から飛沫として撒き散らされる濃厚な生き血の匂いは、やがて追いかける知人の獣だけでなく、周囲の鼻を「いい匂い」としてくすぐっている。一人、二人、三人。彼女の追跡者は次第にただただ増えていく。

もう痛みも何もかも投げ出して、背後から聞こえる獣の民衆の怨嗟の声が、捕まれば逃げる希望すらなく殺される事実を伝えてくる。アヴァの頭の中は、ただただ逃げなければならぬという使命感と、怖い痛いという単純な一言ばかりが埋め尽くしていく。

「けて」

自分がいかに愚かであったのか。無意識が語りかけてくる。

自分がいかに無力であるのか、疲労する足がもつれて嘔いてくる。

「たすけて」

アヴァの命運はここに尽きた。

もとより、理性と身体能力を失った、只人の少女が獣に対抗する術など、獣という恐ろしい自然の摂理より逃れる術など無かったのだ。彼女ができるのは、己が被食者となるまでのほんの僅かな間、がむしやらに逃げ回って獣の嗜虐心を満たすことだけ。そして、物理的にその空腹を満たすことだけ。

失せろ、失せろ、呪われた獣め、全部お前のせいだ、呪いだ、呪いだ。

民衆の口から漏れるのは、アヴァこそが叫びたい言葉ばかり。そして、彼女の心を縛り付ける呪いの言葉。がんじがらめに心を縛り付けられた彼女は、破裂しそうなほどに早鐘を打つ心臓が限界を伝えてくる。

やがて無茶な運動と、流れ出る血が命の限界を伝える。

アヴァはその場に無様に転がり、背中に下げていた包みから、香木が彼女の前に転がり落ちた。彼女の無意味をあざ笑うかのように。

「助けてえ！」

身をすくませ、必死に叫んだ言葉の上。



サーベルが月の光を受け、何もなせぬ少女へと振り下ろされた。

## 聖火

待ち人は来ず。夢見るままに尽きたり。

「アアアアアアアツ!!」

少女に振り下ろされたサーベルが、背中の肉へとめりこんでいく。

血しぶきが辺りを赤く染め上げ、痛みのみならず顔の穴という穴から体液を撒き散らしながら痛みに呻くアヴァ。白目を剥き、正気を逸脱した彼女の思考が染め上げられていく。

にくい。

憎い。

憎い。憎い。憎い。

私を傷つけるものが

私から奪うものが

憎い。

半狂乱になつた彼女はかすみゆく視界の中で、確かに、そう、確かに。恐怖よりも憎しみと怒りが打ち勝つた。それだけだったのだ。

二撃のトドメを指すべく振り上げられた、獣へ堕ちた男。その額が、赤い飛沫を撒き散らしながら弾け飛ぶ。なにもかも、思考も意識も諸共に。生暖かく湿つた脳液と、吐き気をもよおす生臭い血液をぶち撒けながら、アヴァの元へと降り注ぐ。

ぐらり、男の体は斜めに傾いて、そのまま支えられなくなつた方へと倒れ込む。

煙を上げるのは、一丁の短銃。獣狩の短銃。

撃つたのは、アヴァ。彼女自身。

白目を剥きながら、

息を荒げながら、

その衣装全てを赤黒く血で染め上げながらも、彼女は反撃を選んだ。

祖父の遺した武器に染み付く、狩人の血の意志がそうさせたか、類まれなほどに無慈悲で正確に男の額を撃ち抜いた短銃には、すぐさま次の水銀弾が込められる。撃鉄を上げ、銃口が向けられたのは次の獲物。

また、一発。水銀弾が獣の命を散らせた。

無表情でひたすらに、殺すという意志のみを込めて、彼女は最初から知っていたかのように短銃に弾丸を込めていく。怨嗟の声を上げながら襲いかかつていた民衆も、僅か

5発の発砲音が響く頃には、全てが地に伏せ濃厚な血を撒き散らす屍と成り果てた。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ、ハ」

腕まで垂れた熱い血が、地面へポタリと垂れる。

同時、アヴァは目をぐるりと回して崩れ落ちた。もはや彼女の命を脅かす敵は残っていない。勝ち取ったのだ。たったそれだけの、僅かな余韻を残して、意識がアヴァのそれから遠ざかる。

倒れた瞬間、オルゴールがこぼれ出た。開いた拍子に鳴り出すそれは、獣避けの香木の近くでメロディを奏でていく。

共鳴したのは、小さな鐘の音。

鐘の音が辺りを包んでいく。ぼう、と青白い光を放ちながら、世界が歪んでいく。やがて歪を掻き分けるようにして現れたのは、同じ青白い光を纏った神父服の男であった。

倒れ伏すその少女とは、似ても似つかぬ偉丈夫。目元を包帯で覆い隠した彼は、しかしはつきりと見える健常者のように倒れ伏した少女へと近づいた。

見下ろす先には、ものの数秒で息絶えるであろうただの少女。

「……………ふっ」

何をして嘲ったか、鼻で笑った彼は、手にした何かをぐっと握り込み、叩きつけるよ

うにして少女の背中へと打ち込んだ。

神父服の男の姿は、幻のように消えていた。

その頃、アヴァの捜索のために街へと繰り出していた恭也は、ようやく彼女の家がある住宅街の広場に繋がる道へと辿り着いていた。おそらく全力で走っているというのに、少しのインターバルをおいて再び走ることができるといのは、恭也に流れる美耶子の血の影響だろうか。

どちらにせよ、もはや全ては終わっている。だがソレすらも知らぬ無知な彼らは、必死にアヴァの救出を掲げて辺りを探し回っていた。

そんな折、ハッと息を吞んで美耶子がつぶやいた。

「恭也、なにかが聞こえる」

「え、何かって……？」

「なんだろう、これ、音楽？　このまままっすぐだ」

美耶子の異常を感知する能力に関しては、恭也も信頼を寄せている。それこそ、彼女

の声を聞けるようになる前から、視界ジャックを通して感知した数々のヒントは、今日この時に至るまで恭也の助けになってきたからだ。

その美耶子が言う音楽とやらは、残念ながら恭也には聞こえなかったが、どちらにせよ今は少しでもヒントが欲しい。藁をもすがる思いで、恭也はその音のする方向に駆け出した。

ほんの数秒、移動するとうまく恭也にもその微かな音色が聞こえてきた。

子守唄か、はたまた悲しみのメロディか。どこか寂しいオルゴールの音色が、恭也のよく見知った少女の近くでゆったりと回っている。

「なんだよこれ…アヴァちゃん！」

恭也がアヴァの血塗れとなり果てたその姿を認識した途端、オルゴールの巻かれていたゼンマイは切れたのか、物言わぬ箱に戻る。

だが今はそんなことよりも彼女の安否だ。美耶子に周囲の視界ジャックと索敵を任せた恭也は、倒れ伏したアヴァを抱き上げると、一言ごめんと呟いて片手を彼女の胸元に当てる。

微かな鼓動が、恭也の手に伝わった。

「……まだ大丈夫だ。急いでオドン教会に連れていこう」

「恭也、今の所敵は居ない。今のうち」

「わかった」

予断を許さぬ状況だ。一瞬、自分の手を切つて傷口から血を取り込ませようと考えたが、恭也はその考えをすぐさま振り払つた。あれは美耶子だからこそ与えられた血の契。分けられた側の自分が、能動的にできるようなものでもないだろうと。

実際の所、その血の分見は始まりの羽生蛇村にて約数名にされていたのだが、恭也がそれを知る由もない。彼女を抱え上げた恭也は、そこでさらなる異常に気がついた。

「あれ……血が、止まつてる?」

彼女の背中と肩口は酷く切りつけられ、その部分の服は裂けて血塗れになっている。ともなれば、確実にその怪我口は未だに流血を起こしていたとしても不思議ではない。なのに、治っている?」

その疑問が余裕となつたか、アヴァが集めたと思しき戦利品香木をも回収し終えた恭也は、そのままオドン教会へと反転して走り出した。一人を抱えている分、所在なさげに揺れる抜き身の焰薙とルドウィークの長銃がなんとも不安だが、この際自分が傷つくことに何ら問題はない。服の裾と薄皮を何度も切られながら、彼は必死に走り続けた。

「おかえりなさい、さ、彼女はここに」

そしてハシゴを前にした恭也の上から、女性の声が掛けられる。

アリアンナだ。何かと言つていた彼女であつたが、やはりあの避難民の中では一番人

間的であつたらしい。廃材の荒縄を結び、最悪の可能性を考慮して動いていたらしい。彼女の声とともに垂らされたのは、人を乗せられるように編まれた荒縄だつた。

「わかつた、そつちに登つたら引き上げる」

「ええ、早くお願いね。私も彼も、力はあんまり無いから」

ハシゴの先にある階段の手すりを支点としながらも、アヴァが水たまりに着水しないようロープを握るアリアンナは声を少し荒げながらそういつた。そうして上に上がった恭也は、アリアンナが言う彼の正体に驚きながらも、その若く引き締まった体力を存分に發揮してアヴァをオドン教会に運び込むことに成功した。

「ひどい怪我ね……こうなるのなんて、分かつていたでしょうに」

墓地の教会といえど、必要なものもある程度揃っているのだろう。包帯や布。そういったものを取り出して、アリアンナは顔を歪める。

そして拙い手付きながらも手当をしようとしたところで、彼女の手はパンツと払いのけられた。

「貴女のような人には任せられません。私が、やりますので」

そう言つてアリアンナを押しつけたのは、恭也と狩人が救い出した新たな住人、アデーラであつた。医療教会という場所に所属していただけあつて、医療道具の扱い方は心得ているらしい。鮮やかな手付きでアヴァの体から汚れが拭き取られ、適切な形で包



帯が巻かれていく。やはり、怪我口は血が出ていないというのも一時的なものだったよ  
うで、その処置の途中からじわりと残り僅かな血が滲み出していた。

そんなアヴァという少女の痛ましい姿に顔色ひとつ変えず、アデーラの処置はテキパ  
キと進んでいく。くるりと巻かれた包帯と、彼女をくるむ暖かな布地。未だ息は荒い  
が、そんなアヴァの手には未だにヘンリックの短銃と、父親の狩装束の布地が強く握ら  
れている。

「輸血液が投与されていますね。切り口がつかなくなるのも時間の問題でしょう」

狩人でなければ本当は、と続けようとしたアデーラではあるが、この際だ。言う必要  
もないことを口にするべきではない。今の彼女は、確執も何もかもを拭い捨てて恭也の  
献身に報いるべきだと認識している。

「キョーヤ様、火を」

「え？」

「暖めなければなりません。オドン教会この場所は冷え込みます」

「わ、わかった」

恭也は腰に挿していた焰薙を抜くと、その刀身に蒼い炎を迸らせる。ぼうつと燃え上  
がる神秘的な炎は、敵を滅す力でありながら、その本質は守るためのもの。それは人の  
ためではないかもしれないが、焰薙に宿る木ケルヒムの伝は恭也のために力を振るっている。

刀身から暖かな熱が放たれ始め、それを恭也はアヴァにほど近い地面へと突き刺すと、石造りであるにも関わらず苦もなく突き刺さった。そして地面に触れているはずの炎は伝播することもなく、ただ優しく熱を発している。

「不思議な、炎ですね」

アデーラは、その炎に魅入られるように視線を向けた。己の中で狂おしく猛っていた、浮かされた熱が引いていく感覚すら覚える。それは、一時とはいえ彼女の狂気を確かに落ち着けたのだろうか。

「ああ……すみません、もう大丈夫ですよ」

「よかった……」

ここの成り行きを見守っていた恭也は、その一言をきいた途端、力を脱いて地面に倒れ込んだ。もう何度目のことだろうか、ただ、今回の安堵に包まれたソレは、確かな達成感をも含んでいたのは間違いない。

「おっさんも、ありがとうな」

そう言って恭也が笑いかけたのは、酷く息を切らしながら地下墓地に通じる小部屋から壁を伝って歩いてきた初老の男性。そう、あの偏屈な男であった。

「……………ふん」

素直ではないのか、それとも単純に鬱陶しがっているのか。一貫して態度を崩さない

彼の様子に、恭也は苦笑をこぼした。

散々罵声を浴びせてきた相手ではあるが、こうして一人の少女のため、恐らくは毛嫌いしているアリアンナと一緒に恭也がハシゴを登るまでの間、ロープを掴んでくれた。おそらく、初老のこの男にとっては相当な疲労があつたに違いない。

未だに息を少し切らしている偏屈な彼は、よろりと杖を突きながら、石像の台座へと戻り帽子を深く被つて喋りかけるな、と言わんばかりのオーラを放ち始めた。

男の様子を見ていたアリアンナも己の椅子に座り直すと、慣れない労働で着崩れたドレスを直しながら恭也へと話しかける。

「不思議なものね、坊や。貴方は余所者なのに、こうまで誰かを助けようとする。狩人たちは住人を一時的に助けることはあつても、一度送り届けてからは見向きもしない。それが普通」

でも、と言葉を続けようとして、アリアンナは言いよどむ。

代わりに用意したのは、恭也への忠告であつた。

「余所者だからといって邪険にする私達を助ける貴方は、相当なお人好しに違いないわね。その頑張りは、いつか身を滅ぼすわよ」

恭也を突き刺すその言葉は、忠告であると同時にアリアンナからの感謝であつたのだろうか。だが恭也は文字通り、その身をボロボロにしながらも何度も何度も、1つの約

束のために立ち上がった人間だ。

異形を殺し、異界を殺し、無数のそれらを全て消し去るまで決して滅べない存在。だが、不変にして狂えない精神だからこそ、彼の本質は何一つとして変わらない。常に人らしく、異形には容赦はない。たったそれだけ。いつもは、本当に日常の象徴、ただの日本の男子高校生として培ってきた在り方のままでいる。

「大丈夫、俺、死なないから。あの獣みたいな奴らを全部消すまで、何があっても」  
「……それは樂觀？ それとも」

「逢いたい人がいるんだ。それに、ここにきてその希望が見えた。だから俺は、何があってもその人が知ってる俺のままでいる」

美耶子を助けようと必死だったあの頃みたいに。

もう一度、その顔を合わせるその時まで、胸を張って生きられるように。

「恭也」

恭也の決意は、美耶子も何度も目にしてきた。

だがこうも、期待されるといふのは美耶子の方もこそばゆい。そして、どうしても思ひ出すのだ。自分はそんなにも、望まれるような純粹無垢な人間ではない。むしろ、あの神の汚れた血を引いた存在なのだと。

ないまぜになった感情が彼の名前を呼ぶように眩かれる。

恭也は、アリアンナに向けたものか、それとも美耶子に向けたものか。

ただ、笑顔を浮かべた。

「救われたいわね、坊や」

「誰かを助けた分、誰かからも助けてもらえるかもしれないじゃん。だったら、俺は助け続けるよ。……今回は、間に合わなかったけどさ」

「命があるだけ儲けものよ。本当なら、この香の外に出た瞬間殺されていてもおかしくはなかったわ。あなたはよくやったのよ」

そう言ったアリアンナは、血塗れとなつて帰つてきたアヴァを見て、彼女を襲つた獣を殺したのは恭也のことだと思ひこんでいた。事実、この状況下でそれを成せるのは恭也しか居ないのだから当たり前ではあるのだが。

恭也のほうも、そう言われてみれば不思議な事があつたものだと思ひかけた。なにせ、アヴァの近くに倒れていた死体は恭也が倒したものではない。アヴァが未だに握りしめる銃。それが答えだ。

「……」

確かに彼女は選択したのだろう。だがそれは血塗られた道であつたのだろう。だからこそ、何の力もない少女をこのような目に遭わせた獣狩の夜とやらを必ず終わらせねばなるまい。

恭也は立ち上がると、オドン教会の人々を見渡して決意する。ここの人たちも、決して疎かにしてはいけない、と。

「みんな、絶対に守らないとな」

ただの少年である彼の眩きは、アリアンナ、アデーラ、赤衣の男。聞こえた三人の表情をわずかに変えさせる。狩人のような特別な存在ではないというのに、どうしてこんな覚悟をさせるのか。

穏やかな蒼い炎をまとう焰薙。それを引き抜いた恭也は、倒れていた篝火を持ってくと、それに焰薙の炎を燃え移らせた。いつまでも焰薙をアヴァの近くに置いていくわけにも行かないが、こうして火種として用いることはできる。

篝火となつて蒼く揺らめく炎は、邪悪を滅し、守る光。

「うわっ!？」

「なに…!？」

途端、オドン教会が大きく揺れた。

パラパラと土埃が降つて来て、生存者たちを汚れさせる。だが頑丈な石造りの建物はその程度では崩れもせず、大きな揺れが収まる頃には元の静かな空間が戻ってくる。

「上に化物でも居たのか？」

退魔の炎は、一度対象を包み込めば不死の神とて滅してしまふ。おそらく獣にとつて

本能的に近寄りたいたいものであるだろう。だから、恭也はオドン教会に大きな獣でも張り付いていたのではないかと首を傾げた。

同時、教会の出入り口に薄っすらと景色が歪む何かを通る。美耶子は視界の端でそれを捉えたが、遠いこともあって気のせいだろうかと首をかしげるにとどまった。なにせ、美耶子をもつてしても感知できなかったのだから。

「その炎……ああ、なんだか、心が安らぐなあ」

蒼い炎を前にして、温かさを感じた赤衣の男がほつとしたように声を漏らす。

それに反応してアリアンナたちが視線を向けると、余計なことを言ってしまったかと言口を覆い、申し訳なさそうに男は身を丸め込ませた。

「あのさ、あの人もさ、悪い人じゃないと思うから、面倒みてやって欲しいんだけど……」  
そんな男を擁護するように恭也が提案するが、皆はすつと目をそらした。所以は分からないが、どうやら、この聖堂街の住人にとって赤衣の男は少しばかり遠ざけたいと思う理由があるらしい。

「はは……それじゃ、俺も行くよ」

それぞれの思惑が交錯するこのオドン教会ではあるが、恭也も長くここに滞在し続けるわけにも行かない。アデーラとアリアンナ、それから赤衣の醜男。この3名はどうやら積極的に協力してくれるようであるし、恭也にとっては初老の男も悪い人ではないと

いう認識であつた。

彼が気がかりとしてゐるのは、先程出発した時とは違い、頭を抱えて唸つてゐる老婆。恭也のことを倅だと勘違いしてゐる事も含め、いつしか気づいてくれることを祈るしか無い。

そしてアヴァ。目覚めた彼女が何をするのか、それはきつと、アデーラたちに任せるしか無いのだろう。

これ以上、かける言葉もない。有事でなければ、やはりヤーナムの人間は恭也にとつて少し空気が違う者たちだ。気まずさは、この短時間で拭いきれるものでもなかつたということだ。

大聖堂の方へと走り始めた彼は、最後にオドン教会の中をちらりと見ると、それを最後に意識を戦闘のソレに切り替え階段を登つていく。

オドン教会には、一時の静けさが残つた。

「この子は、どうしてこのような事態に？」

その静寂を破つたのは、アデーラであつた。

このアリアンナという娼婦に対して、苛烈な感情をいだきかけていたが、この蒼い炎の前では不思議と心が安らいでゐる。パチパチと弾け始めた火種の音から間をおいて、アリアンナがポツポツとその経緯をアデーラに語つた。



ガスコイン神父の娘であること、そして縁者が今夜ですべて死に絶え、おそらくはそこから立ち上がるうとして突飛な発想に至り、このような結末を迎えてしまったことを。

「馬鹿な子。でも、こう思うからこそ、ヤーナムはもう終わりなんでしょうね」

アリアンナはそう締めくくった。

「……そう、ですか」

複雑な気持ちであった。そして、アデーラはここに至るまでの道を振り返る。狂氣的にまで浮かされていた己の感情。狩人への異様な執着、そしてこの炎を前にして、我に返ったとも言うべき現状。

そんな一時の熱が、この眼の前の少女にも齎されていたのだろうか。だとしたら、何のために。いったい誰がこうさせた。

「……誰が？」

どうして、こんな発想に思い至ったのか。

思い浮かんだ疑問は不自然に掻き消え、そして別の疑問に押しつぶされた。誰が、といえばだ。一体誰が、この少女に輸血液を打ち込んだのだろう。狩人でもなければ、縁からは程遠い輸血液は人体にとって毒だ。全く互換性の無い血液など、自分のように調整を受けた血の聖女の特別な輸血液でない限り、むしろこの少女の生命を奪っていた

だろう。

恭也、と名乗ったあの少年は異邦人で、この街の常識にも相当疎い。故に可能性としては外すべき。ともなれば、肉親が同じような血液であり、かつ狩人としての素養がこの少女にあつたとしたら。

アデーラは塗りつぶされた疑問の代わりにその回答を、やはり己の中で握りつぶした。

そんな奇跡があるのならば、どうして己がこのような苦行をしなければならなかったのか。このなにもない少女に祝福が齎されたというのなら、どうして自分は。

「どうしたの、ひどい顔よ」

「っ、なんでも、ありません」

アリアンナの指摘を苦い表情で返しながら、アデーラはこの考えを忘れるように、手を動かした。ハッと見たその時、アヴァの体に巻かれた包帯から血が滲み出ていた。その上から、更に包帯を巻いて止血するように。

オドン教会の時間は、緩やかに過ぎていった。

大きな転機と、一つの疑問を生み出しながら。

## 縁由

野太い雄叫びが街の中に木霊する。

軋みを上げて回転する車輪を、回して回して回して回して回して回して……勢いのままに獣へと振り下ろされる。高速回転する車輪は肉をこそげ落とし、獣の頑強な剛毛を物ともせず、命までもを削り取る。

血に濡れた鈍器とも言い難い仕掛け武器が、ぬちりと血肉を垂らしながら持ち上げられる。殺意と怨念のこびりついたかのような武器を振るうは、医療教会の外套を揺らす金の髪の狩り人。

「これで、片付いたようですね」

ゆつたりと周囲を見回した男は、落ち着いた声でそう言った。そんな冷めた反応の彼に反して、彼が居る広場には無数の獣や人型が派手に臓腑を撒き散らしながら屍を晒していた。人々を救うはずの医療教会所属であるはずが、正気を無くした大男。その他ただ人を襲い続けるだけの狂気に呑まれた教会の白装束。それらをも巻き込まんと訪れた獣ども。

大聖堂が見下ろす階段の先、かつては憩いの広場であったのであろうそこは、もはや

人の営みを感じられぬ衰退と破滅の様相を呈している。

そんな場所にいたのは、なにもこの車輪を担ぐ金髪の男だけではなかった。

「助かったよ、アルフレートさん」

「お前、もうちよつと綺麗に戦えないのか……？ 気分が悪くなりそうだ」

そう、須田恭也と神代美耶子もまた狩人を追いかけてようとしてこの広場へと訪れていた。しかし、彼らはすでに顔見知りの様子である。

「いえ、貴方も目的は違えど私と同じ狩り人。行動理念も、尊敬に値するものです。私で良ければいくらでも手を貸しましょう。キョーヤ殿」

と、返したのはアルフレート、恭也にそう呼ばれた男だ。彼は狩人ではあるが、どうやら美耶子の声は聞こえていないらしい。む、と反応を見た美耶子は口をつぐむ。

そのアルフレートであるが、今の見た目はかなり強烈だ。無数の肉片や臓物を狩装束へこびりつかせながら、屈託のない笑みを浮かべるという中々に狂氣的な光景を作り出している。彼にとっては扱う武器が武器であるのだから茶飯事なのだが、慣れぬ恭也たちにしてみれば苦笑いを浮かべるのが精一杯であった。

鈍感なのか、アルフレートは恭也の表情に気がついていないようだが。

この二人が出会ったのは、恭也がオドン教会を出てすぐのことだ。開口一番、アルフレートは問うた。なんでも、「穢れた血族」というものを狩るためにこの夜を一人練り歩

いているのだと。問うばかりでなく、他にも、彼は情報交換と称して何も知らぬであろう恭也に様々な情報を提供すると言った。この街に辿り着いてから、ようやく友好的な人物の登場というわけだ。

いざ話そうと歩きながら辿り着いた先にあつたのが、件の広場。彼も正気を無くした元同僚には思うところがあるらしく、せめて形が人のままである内に狩ってやりたいと言いでで始末をつけたわけである。

そんな彼がもたらした情報は、医療教会が何をしているのか、血族とやらが医療教会にとつて如何なる悪逆であるか。少しばかり主観が強いが、おそらく恭也が今まで得た中で最も正確な内容であつた。これらを聞いた恭也は、あなぬけだつた知識を補うようにして保管することができた。

なぜ狩人のような存在が誕生したのか。そして血の医療とは何であるのか。そもそも、この街はどのようなにして血の医療に着手したのか。それは、医療教会に長くいたアルフレートであるからこそ語れる数々。

そして起源は、ビルゲンワースからであると。狩人が目指した場所が、獣狩の夜を解明するために必要な場所である。そう、恭也の中で最も明確に認識された瞬間であつた。

「ええっと、アルフレートさんはさ、逆に欲しい情報つてあるのか？」

多くを話してくれる事に感謝しつつも、この余所者を嫌う街の気風を脳裏に掠めた恭也は対価として差し出せる情報の如何を問うた。するとアルフレートはその気遣いに気づいたのか、くすりと微笑み一つの要求を伝えた。

「……ええ、血族の長が今も居座る場所、カインハーストへと至る道を見つかるようなことがあれば、是非とも知らせて頂きたい。私が望むのはソレだけです」

血族。その事を話すアルフレートの雰囲気は、恭也も背筋を凍えさせるほど苛烈なものであった。逆に言えば、彼をそこまで苛つかせる何かを血族は成していたということである。現状その一つの意見しか聞いていないとはいえ、こうして共闘してもらった恩もある。

恭也は一にも二にもなく頷いた。もちろん、返答は友好を求めるソレである。

「わかった。どこで見つかるかはおわかんないけどさ、血族と、カインハーストだな。その単語を頼りに、俺も探してみるよ」

「おお、ありがとうございます！」

元が整った顔立ちということもあって、アルフレートが浮かべる心からの笑みというのはずいぶんと眩しいものだ。恭也は内心で、イケメンとはこういう人なんだろうなと、ツンと立った異国の顔立ちにマジマジと視線を寄せる。

「私は市内にある医療教会所属の建物から情報を集める予定です。ですので、禁域の森

に行かれるのでしたら、そちらに程近いテラスで情報を整理しています。何かあれば、そちらにお寄りください」

「うん。じゃあ俺はその先の、狩人さんが行った禁域の森だっけ。そこを抜けてみる」

「どうかお気をつけて。禁域の森は以前、大きな獣が暴れてからというもの、狂った住人共の手で大掛かりなトラップが仕掛けられていると、遠見の者からの報告を受けたことがあります。トラップがそのままであれば、人の身など」

「いとも容易く碎かれる。その言葉を腕で遮って笑顔を見せた恭也は、大きく腕を振りながらアルフレートと別れた。」

「……やれやれ、あの様な少年がどのような業を背負わされているのか。しかし、有意義な時間でした。だからこそ、願わくば彼のような人物には穢れた血族なんぞとは関わってほしくはないものです」

微笑むアルフレートもまた、恭也にマイナスの印象は抱いていないらしい。狩装束にこびりついた肉片を埃でも払うかのように振るって、車輪を担ぎ直す。そんな彼の行く末を、黄金の月光が照らしていた。

禁域の森へと続く市内からの道は、当然というべきか、酷く荒れ果てていた。残骸に

腰掛けたままの死体など、何があればあのような事態に陥ればあなるのか。未だ神秘というヤーナムに慣れきつていない恭也達を、容赦なく蝕むピースがまた一つ蝕んでいく。

鬱蒼と茂る草木は月明かりを覆い隠し、闇夜に紛れる敵意が草の根かき分けながら恭也の首を食い千切らんと迫り来るが、彼が手に握る焰薙がそれをゆるさない。暗闇の中に蒼い光が炸裂し、獣の断末魔が響き渡る。

見通しも悪く、常人では踏み入ることが出来ぬからこそ禁域の森。かつての聖地のはじまりを、残酷な時の流れで秘密と共に覆い隠した場所。いや、それが必然であったのだろうか。隠されるべくして隠された、神秘の巢食う学び舎。白痴を超え、神秘の秘密へ導く地。

その森へとついに足を踏み入れた彼は、焰薙に灯した炎を頼りに視界を広げていく。彼が一步を踏みしめるたび、ぐちりと腐った落ち葉が悲鳴をあげる。時折、何のためか焚き火や放火の後が見られるが、これはこれで、まだ正気を保った人間が獣に墮ちた者たちに抵抗した跡なのであろうか。

もはや、その場にいる恭也にも命の息吹は感じられないが。

「この森、ずつと変なカンジがする」

入り口であろう太鼓橋を渡った辺りで、美耶子が不安げにそう呟いた。



えつ、と恭也が反応しかけた瞬間、彼の足は硬質なものを踏み込んでしまい、姿勢はかなり前のめりになる。

「ま、前！」

「うおわっ!?!」

すんでのところで、棘をこれでもかとり付け付けた丸太のブランコを屈んで避けた恭也はブチブチと嫌な音を立て始めた振り子トラップの真横へと飛び込んだ。一瞬遅れて、恭也が屈んでいた場所に紐のちぎれたトラップが投げ出され、その勢いのまま転がったかと思えば進んできていた太鼓橋があつた谷底へと堕ちていく。

巻き込まれていれば、死にはせずとも重症と共に戻れぬ谷底へのダイブを強制させられていただろう。

「ごめん恭也、サイアクのところ呼び止めちゃった」

「大丈夫だって、ほら、ピンピンしてるし」

恭也は美耶子の視界をジャックしながら、彼女が見ている方へと手を広げた。美耶子に生かしてもらったこの身体があつてこそ。加えて、なだれ込んできた啓蒙とやらのおかげで、恭也の体捌きは以前の異界のソレとは比べ物にならないほどの成長を遂げている。

だが、美耶子が言いたいのはそのうちのことではない。こうして、自分と話すように

なつてからというもの、恭也は随分と矢面に立つて戦いたがる。その心境を察せないほど、美耶子も鈍感ではない。ではないのだが、そんな彼に何もしてやれない。無力感が、美耶子の心に僅かな陰りを生み出していた。

「気にするなつて」

恭也は笑つてそう言うが、この短時間でここまで大きな怪我を繰り返してきたのは初めてだ。銃で撃たれる、刃物で切られる、焼かれる。確かに大怪我だろう。だが、獣のような膂力で扱られたり、内側から弾けとんでも可笑しくはない威力で叩きつけられたり、恭也は人智を超えた痛みをすでに味わっているはず。

だが、今までの異界で確かに呻いていたはずの痛みを、彼はもうなんともないかのようには振る舞っている。

「……啓蒙つて、本当にいいものなのかな」

「え？」

「アデーラは真実を見るための力だつて言つてたけど、それはわたしの幻視とはまた違う。そんなのを得たから戦い方が分かるなんて、なんかおかしい」

「うーん……そうは言つても、おかげであんまり痛みとか気にならなくなつてきたしなあ」  
「気にならないつて、恭也」

聞き捨てならない事を耳に挟み、美耶子は頭の何処かで警鐘を鳴らしながら聞き返し

た。対して、恭也は何でも無いかのようにな彼女に答える。

「痛いのは痛いんだけどさ、そんなことよりなんとかしなきゃ、つて感じが強いんだよな。だから怪我とかも気にせず身体が動かせるんだ。ほら、あの大橋の上のバケモノの時なんか——」

「やっぱり、ヘン。ヘンだよ恭也」

致命的に、人としてズレてきている。美耶子はそう思った。

自分のせいで恭也は約束を果たし続けているが、その過程では、せめて、人らしくあつてほしかった。だが、恭也は確実に只人のそれとは離れた精神性を得始めている。あつとき、神を討った時とはまた違う。どこか、狂気にも似た妄執の片鱗。

普通の人間ならば感じられないであろうソレを、長く恭也を見てきた美耶子は感じていた。

「ねえ、この異界をどうにかしたいって思うのはいいけど、でも」  
「止まらないんだ」

だから美耶子は、懇願して彼の歩みを少しでも遅くしようと言葉を考えた。それも、彼自身によつて遮られたのだが、後に続いた言葉は彼女を黙らせてしまうもの。

「ここはさ、美耶子が体を持って、触れるようになる方法があるかもしれないんだ。そう思うと、町の人達のこともあるけど、何より美耶子のためにさ、止まらない」

足取りを重くさせる湿気った地面、ちらほらと見えてきた人の手が加えられた腐った木材の道。それらを踏みしめながら、恭也は自然体で歩き続けていた。焰薙は草を切り払い、刀から発せられる炎は彼の道を照らす。決して見失わないようにと、言い聞かせるかのよう。

「……ばか。止めたいと思ったたら絶対に止めるから」

「心配してくれてありがとうな、やっぱ、ちゃんとき、美耶子に触れたいよ」

「すけべ」

「え、そういう意味じゃないって！ 分かってて言っただろ今の」

思ってくれているのは本当に嬉しいが、やはり希薄な存在でしか無い自分には、恭也を引き止めることは出来ない。元々、ここに来るまで彼は美耶子に触れられなかったし、声も聞けなかった。

そんな長い旅路の中、その一端がこうして手に入った以上、彼が固執するのも必然だったのだろう。

美耶子は、涙を飲みながら、あくまで声だけは平静を保って彼とのやり取りを続けた。今だけは、姿が見えないことに感謝しながら、そんな自分を卑怯だとも思いながら。

「お、なんか見えてきた」

気持ちも落ち着かせ、気持ちを新たに進んだ先で彼が声を発した。

この森といえば、墓石のようなものが立ち並んだり、それらの近くで狂った獣狩の民衆がたむろっている道しかない。そんな場所を進んだ先で、ようやく集落と思しき場所を発見したのだ。酷い荒れ具合である上、今のところは狩人が先行したと思わしき死体だが、彼の進んだ目印のように転がっているため、あまり迷うこともなく、突っ切る事が出来ていた。

ここも住人たちの憩いの場であつたのだろう。だが、其処に倒れる死体の全てが体の一部に獣となりかけた痕跡が見える。蕩けて形のない瞳を見開いたまま倒れる屍、そして彼らが持っていた武器が辺りに巻き散らかされている。このような事ができる人物を、恭也はすぐに脳裏に浮かべた。

「この人数を一人で捌いたのか……」

あの狩人も強いな、と息を巻く。戦闘の際、恭也は不死性を利用したゴリ押しと、焔薙や宇理炎という強力な神器を用いた圧殺を主としているが、対する狩人は手にした仕掛け武器を持ち替え、変形させ、状況に応じて確実に銃撃を差し込み致命傷を与える戦い方。

集中力が続かなければ戦えないとも言えるが、故にこの惨状から実力が伺い知れる。

「なんだろう……この感じ」

恭也が目の中の光景を焼き付けている中、美耶子かもどかしげに呟いた。

「どうしたんだ？」

「あっち、あっちの崖上から……なんか嫌なカンジがする」

「えっと」

視界を借り、美耶子の指摘したほうを見る。道と呼べるかは怪しいが、確かに人が通れそうな場所があった。しかし自分の視界にはないが、美耶子の視界には赤い何かが流れている様子が見えた。

赤い何か。どちらかと言うと黒っぽい。飛び散ってしばらくした血のような色。死血の色。濃厚な死血という単語が頭に浮かんでくる。これもまた、高まった啓蒙のもたらしたもののなのだろうか。

「嫌な感じかあ」

恭也はそのような感覚は無いが、物理的な慣れが無い美耶子でなければ気づけない違和感というものもある。もう一度彼は本来狩人が通ったであろう道を見る。死体が標のように続いており、それが彼の足跡代わりにもなっていた。追うのは、そう難しくはなさそうだ。

「狩人さんの事も気になるけど、美耶子が嫌な思いしてほしくないしな。ちよつと寄り道しようか」

「でも」

失言であると思つたのか、ハツとしたように言葉を続けようとした美耶子に、かぶせるように彼は言う。

「同じところ探すより、狩人さんが行つてない所でなにか探したほうが良いかもしれないだろ」

誰が聞いても取つて付けたような理由であることは明白だった。美耶子はそれを少しうれしく思いながらも、また自分がきつかけで恭也を縛り付けているのではないかと不安を抱いてしまう。

だが、やはり何度でも思うのだ。こうしてただ一人、自分を思い続けていると信じられる人間が居ることが嬉しいのだと。赤面しそうな顔を、見えないのに咄嗟に覆い隠してしまった。

彼は一度集落を出ると、崖上に行く道の方へと足を向けた。途中凶暴化した犬も物陰から襲いかかってくるが、美耶子が事前に察知して教えていただけあって、逆にタミングを合わせて喉笛を切り抜けていく。血糊を払って蒼炎で浄化し、恭也は更に細い道へと顔を向けた。

「あつちの方？」

「うん」

美耶子の視界には、先程よりもはつきりと赤黒く濃厚な流れが見える。その源流を

辿ってみれば、洞窟の入口がポツカリと口を開けて待ち構えていた。

更に狭く、そして闇に閉ざされた場所だ。

彼は刀の柄を握る力を強め、意を決して飛び込んだ。

「安定していますね。今のところは、大丈夫でしょうか」

アヴァの額に乗せたタオルを替えて、アデーラは胸をなでおろした。

幸いにも、アリアンナが自分の娼館から持ってきた飲水や食料の蓄えはまだある。加えて、教会の狩装束を着た金髪の狩人がどこからか医療品を持ってきてくれたおかげで、アヴァの看病にも余裕を持って臨める。尤も、その金髪の狩人は物を届けるなりすぐどこかへと行ってしまったが。

さて、とアデーラは一息をつく。不謹慎だとは思いつつも、アデーラ自身、こうして誰かの看病に専念することで自分の嫌な記憶を掘り返すような考えに至らなくて済んでいる。もう少しだけ、落ち着かせる時間が欲しいなどと。手付きとは裏腹に、自分勝手なものではないか。彼女はそうして、結局己を嫌悪していた。

「私も癒者の心得があればよかったのだけど、流石に専門家には劣るわね」

「アリアンナ………さん」



ぎこちない敬称を込めて呼ばれたアリアンナは、いつものように微笑を携えアデーラに水を手渡した。ただタオルを替えるだけでなく、アヴァの症状に気を遣いながらの看病だ。また、この状況が否応にもアデーラの緊張を張り詰めさせる。

受け取った水に少しばかりの視線を投げてから、彼女はグラスを傾けゴクリと喉を鳴らした。山間の冷えた空気が自然と貯蔵水を冷えさせ、火照った身体によく染み渡る。味のほどはいつもの不味さではあつたが、それはアデーラをいくらか落ち着かせた。

「ありがとうございます」

「いいのよ。状況はどう?」

「おおよその傷は癒えていると思います。あとは体力の回復と、彼女の精神が打ち勝てば無事に目覚めるでしょう」

サーベルという、人を殺傷するための武器が振り下ろされたはずのアヴァ、その肩口に大きな傷跡が残っているが、既に新たな皮膚と肉が傷口を繋ぎ止めていた。恐るべきはこの街がもたらす血の医療の賜物か。はたまた、彼女が偶然摂取した体内の輸血液との相性か。怪我に關しては、もう心配はないだろう。この街で傷のある女など、珍しいことではない。

だが、アリアンナもアデーラも、そして未だ正気を保つ住人たちが唯一恐れる可能性が残っている。

「…獣の病は？」

「先程、言ったとおりです」

「そう」

盲目の赤衣の男も固唾をのんで見守るアヴァには、獣化の危険性が新たに残されていたのである。

住人たちにとっては周知の事実、狩人であろうと、このヤーナムで輸血を受けた以上はいつ獣の病が発症しても可笑しくはない。あの少年は、この結末を知っているのだから。あるいは。

オドン教会の時間は、迫り来る暗闇と、祓いきれない恐怖によってゆっくりと過ぎていく。

成り行きを見守っていた偏屈な初老の男は、気に食わない、と鼻を鳴らして帽子を深くかぶり直した。

## 白痴

なみなみと洞窟内に満たされた、底の見えぬ水面。恭也が見上げてみれば、いくつか空いた天井の穴から月光が降り注いでいる。そのおかげか、視界の確保は可能だった。しかし問題はそれではない。

水面から跳ねるワームのような生物、そしてそれらを意にも介さず、腰を曲げて歩く焼け爛れた皮膚を持った巨人たち。ねじ曲がった茎を持つ白い花が咲き誇る神秘的な光景も、底に住まう者共によって悪質な空間へと早変わりと言った具合である。

そんな中、彼がピチャリと踏み出した一步。靴から染み出してきた足元の液体はたやすく彼の肉体を蝕み、鋭い痛みを与えてくる。それどころか、息を吸う度に内蔵が重く、痛みを放つ。これは、毒。それも酷い中毒症状であると気づいたときには、恭也は咳き込み咯血する事態に陥っていた。

水銀の洞窟湖、といったところか。重くけだるい体を支えながら、その不死身と成り果てた体が傷つけられ、修復される繰り返しだが更に彼の身を襲う。およそ自然現象では理解でき得ぬエネルギーのぶつかり合いから生じた灼熱にすら焼かれつつも、ここは何をするべき場所でもない判断した恭也は、心配げに見つめているのであろう美耶子に

語りかけた。

「美耶子、とにかく赤い流れつてやつを見てくれ。俺もそれを追いながら駆け抜けるから」

口元から垂れる血を腕で拭い、息を止めた恭也は美耶子の視界を半分だけジャックする。無言でうなずいた美耶子はしっかりと役割を果たしてくれているのであろう。右半分の彼女の視界は、彼女のみが視認できる赤く禍々しい血の意志とやらを映し出している。

その奔流の出処である、松明に照らされた出口までもを。

たどり着くべき場所が見えたなら、あとは駆け抜けるのみ。武器は左手に握りしめた宇理炎のみ。走るとき重心の邪魔になる焰羅は背中に収め、彼は鋭い一步を踏み出した。

すると、彼の存在に気づいた巨人や、醜悪な見た目をしたワーム共が水銀の毒ものともせずに一直線に恭也へと襲いかかってくる。巨人が振り下ろした手が水銀の水面を地面までかち割り、その衝撃を利用して飛び出てくるのは巨大なワーム共。カチカチと人のサイズにまで達したことで、肉をバターのように切り裂いてくる大アゴを振りかざす異形は、羽生蛇村にもいたのつぺりとした水死体を思わせる生理的嫌悪を抱かせ

だが一度足を取られれば、如何な不死なる恭也とて質量に巻き込まれ生き地獄を延々と味わうのみ。分かつているからこそ、彼に容赦は何一つ存在しなかつた。駆け抜ける腕の振りと同時に宇理炎が輝き、襲い来るワーム共を塵すら残さぬ横薙ぎの煉獄の炎で消し去つた。襲い来る巨人共は、虚空から降り注ぐ鉄の火にて背中を焼かれ、やがて全身を焼き尽くされてのたうち回るままに灰燼と化した。

これらの攻撃は、しかし、恭也にとつても諸刃の剣。熱され幾ばくかが蒸発した水銀の水面は、彼の呼吸器官を侵す猛毒となつて心身を攻撃する。渡りきつてもそのうち死に至り、渡りきろうとする前にこの番人のようなモンスター共に押しつぶされる。地獄のような秘密の扉は、この先に一体何を隠しているというのか。

「つ……オエツ……ほつ」

結核患者ですら吐かないような大量の血は、水銀以外にも過剰な毒素が彼の身を蝕んだ証ともいえよう。されど、吐き捨てたそれを最後に、彼はようやく対岸の松明に照らされた岩場へとたどり着くことが出来た。

転がるように急ぎ飛び込んだ彼は、落ち着くための深い呼吸をしたのだが、それがまた酷い嘔吐感をもたらした。これまで以上に鼻をつく死臭だ。ひどい吐き気に見舞われる。だが、ソレにかまっていれば後ろより迫り来る脅威に対応できぬ。故に、急ぎ煉獄の炎で蓋代わりの壁を作ると、最後の機会を伺つて恭也に向かつて飛び込んだワーム

が、哀れにも焼き尽くされる音が虚しく鳴り響いた。

炎が空気を熱し、死臭は更に高まった。浄化の炎ですらも祓いきれぬ、あまりにも異様で濃い匂いに疑問を掲げた恭也。その場を見上げると、今度こそ彼は絶句する。

「……なんだよこれ」

死体、死体、死体。どこに目をそらしても人間の死体が目についていた。

腐った死体に白骨化した死体、冷たい血を流す肉のついた死体やミイラになったような死体。目につくモノはおぞましい人の死ばかり也。生の息吹は欠片たりとも感じられぬ、あまりにも冒瀆的な光景。救われるとするならば、ここの死体はもう羽生蛇村のアレと違って動き出すことがないことだろうか。いや、誰にも知られぬ洞窟の底で死んでいる時点で、救いなど無いのだろうか。

恭也は、幸か不幸か己の中の啓蒙が働くのを感じた。死体から漂う何者かの純粹な狂気が満ちているのを。美耶子すらも絶句するのか誰も言葉を発さぬ中、その知識はまっすぐに、上へと示す警鐘を彼の中で打ち鳴らしている。

なんとも言えぬ中、恭也はようやく己を取り戻し美耶子の視界を間借りしようとするが、対する彼女は立ち直れていないのだろう。借りた視界は真つ暗で、彼女がうずくまっているのか、それとも単純に目を伏せているのか暗闇しか映さない。

だが、己の脳に根付いた啓蒙は導いている。ひたすらに、上であるのだと。

「啓蒙、啓蒙……なんなんだよこれ」

恭也は、ここではじめて頭の中をナメクジが這い回っているような、おぞましい気配を感じた。己自身の感じたことであるのに、己とは全く別のものが頭に入り込んでくる異物感である。そう気づいた瞬間、彼は頭に居座る何者かを捉えるように右手を伸ばし、がしりと、頭の外側で実体を知れぬ何かを掴んだ。

ぬるりと、ひんやりとしながら発光するそれは、まさしくナメクジのようにぬれそぼっている。

「……………」

掴んだ感覚はあれど、恭也は手元にあるはずのソレを視認できていない。

そして苛立ちと、こんなものが頭を這い回っていたという嫌悪感から、その実態のなぬめりを握りつぶした。

頭の中がクリアになっていく。啓蒙、と感じられていた啓示のような知識がようやく彼の頭の中で実を結び、己自身で引き出せる確かなものとなっていくのを感じる。ずっと、ずっと、感覚的なものでしか無いが、ようやく己自身を取り戻せたような爽快感が恭也の中をおぞましく駆け巡る。

歓喜とも思えるような寒気が、鳥肌となって恭也の体に降りてきた。

「クソっ」

されど、彼がそれを喜ぶことはない。今己のしたことをすぐさま振り払って、彼は死体が積み重なる縦穴に伸びた、一本のハシゴに手をかけた。

「……恭也？」

「もうちよつと目、閉じててくれ」

「うん」

濃厚な死血。その源流は僅かではあるが太くなっている。今の恭也は、先程まで美耶子にしか見えていなかったその流れがはつきりと見えていた。もはや原因など言うまでもないが、見えたこと以上に彼は抑えられぬほどの怒りを内包していた。

こんなものが人の所業であるというのならば、こんなものが。

嫌悪と憎悪をむき出しにしたのはいつ以来であろうか。いや、美耶子と出会う前ですら、このような強い感情を抱いた事はないだろう。彼はそうした強い思いを抱えながら一段一段、握りしめたハシゴを軋ませながらも、ようやく月光の見下ろす事ができる地上へと到達する。

墓穴の悪用。登りきった恭也が抱いた第一印象であった。同時に思い起こすのは、この焔難に宿る木ル伝が開放されるための手順。墓とは、暴かれるためのものではないというのに。

「……って、市街地か？」



そして墓穴の辺りから少し移動すれば、人の立ち入りを制限する大きな柵、それに連動するであろうレバーを引き、柵の扉から歩いた向こう側には見覚えのある大橋が見えている。ここは、またヤーナム市街の中でもアヴァの自宅があつた住宅地に戻つてきたのだろうか。

アヴァと出会つた場所からは見えづらかつたが、今、自分の背中にあるひとときわ大きな建物は、おそらく何かの施設なんだろう。そして、墓穴側からしか行けない通路に、死血の流れがますます太くなつて流れているのが見て取れた。まるで、導くように。

何が導いたのだろうか。そんな疑問もあるが、義憤に駆られた恭也は焰薙を抜き、臨戦態勢にて奔流が指し示す細道へと向かつていく。細く心配そうな美耶子の息遣いが彼の耳を撫でるが、恭也の形相に何も言えずにいるのか、美耶子が何かをいう気配も無かつた。

仁王のごとき佇まいの彼が進む内、びちよ、びちよ、と静かで寂れた土地には似つかわしくない奇妙な音が響いてきた。動物が嘔吐したときの喉の音にも似たそれを響かせるそれは、人のシルエットをしながらにして、似ても似つかぬモンスター。獣と呼ぶにはあまりに異形の怪物である。

いきなりの登場に面食らつた恭也であるが、幸いにもその謎の生物にまだ気づかれては居ない。そしてその生物の近くには、ぬめりを帯びた体液を頭に付着させた死体が、

月の光にて照らされている。

「あれも殺さないでダメなやつか」

もう、この異界においてはマトモな思考の人間以外は全員殺すべきなのかも知れない。今までの異界で人を殺したこともあるといえはあるのだが、ここまで規模が大きく、厄介な異界もはじめてである。何より狂気に満ちたこの世界は、恭也の性格を多少すり減らすだけの事態があまりにも多かつた。

覚悟を決め、彼は無音で切りかかった。だが、恭也は柔らかかそうな海産物に似た見た目に反し、思ったよりも深く切りつけられなかつた感触を受ける。対し、攻撃を受けたその奇怪なモンスターは、手元で光を生み出したかと思えばそれを恭也へと投げつけてきた。

当然、怪しい攻撃にむぎむぎ当たりに行つてやる道理もない。恭也は身をひねることでその光を避けると、今度は焔雑に蒼炎を灯して怪物の脳天へと突き入れた。扱い慣れた得物は彼の狙い通りにモンスターの頭部を貫くと、まどつていた蒼炎にて浄化の炎上を引き起こす。

彼はその勢いのまま、トドメと言わんばかりに股下へと刃を振り下ろし、二枚に降ろされた怪物はブチブチと汚らしい白い液体を撒き散らしながら灰燼へと還されていた。

「……なんなんだよこの建物」

正面から入るといふ選択肢は、この時点で消え去った。そんな彼を導くように、視界の死血が流れを変えてランタンの明かりが照らす短いハシゴの元へと彼を導く。この死血と啓蒙が導き出した赤い流れは、一体なんであろうというのか。恭也に何をさせたのか。

ここに来て、意思を持ったような動きを見せている死血の奔流に、美耶子共々、警戒を抱かすにはいられない。とはいえ、ここまで来て引き返すという選択肢も、彼らにはもはや無いのだが。

タン、タン、とリズムカルに登った彼は、屋根を抜けた先で大きく穴の空いた建物の中へと侵入することに成功する。立地的に、単なる入り口から入って階段を登った辺りになるだろうか。先も見えぬ真つ暗な渡り廊下は、伽藍堂で静かなものであった。

キシ、キシ、と踏みしめる度に老朽化した木材が悲鳴をあげる。誰かがいるならば、もうとつくに自分の存在などバレているだろうか。少しばかりの不安がよぎったが、今更であろう、という開き直った思いも彼の中には渦巻いている。

入り口とは反対側に伸びる死血の奔流は、やがて階段のある開けた部屋でぐるぐると上に向かって渦巻いているようであった。

ここが、終着点なのであろうか。

恭也が美耶子に話しかけようとしたその瞬間であった。

「あら、穢らわしい気配ね。あなた、どうやって潜り込んだのかしら」

部屋の上から、声が投げかけられる。声は、どうにも反響していて位置を悟らせないが、声色から女性のものであるということは分かる。同時に、ひどく何か計り知れない意思が渦巻いているという印象をすら受けた。

「あんたは？」

「私はヨセフカ。この診療所の医療者よ。そう、獣でない人の治療をできるといえば、どうかしらね」

嘘か真か、どのみち、死血という赤い何かが導いた先にいた人間だ。言葉の真偽はどうあれ、ろくな人物ではないことだけは確かだった。

「あなた、本当に不思議な穢れを纏っているのね。傍に悍ましい神秘のうねりを感じるわ。そう、血族ともまた違う……人為的な淀みの塊……ああ、魅力的だわ」

ほう、と艶やかな吐息を織り交ぜるヨセフカと名乗った女の声は、未だ一言も発していない美耶子の存在に気づいているのだろう。この時点で恭也が焔薙を握る力は強まったのだが、その覇気をも感じ取ったのか、恭也の反応に被せるように言葉が投げかけられた。

「でもね、もうそんなモノには興味がないの。私はついにたどり着きそうなのよ。ねえ、

あなた。今すぐ引き返しなさい。治験の甲斐もなさそうだし、あなたはここで得るものもない。そうでしょう？ 狩人でも、獣でもないあなたは要らないの。だからね、扉を開けて行ってもいいわ。ただ、私の邪魔をしないで欲しい」

「結局さ、お前もおかしいやつだつてことかよ」

「おかしいのはあなた達ではなくて？ よそ者さん」

あまりにも一方的に投げかけられる言葉は、会話にすらならない支離滅裂なものだった。まるでここに訪れるものは、全て自分の治験とやらの材料であるかのような見下し方。かかわらないに越したことはない、というのは本人が言ったとおりなのだろう。

だが、この場所に一人の人間も居ないということ、あの赤い死血の奔流が指し示した場所という状況。これらが、恭也と美耶子の二人に悪い印象を抱かせる。

かといって、狂人であるからと殺しに行くほどの理由もないのが確かだった。

オドン教会の避難者たちには、絶対に近づかないようにしたほうが良いと伝える情報を手にしただけでも良しとしようか。

煮えきれぬ気持ちのまま、恭也は無言でもと来た道を引き返し、ついでにこの建物の構造を把握するため、ヨセフカ女医が言ったように入口の扉を開け放つて出ていこうと、寂れた廊下を歩いていった。

扉を開け、何やら異星人のような死体が転がる部屋に足を踏み入れる。異星人に似た

怪物の近くには、何やら詭えられた血の入った試験管が転がっていた。

「……血？」

「狩人は青ざめた血つてのを探してると言つてたし、持つていつて見れば良いんじゃないか？」

「あー、そうだったか。わかつたけどさ、割れそうで怖いな」

美耶子の助言に従つて試験管をズボンのベルトの輪に通して引つ掛けた彼は、振り返つた先の診療台になにやら手紙が落ちてゐるのを見つける。封は開けられており、鈍つたアルファベットで書かれてゐる以上読むことは出来なかつたが、彼はその内、片方の封筒に妙な引つ掛かりを感じて手にとつた。

すると、

「……え？」

t o, K y o y a S u d a .

英語に疎いとはいへ、その意味が分からない恭也ではない。

自分宛ての手紙だ。こんな異界の、訪れたことのない診療所に。

「もう一通は……ダメだ、誰の名前かわからないな」

衝撃を誤魔化すようにもう一通の手紙を調べてみるが、同じく開封済みで、内容の文章が同じだということ以外に判明することはなかつた。見慣れない名前ではあるが、も

しかしたらオドン教会の誰かが知っているかも知れないという期待を込め、彼はその手紙も丁寧に折りたたんでポケットへと突っ込んだ。

これ以上探るものもない。あつてたまるか、という思いのまま扉を乱暴に開け放った恭也は、もと来た毒沼を好き好んで通る理由もなし、ひとまずはオドン教会に戻るため市街地の方へと歩みを進めることにしたようである。

キイ、と誰もおらぬ扉がひとりでに閉まる。

ヨセフカの診療所は、再び、哀れな患者を待っていた。

長杖が、湖の先へと指し示された。

得体のしれぬものを生やした、かつての叡智を誇ったであろう人間の成れの果ては、ひっそりと棧橋のたもとで安楽椅子を揺らし続けるだけの存在に戻った。アレが、彼の得たかったものなのだろうか。だとすれば、傍から見ればなんと呆気のない終わりであることか。

血塗れのノコギリ鉋を握りしめ、狩人は何度目になるやも分からぬ目眩を覚える。も

はや、かつて知の探求として知られたビルゲンワースも、人の言語を無くした怪物や、人の道理を忘れたかつての学徒が襲い来る、最果ての寂れただけの土地へと成り下がっている。だが、確かに藁をも掴むようなヒントは幾つも書き殴られていた。

赤い月が近づくとき、人の境は曖昧となり

偉大なる上位者が現れる。そして我ら赤子を抱かん。

あらゆる儀式を蜘蛛が隠す。露わにする事なかれ

啓蒙的真相は、誰に理解される必要もないものだ。

以前、アデーラを発見した隠し街にて地面に掘られていた殴り書きと照らし合わせる。と、この月が照らす景色は、おそらく偽物であるということが啓蒙から齎されている。そして、かつて頭蓋に触れたことで知った、この半植物となったウイレームという人物が指し示す先。偽りの月を破った先。すなわち、水面に映る月を通った先にこそ、真実へとつながる道があるのだろう。

嗚呼、ひどく突飛な発想だ。そのまま水に落ちてしまえば、哀れにも装備の重さで沈むばかりであろうというのに、脳に嘔き蠢く啓蒙的な発想が、間違いではないと根拠のない真実味を帯びた後押しをしてくるではないか。



「……狂ってしまったというのならば、そうであるのだろうか」

さて、己は本当にこのような物静かな青年であったのだろうか。血の医療より以前を思い出せぬ身としては、もはや追いつめ求める真実とやらが、己の過去に結びついた試しがない故どうにもやる気が出ない。

さりとて、進む以外の道はなし。後に退く道もなし。酷いものじゃあないか。

飛び込んだ先には、やはり水などあるわけもなく、代わりに常識を置き去りにした純白にして息の詰まる激んだ空間が待っていた。視界の先にて佇むは、秘匿の主であるのか、白く歪な蜘蛛のような多脚の何か。

「虫も、獣も、ウンザリだ」

ならば殺そう。秘匿を破ろう。

己が狩人であるというのなら、害為す糞どもを狩り殺せば良いんだろう。それしか、無いのだから。

## 炎雷

降り注ぐ隕石のような攻撃が弾け飛ぶ。バラバラになった破片が尖った先端を肌にごすりつけ、浅くはない裂傷を頬に残した。熱い痛みを残す頬を軽く拭い、ハア、と軽く息を吐いて構え直し、一足で接敵する。

狩人と相対する異形は、見れば見るほど醜い身体だった。白く、毛むくじやらの毛が岩石のような身体に生えた、ムカデよりも多脚の、しかし蜘蛛と呼べるシルエツトもつた化物。彼には知る由もないが、白痴の蜘蛛と呼ばれている上位者の末座である。

御大層な肩書だが、狩るものとしてここに在る狩人にとっては等しく殺せるだけの獲物である。慈悲もいらず、躊躇もない。ただ辟易とした自然体で彼はノコギリ鉋を振り下ろした。

白痴の蜘蛛、ロマの触腕が一本斬り飛ばされる。気色の悪い体液が巻き散らかされるのは、蜘蛛にしてはその巨大な体積が故か。怒り、という感情自体を兼ね備えているのかも定かではないが、身悶えしたロマが静かなる神秘を轟音とともに撒き散らした。

狩人は、己をほんの一瞬だけ、夢の中へと入り込むヤーナムの狩人独特のステップを刻んで逃れる。狩人の身体が実在していた場所を衝撃が通り抜け、夢から帰還した狩人

が実体を以て新たな切込みを入れる。的確に、作業的なまでに。

ここに来て、精神的に疲弊していた狩人の脳内にはロマを見たことによる啓蒙が流れ込んでいた。人間の経験から得てきた記憶から、無理やり上位者の存在を認識させるための儀式、それもまた、啓蒙。故に、今の狩人は人であつて人に非ず。されど獣からは程遠く、知慧を駆使して狩りを行っている。

彼の動きは最適化されていく。ただ、己の目的のために。

変形させたノコギリ鉋がリーチを伸ばし、無数に存在する頭部であろう部位を深く抉り削ぐ。大技を打った後のロマはこれに何も抵抗できず、甘んじて深手を受け入れるしかなかった。ロマの甲高い、すり合わせるような悲鳴が純白にして穢れた空間に響き渡る。その鳴き声は、狩人の脳奥を揺さぶった。

「つぐ」

呻きよろめいた合間を逃さず、ロマはその場で渦巻くようにして消失。代わりに、蜘蛛といえどイメージの付きやすい子蜘蛛が無数に狩人の周囲へと降り注ぐ。上位者にしてはひどく単調で常識的な手段である。これも、所詮は人から成った存在が故の弊害であろうか。

だが狩人という存在にとって敵の数が増えるのは喜ばしいことではない。危機的状況を打開すべく、彼は懐の夢より小さなマラカスのような物体を取り出した。それを一

握りの水銀弾とともにすり合わせるように地面に突き刺す。

小さなトニトルス。アデーラと共に隠し街ヤハグルを探っていたとき、偶然にも見つけた狩り道具のひとつだ。柄と共に握り込まれた水銀弾は触媒として神秘を刺激し、トニトルスに淡い青雷を纏わせる。

狩人は黒獣との戦いで、その雷が如何に強力であるかは蒙を啓かずとも理解している。その威力は身を以て知っている。故に、正しく使われた神秘はただの触媒である小さなトニトルスを介して神秘の技を繰り出した。

発生した雷は虚空より足場へ向かって下に落ちる。当然のことだ。だが、神秘は常ならぬが故に神秘。絶えず発生する雷は子蜘蛛のいる方へと進路を変えたかと思えば、枝分かれして小さき上位者どもの撒きクズを消し炭に変えていった。雷の耳を撃つ振動が狩人とロマを大きくゆるがせ、逃げたかと思われたロマの隠蔽を暴き出す。

慌てるようにその場から地面に背中を擦り付け、淀みを空間に伝えることで発生した隕石のような広範囲神秘を繰り出す。牽制目的であろうその攻撃は一度動きを見た狩人には通用しない。地面を突き抜けてくる神秘の攻撃は、突き抜けてくるがゆえに予兆を知らせる。尋常ならぬ反射神経にてステップを刻みつつ、狩人は僅かながらもロマの身元へと歩みを進めていく。

ただただ冷徹に狩る姿を見せる狩人に、かつて人の姿とともに失った恐れを呼び起こ

したか。ギイー、と人ならぬ音を掻き鳴らして大爆発の神秘を準備するロマであったが、人であつた残骸に引つ張られたのが、皮肉にもロマの逃げる最後のタイミングを潰してしまつていた。

ほんの一瞬。ほんの一瞬であれば、事足りるのだ。

「死ね」

嗚呼、嗚呼。生命を超える存在、宇宙より飛来した上位者という者共に向かつて死ねだとは。たまらず可笑しくて笑つてしまいそうな気分だ。そう、狩人は思つても居ない嘲笑を抱く。

だが殺せたのだ。殺せるのだ。気色の悪いナメクジ共にも似た何かは、青だつたり緑だつたり、白かつたりもするが血を流す。そして弱る。故に、死ぬ。

再び顔面に変形前のノコギリ鉋を振り下ろした狩人は、ガツチリと鉋の刃がロマの肉に食い込んだのを見るやいなや、ロマに跨るようにして飛び移つた。そして、両手で鉋の持ち手をつしりと握つて渾身の力で引き抜いた。

ノコギリ、の異名がこれほど輝いた事もないだろう。退くことで食い込んだ刃は下へ向かい、如何に上位者とはいえ存在の根幹を成す致命的な何かを削りきつた。白い体液まみれになりながらも、今度は反対側に刃を滑らせた狩人に情け容赦の言葉は通用しない。



振って血糊を落とし、狩装束のホルダーに繋ぎ止めた。

「……………」

ひどく、疲弊する。疲れた。なんだというのだ。

執拗に執拗に殺したが、結局獣と変わらない。斬れば命は削られ、切り落とせば命も落ちる。それだけだ。気色悪いだけの、化物共だ。頭痛を知らない知識を押し付けてくるだけの、害獣だ。

「ならば、狩ろう。己は狩人だ」

よろりと立ち上がり、狩人は己の道を定めた。獣道をゆく、狩人だ。もはや整えられた道であったとしても、再び草が茂れば獣道だ。そこを獣が通った痕跡があれば、獣道だ。ならば、この細い糸のような道を探し、追いつき、狩ればいい。それで、このクソツタレた街に馴染めることだろう。終わってしまった、この街に。

帰ろう、人がいる場所へ。

ふと見上げた先には白い白い空はなく、堕ちてきそうなほどに近づいた、鮮血の如き赤い月が見下している。ひどく、腹の立つ光景だなど、狩人は自分でも驚くほど単純な感想を抱いた。

視界の端に、花嫁のような衣装をした、胎から血を流した人影を見る。

ひどく血がうずいた。沸騰するように煮えたぎる意思が全身に回ってくる。硬直し

たように動かない身体がただただ、この白い空間に落ちてきた赤い月を見上げている。

意識もまた、戦いと原因不明のこの現象によってもうろう状態に陥っている。

「だからこそだ」

意識が完全に消えかける前に、狩人は呪詛を残す。

「おまえも」

眩く先は、ミイラのような花嫁姿の異形しか知らない。

同時刻、オドン教会。

安全であるはずの場所で、ヤーナムの住人たちは苦しみと共に頭を抱えてうずくまっていた。なんの前触れもなかったのだ。だが、彼らに全くの同時に異変は襲いかかった。きた。

薄暗く、優しい月明かりは凶悪なまでに赤く染まり、差し込んだ月光はあらゆる秘匿を破った。いや、秘匿が破られたからこそ月光が差し込んだというべきか。

老婆は頭を掴み、初老の男は揺れる視界に逆らい壁に手をつく。赤いボロ布の男は何かを察知したかのように怯えうずくまり、アデーラは祈りながらひどい頭痛に逆らつて



いた。アリアンナは酷い吐き気を催して椅子にもたれかかり胎を撫でている。そして、アヴァはうなされていた。

傷口は盛り上がり、徐々に深い毛が生えてきている。だが包帯の下であるからか、その異変には皆気づいていない。蒼炎は変わらず彼女らを照らし続け、風に吹かれて揺らめいた。

「あ、あが……ひつ……あう……」

身を丸めて苦しむアヴァの瞳孔は、とろりと溶けて縦に開いた。かと思えば、また溶けては涙のように角膜を体外に流していく。熱をもった身の異変に苦しまないはずもなく、ろくな声も出せずアヴァは叩き起こされた痛みそのままにその場で呻くことしか出来ない。無意識に、彼女の寄す処である獣狩の短銃が強く握りしめられている。

最初に気づいたのはアリアンナだ。他の皆に比べれば、その胎の痛みは内側から触られた程度のもの。明確には痛みというよりも気持ち悪さの勝る感覚であったからだ。さすがのように、恭也の残り火、蒼炎の燭台から松明を一本引き抜く。青い火の粉が舞った。

普段の言動からは考えられないほど、他人に献身的な姿は彼女の本当の気持であった。己の異変よりもアヴァを優先し、椅子から落ちるように彼女の元へと這いずった。いつのまにか、胎の違和感は消えていた。

「大丈夫、大丈夫よ……」

背中に触った瞬間、アリアンナはアヴァの身体が変形していることに気づいた。だが、すんでのところで留まっているということにも希望はあるのだろうか、継り付く。青い炎を近づけると、アヴァは恐れるかのようにその身を引いたが、アリアンナはそれよりも強くアヴァの肩を抱き、松明の炎から逃れられないように近づけた。

暴れそうになるアヴァの髪の毛の先が、蒼炎に炙られ焦げ縮んだ。タンパク質の焼ける鼻をつく匂いがアリアンナの顔をしかめさせる。だが、不思議とアリアンナが抱くアヴァの肩は、肥大化していた最初よりも小さく成っている。

「大丈夫だから……」

人の寄す処。最後の境界。なぜだかそんな言葉が頭に浮かびつつも、アリアンナは己の子をあやすように、己に言い聞かせるようにアヴァの背を擦る。胎の違和感は完全に消えていた。

同時に、とんだ皮肉だと彼女は己を嘲笑う。最も「ややこ」に親しい職に身をやつしながら、最も「ややこ」とは程遠い生き方をしてきた自分が、親を失った子供を、己のこのようにあやすなどと。

愛しい我が子を、心から安心させるために寄り添うなどと。とても。

矛盾と、助かりたいという打算が入り混じった彼女の複雑な気持ちは、結果としてア

ヴァの事態を収束させていく。盛り上がった骨格は、治りきつていない怪我口の包帯を突き破って出てきたかと思えば、まるで固まらない石灰のようにボロボロとオドン教会の床を転がっていく。ドロリと溶けた瞳は片目を失わせながらも、確かに人の形を取り戻す。抜け落ちた毛ははらりと無風の風につて地面に堕ち、溶けるように空気へと消えていく。

「かつ……」

愛しき人よ、退魔の尋常ならざる炎よ、どうか抗える力を。この子が抗える意思を取り戻させてください。

我ら血によって人となり、人を超え、また人を失う。

知らぬ者よ、かねて血を恐れたまえ

恐れたまえよ。

恐れは拒否となる。獣の誘いを蹴れば、獣は炎とともに燃え尽きる。

青い炎は手のひらを見せて差し出された手を燃やし尽くし、絶叫する獣を爪と牙を残して葬り去った。

アヴァは診療台の上から、それを静かに見つめていた。

まるで、夢のように。

夢は、覚めた。

「ハイ、は」

優しい炎が照らす、青色の世界。パリツと乾ききった空気。そしてあたりから聞こえる激しい息遣い。

アヴァが目覚めたのは、いつの間にかあの運ばれていたのだからオドン教会だった。だが待っていたのは予想とは程遠い光景だ。オドン教会は炎に包まれていた。恭也という異邦人が使っていた武器に纏わる青い炎。それが倒された燭台から布に燃え広がり、そして他の燭台からこぼれた香の原料や火種に移っていったのだろう。緩やかに、そして穏やかに青い炎はオドン教会を覆っていた。

「アリアンナ、さん。アデーラさん。みんな……」

意識を失ったアリアンナが、銃を握っていないアヴァの手を握り、アデーラはひどく疲弊した様子で炎が燃えていない場所へと住人を避難させていた。

「密かなる清潔に、血の乾きだけが我らを満たし、また我らを沈める。清潔を得よ。だが人々は注意せよ。君たちは弱く、また幼い。冒流の獣は蜜を嘔き、深みから誘うだろう。だから人々は注意せよ。君たちは弱く、また幼い。恐れをなくせば、誰一人君を嘆くこ

とはない。清潔を祝福はのぞみ、よく祈るのなら、拝領を与えられん。」

疲弊しながらも、自分たちを囲む炎にむかつて祈りを捧げるアデーラ。ここまで広がってしまったえば、もう助からないと悟っているが故の行為か。アヴァが見渡してみれば、オドン教会の3つの入り口は総て閉ざされており、墓地へと戻る部屋の扉も、既に蒼い炎が回っている。

「……目覚めましたか」

アヴァが起き上がってあたりを見回した姿を確認し、アデーラは祈りを止めて自然な表情でアヴァに話しかけた。

「これって……」

「見てのとおりです。その娼婦があなたを助けるために蒼い炎を使ってあなたを獣に落ちる前に引き戻しました。ですが、その直後に意識を失い、我々も酷い頭痛に襲われていたので止める暇もなく。彼女が落とした松明が、燃え広がったのですよ」

もうこうなっておしまいだと。生き残ったというのに酷い最後だと、なぜか落ち着いた様子でアデーラはひとりごちた。

「教会にいたあの男は、一番遠いこともあつて手が届きませんでした。あなたとこの女を抱えるので精一杯でしたので」

そう指差す先には、炎で見えないが、オドン教会の赤布の男がいた場所があった。悲鳴一つも上がらない。既に、燃え尽きて死んでいるのだろうか。

「獣に食われるよりは良い最期かもしれない。なにせ火事は……燃えなくとも、そのうち眠るように逝けると聞いたことがあります」

すました顔で言つてのけたアデーラに、反論する声は上がらなかつた。老婆も、初老の男も、もう精一杯だったのだ。自分を取り巻く状況がコロコロと変わる獣狩の夜になにより、この街で生きたものとして。

獣に殺されるよりは上等だと、心の何処かで納得していたこともあつたのだろう。どこかヒステリックな印象だった老婆も、仕方がないと言わんばかりに黙りこくつていく。

せつかく目が覚めて戻つてこれたというのに、災難なことだとアデーラは続けた。この炎を前にして、何もかもを諦めてしまったが故の態度は、アヴァを慌てさせる感情をすつと沈めてみせた。

なにより、「戻つてきてからというもの、妙に冴え渡る感覚に酔つていたアヴァも、どこか他人事のようにこの事態を見つめている。

「お父さん、お母さん。おじいちゃん」

ヘンリックの遺した銃と、頭に結ばれた白いリボンだけが、親しい者を思い起こす。

水銀弾すら込められていないその銃を胸にいただき、アヴァはすんとその場に座り込んだ。涙は枯れ果てたのか、もう流れることもない。

ただ心残りなのは、あのときに抱いた憎悪。それを獣に向ける前に、燻らせてしまった。それがなぜだか、アヴァの心の片隅に引つかかっている。

それからだ、住人たちはとくにしやべることもなく最期を待った。待った、はずだった。

いつまでたっても、炎はこれ以上広がらない。

炎は住人たちを焼く熱を発することはなく、ただその場で燃えている。

「……あれ？」

そんな声を上げたのは、アヴァでもなければアデーラでもない。まして、初老の男や眠ってしまったっている老婆でもなかった。ひどく聞き覚えのある、引きつったような声の男。

「も、燃えない……燃えちまわないなんて」

「えっ？」

生きては居ないだろう。そう思っていたはずの者の声が、聞こえる。間違はなく、彼の近くにあった香の材料にも炎が広がり、アデーラが最期に見たときは特徴的な赤いボ

口衣にも蒼炎が燃え移っていた。

だが、死んでいない。

「ああ、そうか……あんた。ああ。綺麗だなあ……」

男は何かと話しているようだった。いや、話すというよりは独り言だろう。絵画を前にして感嘆する人のようなものだ。ただ、全盲の男が綺麗だという感想を抱くのはおかしなことでもあった。

「もしかして」

アヴァの頭に好奇と閃きが宿る。決して賢いとは言えない、いや、愚かな真似であると断言できる行為を、彼女は試してみようと……確認してみようとしたのだ。

そつと炎の壁に出した手は、確かに燃えては居なかった。



## 蒼炎

白痴の蜘蛛、ロマを撃破した狩人。彼は狩りを全うしたかと思えば、白く冷たい光に包まれ、聖堂街の一角に移動させられていた。何もかもが夢のようで不安定、突拍子もなく、しかし人のイメージじうる超常現象にあふれている。

だが現実として、未だ白い血液が滴っている己の獲物と狩り装束は、夢のような空間で行われた戦闘が少なくとも今に至る現実であつたことを裏付けていた。

「なんだ、青い……空？赤い月？」

儀式の秘匿は破られた。悪夢の赤子を探せ。

明らかに雰囲気が変わつた空に目を向け、そして地面に刻まれた薄暗く光るメッセーヂを読み取るとそのメッセーヂは溶けるように消えていく。

武器の血を払い、獲物を懐に収めた彼は空よりもなお青く、脳裏を刺激するゆらめきを感じて聖堂街へと目を向けた。すると、どこか懐かしさを感じる炎が燃え盛るオドン教会を発見し、深く被つた帽子にも隠れられないほど目を剥き驚いた。

どこか、己の原動力のひとつである人を守るためという使命感。それらが合わさつた

結果、上手く誘導できた僅かな生き残りの人々。所感はどうあれ、彼ら彼女らが拠り所とし、ロマの討伐後に己がもつとも触れたいと思つていた人のぬくもりがあるべき場所が燃えている。

そう思う間にも、彼の足はオドン教会に向けてすでに走り出していた。

どこから湧いてきたのかも分からないが、大聖堂の周辺に蔓延る教会の服をまとった獣の病に侵された民衆共が、突破してきた道を再び埋めるように殺意を振りかざしてくる。彼はロマの狩りを全うしたあとの、呆けた頭に入れ、獣狩りの散弾銃を装填する。

振り上げた手と頭に散弾が当たるように一発。怯んだ輩を蹴り飛ばせば、大聖堂へと向かう階段の下へ向かつて転がっていく。いくら獣の病で鈍感になっているとはいえ、所詮は人間の肉体の範疇でしかない教会の信者共は転がり落ちるうちに仲間（と言えるかも怪しいが）の大男たちを巻き込み、頭や手足がブサイクな針金細工のように曲がって痙攣した後、息絶えた。

はじめは大聖堂を目指し苦戦していた狩人であったが、こうして下る側になってしまえば容易いものだと倒した相手を一瞥することもなく彼は階段を駆け下りる。

「これは、何だ……？」

やたらと曲がりくねった街路を抜け、なにやら悲惨な肉袋と化した死体が放置されて

いる聖堂街の広場へと到着すれば、彼めがけて走ってきた民衆が、獣のような悲鳴を上げながら彼を認識すらせず走り去っていった。

ごうごうと燃え盛るオドン教会の、外側に伝つて生えていた植物の残骸だろうか。青く揺らめく火の粉がちらちらと広場を照らしながら舞い落ちる。その蒼炎はやたらと獣狩りの民衆を怯えさせているらしく、今もどこかの通路では、炎から遠ざかるように逃げていく慌ただしい足音が聞こえてきた。

どこか幻想的ではあるが、それがもたらす被害は許容できるものではない。なにせ、この蒼炎はレンガ造りのヤームであるにも関わらず実害を引き起こすほどの火災に発展しているのだ。

「皆、無事かつ!? くうっ!」

ようやくオドン教会の入り口にたどり着いた狩人は、しかし傍目よりも燃え盛る教会内の炎に遮られる。わずかに露出した目元だけでも感じられる熱気は、近づけば己を燃やし尽くすであろう高温であることが伺い知れた。

こうなってしまうては、もはや生存は絶望的。炎の前でたたらを踏み、拳を握りしめた狩人が完全に諦めようとしたときである。

「狩人様、狩人様なのですか? ご無事だったのですね!」

「その声はアデーラ! 君か!」

なんと、その教会の中から声が聞こえてきた。

それ以前感じた狂気を感じられない、はつきりとした理性のある声色のアデーラの声である。立ち直ってくれた喜びも今はさておき、炎の勢いに遮られないよう、彼はヤーナムに来てから一番に声を張り上げた。

「他の皆は!!」

「無事です!この炎は、我々を焼くことはありません!!アヴァが確認してくれました!」  
「なに:~?」

試しに炎に手を伸ばすが、駄目だった。

狩人の指先は瞬く間に炎で炙られ、酷い火傷を負う。

「ぐっ……」

「狩人様?」

「いや、なんでもない!だが聞いてくれ、獣の病に侵された者や、訳の分からないナメクジ共はこの炎が苦手のようだ!今ほど、外を彷徨く民衆が炎を嫌がり逃げていった。中がどうなっているかは分からないが、オドン教会は貴公らにとつて今まで以上に安全なはずだ!」

「それは……でも……」

狩人が未だに声を張り上げている理由を察したアデーラ。確かに、夢を見る狩人はす

べからく獣の病に疾患している。ならばもうこのオドン教会へ直接訪れる事はできないのだろう。訳の分からないナメクジ共、という耳新しい言葉は気になるが、今はそれを気にしている場合ではなかった。

「アリアンナ、さん。それから、皆さんも。少し彼と話してきますがよろしいでしょうか」

「……ええ、アヴァは預かるわ。こちらに」

アデーラは再びの眠りについたアヴァを、入れ替わるように先程目覚めたアリアンナに託すと、自ら炎の中に歩み出た。建物や病を燃やすこの炎は、たしかにアデーラも、彼女の装身具も燃やすことはなくほんのりとした暖かさを以て迎え入れた。

ふわりと、炎の影から現れたアデーラを見た狩人は、今度こそ安心したように息をついた。炎の中から聞こえる声など、あまりにも現実的ではないからだ。そして、無事を確認してホツとした自分自身の良心にも、安心する。

「狩人様」

「本当に無事のようなだな、貴公」

「ええ、狩人様もなにか手がかりは掴めましたか？」

狩人は、はじめにヤーナムを訪れていた理由にして唯一の記憶である「己の不治の病を癒やしたい」という願いに「獣狩りの夜を終わらせたい」という真つ当な価値観から

くる使命感を忘れたことはなかった。

故にアデーラには嘘偽りなく、ビルゲンワースにて行われていたであろう儀式とその正体、最後に待ち構えていた秘匿の鍵が、蜘蛛のようにも見える訳の分からぬ化け物であることを話した。そして教育者の一人であろう、植物のような何かを生やしたミイラが居たことも。

「ビルゲンワース……放棄された学び舎。故にこそ、ヤーナム民が立ち入ることもなく秘匿という隠れ蓑のための儀式を行っていた、と。これは確かな前進です。狩人様」

「ああ、それにかの化け物を狩った後に……」  
「なにか?」

一瞬だけ見えた、花嫁姿のナニカ。アレが見上げたからこそ赤い月に気づいた。

そしてこの夜もまた、秘匿されていた空に赤い月が昇っている。だがあまりにも情報が足りず、なぜか口が回らない。

狩人は少し間を置き、ここに来る直前のことを思い出す。

「…そう、そうだ。悪夢の赤子を探せと」

その赤子とやらがこの終わらぬ夢のような夜を続けさせているのだろうか。文字として、たしかに刻まれていた情報を出せば、アデーラも考え込むような素振りを見せるが、しばらくして首を振った。

「悪夢……赤子。ビルゲンワースには、思想の違いによる内部分裂があつたとは聞きませんが、申し訳ありません。その詳細は、私にはなんとも」

「いや、十分だとも。まだヤーナムを十分に探し回つた訳では無いからな。…そういうばだ、キョーヤはまだ戻っていかないのか？」

「いえ、この炎を授けて頂いてからというもの、貴方を後を追つたはずですが」

「少なくとも、ビルゲンワースに立ち入つた気配は無かつた」

「そうですか…彼には、改めて礼を言わせていただきたいものですね」

そうして、アデーラはオドン教会が燃え上がった経緯を説明した。

恭也が瀕死のアヴァを連れ帰つてきたこと、体を温めるために燭台の炎をあゝの東洋の剣から発せられる炎に移したこと、そしてその炎が燃え盛り、獣の病の初期症状が祓われたこと。

狩人が来るまで、その不可思議にして絶対である蒼炎をもたらしした恭也は、あの偏屈な男にとっては崇められる一歩手前に来る程度には認められているらしい。さもありません、不治にして凶悪極まりない獣の病を、精神が獣に変ずる前であれば癒やしきつた実績は、このヤーナムに続く歴史の中では一度たりとも訪れたことがない奇跡だ。

それを目の当たりにして、この街に住む人間だからこそ抱く感情がある。

アデーラが一人で出てきたのは、医療教会がそこに至ることができなかつたという彼

女一人が負うには大きすぎる責任感と、熱に浮かれた彼らでは今訪れたただのよそ者でしか無い狩人とともに会話できるかは怪しかったからだ。

そしてアデーラ自身、初対面の際には聖布の翻る教会の狩り装束をまとっていたこの狩人が、教会の狩人ではないことにも気づいていた。なんなら、今の狩人が別の装束を纏っていることからそれは明白である。

だが、しかしだ。それでも人のためにと動いたこの狩人のことを、アデーラは黒い雷の獣を退けたあのとときからずっと、信じている。いまや狂気的な熱を捨て去つてもなお、彼は病は治せずとも、夜を越える一手を必ずやうつつくれるはずだから、と。

狩人もまた、黒き獣。名をパールと呼ばれていた雷の狩人証を落とした際のことを思い出す。あの時から彼が持つ武器が放っていた炎が、ここまでの事態を引き起こすとは予想外であったが。

燃え盛る青い炎の教会。火の粉をものともせず、アデーラは狩人の目を見据えた。

「狩人様、獣避けの香よりも強力な守護の炎により、我々に時間は与えられました。どうか、どうか、貴方の狩りを全うしてください」

狩人は頷いた。彼女に抱いていた危うげな光は消え去り、ここを任せるにふさわしい教会の血の聖女としての立ち振舞を取り戻した彼女に任せておけば、もうここは安心だと。



「貴方がいずれ戻ってくる時に、こちらも集められた住民の意見をまとめます。それから、キョーヤ様も必ずあなたのお力になると思います。あの方が戻られましたら、あなたの後を追うようにと」

「ああ、ならば私は大聖堂の向かって右の道に進むと伝えてくれ。秘匿を破った際、私が移動させられていた場所だ。おそらく、なにかがあるだろう」

「大聖堂の……ええ、必ずや。どうかお気をつけて」

最後に一礼し、狩人が去らないうちにアデーラは燃え盛るオドン教会の入り口へと戻っていく。完全に姿が見えなくなったことを確認した狩人は、背中のノコギリ鉋を片手にもと来た道に戻っていった。

かくして、狂乱の始まりとなるはずの月は、異邦を受け入れた教会のものたちの運命を狂わせることなく終わった。だが辿るべき運命からは大きく狂わせた青い炎がこれ以上に何をもたらずのか。それを知るものは未だに誰一人としていない。

獣狩りの夜は秘匿されていた空を晒し、そして夜であり続ける。

夜明けへの一手は、遠い。

一方、ヨセフカ診療所を出立した恭也は、診療所の自分の名前が記された招待状、そ

して見知らぬ名前の招待状。2つの手紙を手に、上層にあるオドン教会を目指してヤームの市街地を駆け上がった。

診療所から見える巨大な橋は、一番最初に恭也が訪れた際に大型の獣に襲われた場所であると美耶子が言った。そこから恭也がどう狩人に連れてこられたのかは覚えていない。ときには塀を登り、ときには屋根を飛びながら身軽な若者以上の身体能力は、この複雑な地形の街をものともしていなかった。

さて、なぜその場で手紙を読まずに引つ掴んでいったのかといえば、だ。彼は純粋な日本人であり、学生の頃にその身を異界へ投げ出した経緯からすればもはやお察しであろう。

「教会の誰かに読んでもらわないと……」

「恭也も私も英語読めないもんな」

「いやわかんないって！なんだったんだあの繋がった字、本当に英語？」

かろうじて大文字のC：から始まるであろう名詞らしき単語があるということは判明したのだが、片や一介の学生、片や因習村の箱入り娘とくれば、その言語の理解は不可能に近かった。ちなみに手紙に書かれていたのはドイツ語にも似た文体である上に筆記体だった故、英語にはない文字を見逃しこの二人は正解にすら辿り着いていないのが実情だ。

なぜ会話が通じているのかに関しては、異界を滅する側として幾度も渡った恭也にすら不明だ。以前に英語圏の間人であるうハワードという似た年の少年にあつたことはあるが、そのときは彼が拙いながらも日本語を話してくれたおかげで会話が出来た。パートナーだった。ヤーナムのように明らかに外国人だらけの異界では、通じるときも通じないときもあつた。

異界で何らかの法則があるにしても、理解しようとするだけ無駄でるとも言える。

「美耶子、次は？」

「エレベーターから出たし、次はあの橋の向こう……に」

「え、美耶子？」

「きよ、恭也！アレ!!」

そうしてなんとか教会の近くに来たとき、慌てた美耶子の視界をジャックした恭也は上空に昇っていた彼女が見た景色に酷く驚いた。なぜなら、見覚えのある炎がどこかおどろおどろしい気配だったオドン教会を神々しい蒼で埋め尽くしていたからである。

すぐさまジャックを切り、恭也は駆け出した。幸い、遙か以前に狩人が蹴散らしてからの通りに民衆が迷いでて来ては居ないらしく、むしろ青い炎によつて静寂が訪れていた。ヘンリックの黄装束の布片が残る広場を抜け、アヴァを引き上げてもらったハシゴから上を覗けば、あの本や家具が雑多に置かれていた部屋が燃え盛っているのが見て

取れる。

焔薙の鯉口を切る。上の光を反射する刀身と鞘の隙間からは、全く同質の炎がわずかににじみ出ている。

「みんな、無事だよな…?」

すべてを燃やし尽くし、不死すらも灰燼と消し去る宇理炎とは違い、これもまた健全なる人を燃やさないことは知っていた。だが炎がもたらす二次被害は異界を削り、異界を殺す。それに人が巻き込まれたことで犠牲にしまったこともある。

逸る気持ちを抑え、梯子の取っ手に飛び移った恭也。

アヴァを搬送したときとは別の緊張とともに、彼は更に上を目指したのであった。

## 扁桃

「お、お帰り。無事だったんだな」

「赤い人、みんなも、無事で本当に良かった」

これが宇理炎の炎ではなくてよかった。というつぶやきは心に仕舞いながらも、恭也は赤衣の盲人にハイタッチするように挨拶し、心の底から息を吐き出すように座り込んだ。

蒼炎に包まれるオドン教会。恭也が辿り着いた頃には、狩人が掴んだ情報はすでに全員に行き渡っており、一体何が作用したのかは不明ながらも完全に正気を取り戻した住民たちによる意見交換も済んだ頃であった。

そうして恭也に狩人への伝言として渡されたのは、「メンシス学派という檻を頭に被った狂人集団がいる。そいつらが怪しい」という情報。その出処は意外なことにも、未だに恭也を訝しげな表情で眺めている老婆からもたらされたものであった。

最後に見たときの衰弱した様子はもはやどこにも見られず、目を吊り上げて近寄るものを遠ざける苛烈な雰囲気は元氣そのもの。彼女に向かって、恭也は礼を告げる。

「ありがとう、おばあさん」

「はんっ……こつちみて喋るんじゃないよ!! あんたも穢らわしい余所者さね。唾でも飛ばしてみな、呪つてやる!」

しかし正気も体力を取り戻したということは、余所者に対して嫌悪感や罵詈雑言を放つ口までもが蘇ったということ。こればかりは、恭也という顔の作りさえ違えば、まな外来人では如何ともし難い問題であった。だがそんな言葉を許さない存在が彼には付いている。

神代美耶子。彼女もまた老婆のように激昂していた。

「おい、なんなんだこの婆。誰のおかげでここが安全なのか、その余所者の使つてる炎が守つてるのかわかつてないんじゃないの?」

「美耶子」

「でもっ……おまえがバカにされてるのなんてもう」

老婆には見えないよう、首を横に振る恭也を見て彼女は口を閉ざした。

全ては詮無きことだ。化け物を殺せる相手は新しい化け物でしか無い、と。そんな扱いをされたことも数少なくはない。むしろ、疲弊したところを問答無用で刺しに来ないだけこれまでの異界の輩に比べればマシだった。

椅子に座り直し、鼻を鳴らして恭也から視線を外した老婆を一瞥し、恭也は懐から例の手紙を二通取り出した。

「アリアンナさん、アデーラさんも、今度こそ狩人さんを追いかける前にこれ読んでみてくれないかな」

「この、手紙は？…確かに貴方の名前みたいね」

アリアンナが手に取ったのは恭也宛の手紙だ。

「なんか、宛先に俺の名前と知らない名前があつたんだけど、流石にこの国の言語までは読めなくて。しかもここに来たのは完全に予定外だったんだ。なのに手紙があるつてのが気味悪くてさ」

「そうね……貴族っぽい挨拶から始まつてるけど、結局はこれに尽きるわ。//あなたをカインハーストに招待します」//って内容ね」

「カインハースト…それって」

「恭也！アルフレートってやつが言つてたお城だ！血族とか言うやつがいるところ！」

アルフレート。己を穢れた血族狩りと自称していた、奇妙な車輪の武器を操る狩人の一人だった。彼らと出会つたのはまだ記憶に新しく、この招待状はともすれば、彼が探し求めていたそのものと言つてもいいだろう。

「じゃあ、こつちのはアルフレートって書いてありますか？」

「これは…いえ、違う名前ですね。少なくとも私が知る名前ではありません。…いえ、ですがまさかこれは」

これが、と目を瞬かせて尋ねるも、帰つてきたのはそこまで事態はうまく動かないという事実であつた。とはいえもう一つの招待状を手にしていたアデーラのほうは心当たりがあるのか、アリアンナとともに恭也へ手紙を返して言う。

「この名前、狩人様の名かもしれません」

「狩人さんの？　なんて読むんだ？」

「それは…御本人から聞いたほうがいいかもしませんね。同じ時期にいらつしやつた異邦人。同じ場所に手紙があつて、同じタイミングで宛てられたのなら、というだけの予測に過ぎませんので」

「なら、聞いてみるよ。本当にありがとうアデーラさん、アリアンナさん」

懐に手紙をしまい直し、焔薙とルドウィークの長銃の装備を整えた恭也はオドン教会の入り口へと手をかけた。今度こそ、出発だ。と思つていたのだが

「キョーヤさま、最後にこちらを」

アデーラが取り出したのは、聖布で注ぎ口を塞がれた血の入ったガラス管。そして小さな皮のポーチに入れられた、この街の狩人が用いる水銀弾と呼ばれる狩り道具。

そのベルトを恭也に握らせ、祈るように彼の手を両の手で包み込む。

「これは、我々教会の血の聖女からの施しの血。狩人様にとつて必ずお役に立てるものです。どうか、どうかお渡し下さい。あの方とは長らくの間、会えない気がするのです」



「輸血液……だっけ。アイリーンさんも使ってたやつか」

「そしてこちらは、貴方の銃にも使える弾丸です。これだけしか見つかりませんでした  
が」

「大丈夫、これで十分。ありがとうアデーラさん」

受け取り、水銀弾のポーチは腰に。ガラス管を大事なモノをいれる小袋にしまい込む。恭也は最後に、全員へ深く頭を下げてオドン教会の炎の外へと飛び出していった。もちろん行く先は、大階段を昇った先にある大聖堂の向かって右側、もう使う人間もいなくなった険しい崖道である。

入り口の向こうが炎のゆらめきで埋め尽くされ、彼の姿は以前と比べて瞬く間に見えなくなる。二人、勇気ある探索者を見送ったアデーラは祈りの手を解き、いつのまにか椅子に座り直したアリアンナへと向き直った。

「渡すのね」

「はい。今の私は血が多い方ですので。これくらいならば負担にはなりません」

「そ、羨ましいわ」

「ところで、カインハーストとやらの手紙を随分と流暢に読むのですね」

アリアンナの指がピクリと反応する。

確かにアデーラも手紙を手にとってはいたが、彼女にとって見慣れない文体は貴族め

いていて、宛名はともかく文章も読みづらいものであった。

対してアリアンナは、さらりと目を通しただけで内容をすべて把握してみせた。

「遠くにある良いものより、近くにある愚かが好きなのよ。なんて、ね」

お望み通りにと気取ったように言ったアリアンナに、かぶりを振る。

「まあ、詮索はしません。全ては詮無きことです」

「フフ、そう？今の貴方とのおしゃべり、私は結構好きよ」

「そうですか。私はそうでもありません」

二人の会話を聞いていた初老の男はうげえ、と本気で吐き気を催した表情で少し離れた。確かに、今ここにいる全員がああ二人が戻ってくるのは相当先になりそうだと言う予感があったが、それはそれとして醜い女の腹のさぐりあいなど好き好んで聞きたいものではないのだ。

「ん」

「あらっ？」

アリアンナは布の敷かれたテーブルに寝かされた眠る少女、アヴァを撫でながら少しばかりのおしゃべりに興じていたが、手元から聞こえてきた声に首を傾げた。

先程から、目覚めてから青い炎を見つめてゆらゆらと眠りに戻る少女が再び目を覚ましたのだ。恭也は無理に起こそうとせず、静かに会話をしていたが、タイミング悪く目

覚めの瞬間には立ち会えなかったらしい。

「お兄ちゃん、は？」

「もう行っちゃったわ」

「そ、つか」

うとうと、ゆらゆら。そうして炎をしばし見つめて、アヴァは意識を深く落としていく。その小さな体が背負うには、あまりに重い運命。獣を克し、しかし目覚めは遠い。この街の住人にとっては明らかかな偉業を成し遂げた彼女は、今このコミュニティにおいて最も弱く、そして皆が少しばかり手を差し伸べる存在だった。

あの老婆ですら、わずかばかりの硬い焼き菓子を握らせている。

「……待ちましょう」

「そうね。そう、それしかないもの」

住人たちは確かに命を守られているが、このあまりにも長すぎる夜は自由に動ける狩人でもなければ、今度は飢えが彼女らを襲う。そういう意味では、たしかに初老の男や老婆のあまり動かず、家から持ち込んだ最低限の食料をちまちまと食べ、下手な交流をしないというスタイルは理にかなったものだった。

だがアデーラは狩人のために血を消費し、アリアンナはアヴァのために必死に看病を続けた。隠しきれない疲労が、リミットを縮めてしまっている。

オドン教会の人間として当たり前前の不安はまだまだ拭いきれていないのが実情である。だが、しかしだ。彼らは知らない滅びと狂い捻り曲がった運命は、たしかに退けられていた。

それを知らぬは、幸か不幸か。

だが少なくとも、彼女にとっては不幸であった。

この炎がもたらす鎮静は、心の底から安心を生むもの。薬で抑制できる範囲をすら超えた神使木<sup>ケルビム</sup>の加護は、あくまでも人の心が分からぬ上位者の齎した加護であると言わんばかりに。

「可愛い……パッチちゃん……どうして」

正気のままに、顔を覆う。

この現実を避け続けた孤独な老婆にとっては、不幸であったのだ。

往復した狩人の行き先は、夥しい死体に溢れた道であった。だからこそ死体が標となり、彼のもとに案内しているとも言うのだが、それはそれとして多くの人間に見える死体が通りにあふれかえる光景というのは、恭也にとっては辛いものであった。

「うわ、色々折れてる」

「狩人が蹴り落としたんだろうな」

「かな。にしても、アルフレートさんも待つてるとここに居なかったし、どこ行ったんだろ」

大階段のすぐ下まで来ていた恭也は、せつかくだからと手にしたアルフレートにとつての最大の手がかりである手紙を携え、かつて通った禁域の森に向かう階段の踊り場へ目をみやったのだが、近くに人の気配はなくなっていた。

今度こそ狩人との合流を目指している恭也からしてみれば迷う案件ではあったが、結局は狩人の痕跡を辿る方を優先した。同じくどこに行つたかわからない人物であるのなら、明確に行き先がわかっている方を優先するのは自明である。

また、ノコギリ鉋という痛ましい武器を用いられた死体という目印はこの上なく目立った。そこまで迷うこともなく、恭也は大聖堂を右に逸れ、射手がいたであろう崖道を通り、ボロボロの扉を抜けて到達したのだが。

「……なんだアレ。アーモンド？」

「あつ、みんながいる教会の外に似たやつ居たぞ。燃えてからは居なくなつてたけど」

「え？あんなでかいのに？見えなかつたぞ俺」

「つてことはアイツも普段は見えないやつか」

狩人の姿は見えず、代わりに見えてきたのは新しい怪物。

恭也が表現したようにアーモンド状の頭部に、やせ細った体からは無数の手足が生えている虫のような印象も受ける姿は、その巨体も相まって常軌を逸した怪物であることは間違いない。

彼らは知る由もないが、アmendローズ、と名付け呼ばれているその存在はかつての秘密の探求者たちにとっては最も名が知られた上位者の仲間だった。

もつとも、恭也たちにとっては最初に見た聖職者の獣よりかは見慣れた怪物だ。一定の距離を保つていればこちらを見るだけで特に何をしてくるでもないアmendローズの動向を監視しつつ、呑気に会話を交わす余裕があった。

「美耶子、見えてるか？」

「ん……うん、私の目を使ってみて。あの医者の女が居たとこみたいにな、変な流れがちよつとだけ見えるぞ」

頭に片手をあて、美耶子の視界をジャックする。彼女の言う通り、自分の視界では見えなかった僅かな赤い痕跡が、目の前の怪物が張り付いている場所の下にある扉の向こう側に続いている。

そして視界ジャックのアンテナを変えてみるが、この化け物の視界にリンクすることはなかった。羽生蛇村の神、堕辰子同様にある程度次元が高い相手にはジャックできない

いのは他の異界の経験から理解していたが、目の前の怪物は上位の存在であるらしいと情報を得る。

ジャックを終えた恭也は改めて自分の視界でアモンドーズを見やったが、あいも変わらず多腕のアーモンド頭は恭也を、正確には美耶子のほうを見つめて静かなものだった。一步、その長い手が届きそうな範囲に踏み出してみるも、動き出す様子は微塵も見られない。ギョロギョロと瞬きするように、アーモンド頭の縫い目から無数の視線が刺さるばかり。

「追いかけてみるか。前みたいに案内頼んだ」  
「わかった」

アモンドーズの下の扉を彼がくぐれば、ヤーナムの空がまた見えてきた。暗く、陰湿で初めて訪れたものを拒絶するかのような不快な雰囲気。だが階段を少し下るだけで見えてくる。あれは、見たことがある。

人をそのまま鍛造したかのようなオブジェ。確か、隠し街ヤハグルと呼ばれた場所ではなかっただろうか。

「恭也うしろ!!」

不意に、チリンチリンと微かな鐘や鈴にも思える音が鳴り響いた。鞘から引き抜いた焰薙を構えるや否や、農具を手にした民衆が異様な形相で恭也に襲いかかった。刀身で

4つ又の鋤をとっさに受け止めるが、これまで戦った正気を失った市民よりも若干強い押し付ける力に耐えられず転倒してしまった。息をつかせず再度ねじり込んできた鋤の切っ先が襲ってくるが、恭也は体を捻って地面を転がり立ち上がり、ルドウィークの長銃を背中から左手に握って引き金を引く。

飛び出した散弾が民衆の手から鋤を弾き飛ばし、そのまま膝と腹を貫通する。相手が怯んだ瞬間を見逃さず、肉薄し焰薙を横に切り払った。首が飛び、一瞬遅れて青い炎がその体を覆い尽くす。だが炎が燃やし尽くすよりも先に、その体はまるで飛び散る血液のように弾け飛んで空中に溶けていった。

「あいつ、いきなりなんにも無いところから出てきた。消えたときも一緒だ」

美耶子の視界から見ても、先程の敵は余りにも唐突に出現していた。これまでと違って、遠方の索敵がほとんど機能しない厄介な敵の出現は、オドン教会の人々との交流で緩んでいた恭也と美耶子の意識を切り替えさせる。

「だから死体が見当たらないのか…変な流れが見えてよかったな」

「それにさつきチリチリ聞こえてたのが怪しいぞ。アイツらどこから来るかわからないから、一気に行った方がいい」

「わかった。なんかあつたらとにかく言ってくれよ」

「うん！」



未だに声だけしか聞こえないが、言葉をおかわすことができるからこそ、美耶子はこの上なく嬉しかった。これまでで見ていることしか出来なかつた恭也の役に立てる。自分が無間地獄に引きずり込んだ罪に、報いることができるのだから。

恭也は息を整え、啓蒙がもたらした知識により長銃に水銀の弾丸を再装填する。啓蒙とやら、気味の悪い湧きあがる知識ではあるが、異界に存在した何かしらを利用してこれまででもリスクを承知で使ってきた。いつとき己に流れ込んだ赤い水。そして美耶子から分けられた血による不死性。彼らは前に進むしか無い。それがどれだけ、先のないことだとしても。

チリン、チリン、とどこからとも無く聞こえて来る鐘の音。耳を済ませるよりも先に走り出した恭也は、相棒の視界からもたらされる赤い流れに従って先を進んでいった。やたらと階段が多く、建物の中を通り抜ける複雑な地形は何を思つて建造されたものだろうか。

先程みたア<sup>ア</sup>モンド<sup>ン</sup>頭の怪<sup>ド</sup>物<sup>ズ</sup>が張り付いた階段を通り抜け、しばらく進んでいけば、やはり見たことのある景色だった。アデーラ、狩人と一緒にヤーナムの聖堂街へと戻る道を探していた場所。大きな豚が跋扈する大階段が特徴的な広場だ。

だが見覚えのある場所に、見覚えのない生物が増えていた。先程からチラホラと見かける、妙に赤く染まつた幻影のような獣狩りの民衆。そして、棺から飛び出た人間の

パーツが積み重なった肉塊。

辟易する化け物ばかりで、救われない。

「全部ぶっ壊す。こんな所」

一度来たから、ここには求めるものがないのはわかっている。

長銃を背中に仕舞い、宇理炎を握る。

突き出した煉獄の炎は、焰雜と違う滅びの炎。

広場を明るく照らした異界の理は、先を進む狩人を振り返らせた。

ノコギリ鉋に滴る血が、風に煽られ地面に落ちた。

己が通ってきた広場から、異質な熱を感じる。

陰鬱な街を照らす明かりは、いつぞやに見たことがあった。あまりにも苛烈な炎がこのヤハグルの雄大な建造物の陰影を強め、火柱を立ち上らせている。この秘匿が消え失せたヤハグルには、求めてやまない情報や、使えそうな物資も含めて得られるものが多く、寄り道で時間を浪費していたが、それが今の自分にとって幸運になったらしい。

狩人が踏み入れようとして目を向ける先。そこには確かになにもない筈なのに、心臓

を嫌に突き刺す淀んだ予感がしてやまない。これまでの戦いを幾度となく夢としてきた狩人であったが、この度に相對するモノは、獣ではないという妙な確信を持つていた。狩人は未だに「人」のままであった。

記憶のすべてを亡くし目覚めてからというものの、自筆であること以外は何もかもが不明なメモに書かれた「青ざめた血」を探してこのヤーナムをさまよっていた。人間的で困惑も顕にした小市民じみた仕草は、いつの間にか「狩人」としての振る舞いに代わり、冷徹なまでに戦うようになっていた。

重ねて思い出す。戦ったことすら無い素人であり、気取った口調も馴染まぬ一市民しかなかつたはずなのに。記憶がなくとも、最初期の人格は間違いなく狩人などという強者ではなかつた。

その性根が、人として感じられる最大の警鐘が、啓蒙とやらの陶醉を超えて足を止めさせる。この先に進むと後戻りはできないのだと。

故に、後方の炎を目にした狩人はこの場にて、彼らを待つという選択肢を取った。

近くに落ちていた頭蓋に絡まるナメクジ共を踏み潰し、薄汚れたレンガの壁を背により掛かる。おもむろに酒混じりの血液を取り出し、口に含んだ。生臭く鉄臭いはずのそれを甘美に感じながら、思考と体を落ち着かせる。

血液は狩人としての体を滾らせ、僅かな酒精は人としての乾いた心をほんのちよつび

りだが潤していく。

飲み干し、吐き出した息は霜となる。

空の瓶を持ったまま白く立ち上って消えていくそれを見届け、目を瞑った。

「貴公らが間に合って、良かった」

他でもない自分自身に向けた言葉は、紛れもなくこの狩人が弱い人のままであることを表していた。

あたりに散らばる無数の屍を築き上げた彼が、未だに弱いままであることを。